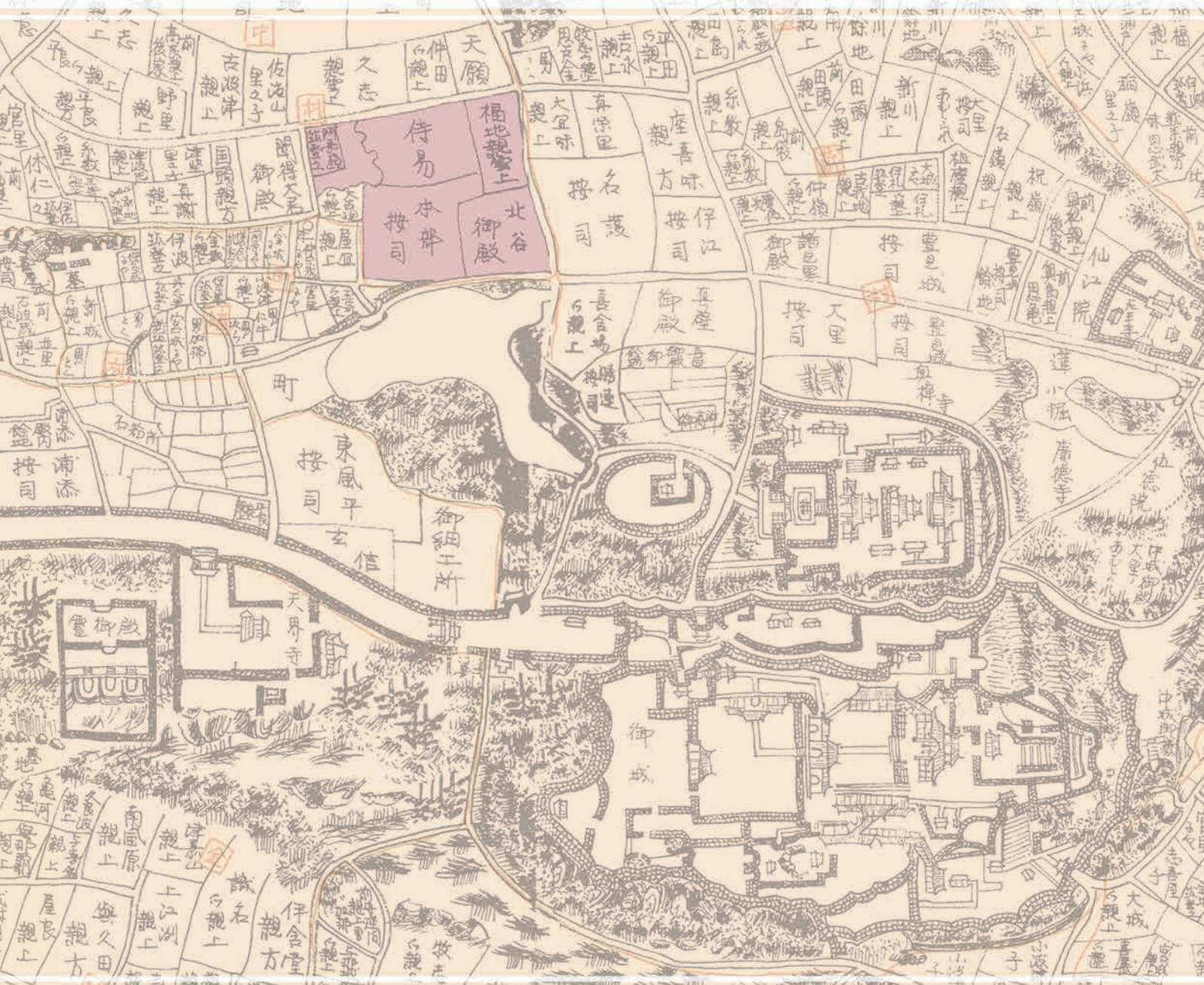


中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7) —



平成31(2019)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書 (7) —



中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（7） —

平成31（2019）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 26（2014）年度に遺構確認調査を実施し、その成果を平成 29（2017）年度、平成 30（2018）年度にまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されました。1870（明治 3）年に今回の調査対象となった大中町に新たに造営が開始され、1875（明治 8）年に移転します。そして、1879（明治 12）年の琉球処分を経て、1945（昭和 20）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地にありました。

発掘調査は県営首里城公園整備を目的として、平成 19（2007）年度より遺構確認調査として開始され、平成 26（2014）年度は 6 本のトレンチを設けて行いました。これによって、溝や建物基礎の栗石、砂利道、池などの遺構が良好な状態で遺されていることがわかりました。また、これに伴い、中国や日本各地で焼かれた陶磁器が多数出土しているほか、戦後に使用されたガラス瓶なども出土しています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県における琉球王府時代末期から戦後の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成 31（2019）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 登川 安政



巻頭図版 1 調査区全景（南から）



巻頭図版 2 調査区全景（東から）



巻頭図版3 トレンチ1石列1(北から)



巻頭図版4 トレンチ2石列2(南から)



巻頭図版5 トレンチ3石列3(南から)



巻頭図版6 トレンチ4溝1(北から)



巻頭図版7 トレンチ6全景（南から）



巻頭図版8 トレンチ6全景（東から）



巻頭図版9 トレンチ6溝・集石（西から）



巻頭図版10 トレンチ6溝近景（西から）



巻頭図版 11 トレンチ6 池状遺構（南から）



巻頭図版 12 トレンチ6 池状遺構（西から）

例 言

- 1 本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 26（2014）年度に実施した中城御殿跡の埋蔵文化財発掘調査成果を平成 29（2017）年度および平成 30（2018）年度に資料整理作業を行い、まとめたものである。
- 2 本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課（平成 23 年度以前）が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 資料整理作業にあたり、調査体制の項目で記した方々に資料の同定・整理作業を賜った。記して謝意を表したい。
- 4 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
- 5 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を使用した。
- 6 本報告書に掲載した白黒の航空写真（第 3 図）は、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室所蔵の 1944 年 4 月 2 日米軍撮影（CV20-103-63）中城御殿周辺を複写した。
- 7 本書に掲載した中城御殿屋根伏図（第 4 図）や間取復元図（第 5・6 図）は、中城御殿跡地整備検討委員会資料〔沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課提供〕を用いた。
- 8 本報告書の編集は調査体制の項目で記した多くの方々の協力のもと田村薫が行い、各章の執筆は下記のとおり行った。

田村 薫：第 1・2 章、第 3 章第 1 節～第 3 節、第 4 節 7～10、12～17、第 4 章
奥平大貴：第 3 章第 4 節 1～6、11、18、19
- 9 本報告書に掲載された検出遺構の写真撮影は、山本正昭が行い、出土遺物の写真撮影は領家範夫、伊禮若奈が行った。
- 10 本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、沖縄県立博物館・美術館の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。
- 11 各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめて掲載した。
- 12 発掘調査で得られた出土遺物及び実測図、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

巻頭図版

例 言

第 1 章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 発掘作業の経過	3
第4節 資料整理作業の経過	3

第 2 章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7

第 3 章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査概要	12
第2節 層序	16
第3節 遺構	20
第4節 出土遺物	42
1 中国産青磁	42
2 中国産白磁	46
3 中国産青花	48
4 中国・タイ産褐釉陶器	54
5 その他の輸入陶磁器・洋食器	58
6 本土産陶磁器	62
7 沖縄産施釉陶器	70
8 沖縄産無釉陶器	76
9 陶質土器	80
10 土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器	82
11 円盤状製品	86
12 金属製品	90
13 煙管	92
14 骨製品	94
15 ガラス玉・ガラス製品	96
16 石器・石製品・石造製品・基石	98
17 瓦・埴・板状瓦製品	100
18 銭貨	104
19 その他の遺物	106
出土遺物集計表	108

第 4 章 総 括

引用・参考文献	126
報告書抄録	131

挿図目次

第 1 図	沖縄本島の位置図	5	第 22 図	中国・タイ産褐釉陶器	56
第 2 図	中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡	6	第 23 図	その他の輸入陶磁器・洋食器	60
第 3 図	中城御殿古写真と首里古地図の重ね図	8	第 24 図	本土産陶磁器1	64
第 4 図	中城御殿屋根伏図	9	第 25 図	本土産陶磁器2	66
第 5 図	中城御殿間取り復元図①	9	第 26 図	本土産陶磁器3	68
第 6 図	中城御殿間取り復元図②	10	第 27 図	沖縄産施釉陶器1	72
第 7 図	中城御殿発掘調査区・建物配置想定図	12	第 28 図	沖縄産施釉陶器2	74
第 8 図	層序	18	第 29 図	沖縄産無釉陶器	78
第 9 図	遺構全体平面図	25	第 30 図	陶質土器	81
第 10 図	トレンチ6遺構全体平面図	27	第 31 図	土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器	84
第 11 図	トレンチ1遺構（石列1・集石1）	29	第 32 図	円盤状製品サイズ別出土状況	87
第 12 図	トレンチ2遺構（石列2）	31	第 33 図	円盤状製品	88
第 13 図	トレンチ3遺構（石列3・集石2）	32	第 34 図	金属製品	91
第 14 図	トレンチ4遺構（溝1・石列4）	34	第 35 図	煙管の部位名称	92
第 15 図	トレンチ6遺構①（集石3）	36	第 36 図	煙管	93
第 16 図	トレンチ6遺構②（溝2、溝3、溝4、砂利道）	38	第 37 図	骨製品	95
第 17 図	トレンチ6遺構③（池状遺構）	40	第 38 図	ガラス玉	97
第 18 図	中国産青磁	44	第 39 図	石器・石製品・基石	99
第 19 図	中国産白磁	47	第 40 図	瓦	102
第 20 図	中国産青花1	50	第 41 図	銭貨	105
第 21 図	中国産青花2	52	第 42 図	その他の遺物	107

表目次

第 1 表	中城御殿跡関連年表	11	第 18 表	ガラス製品観察一覧	96
第 2 表	主要層序一覧	17	第 19 表	石器・石製品観察一覧	98
第 3 表	中国産青磁観察一覧	43	第 20 表	基石観察一覧	98
第 4 表	中国産白磁観察一覧	46	第 21 表	瓦部位別重量（大和系瓦）	100
第 5 表	中国産青花観察一覧1・2	48	第 22 表	瓦部位別重量（明朝系瓦）	101
第 6 表	中国・タイ産褐釉陶器観察一覧	55	第 23 表	瓦観察一覧	104
第 7 表	その他の輸入陶磁器・洋食器観察一覧	59	第 24 表	銭貨観察一覧	104
第 8 表	本土産陶磁器観察一覧1・2	62	第 25 表	その他の遺物観察一覧	106
第 9 表	沖縄産施釉陶器観察一覧1・2	70	第 26 表	中国産青磁出土状況	108
第 10 表	沖縄産無釉陶器観察一覧	77	第 27 表	中国産白磁出土状況	108
第 11 表	陶質土器観察一覧	80	第 28 表	中国産青花出土状況	109
第 12 表	土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器観察一覧	83	第 29 表	中国・タイ産褐釉陶器出土状況	109
第 13 表	円盤状製品観察一覧	87	第 30 表	その他の輸入陶磁器出土状況	110
第 14 表	金属製品観察一覧	90	第 31 表	本土産陶磁器出土状況1・2	111
第 15 表	煙管観察一覧	92	第 32 表	沖縄産施釉陶器出土状況1・2	115
第 16 表	骨製品観察一覧	94	第 33 表	沖縄産無釉陶器出土状況	117
第 17 表	ガラス玉観察一覧	96	第 34 表	陶質土器出土状況1・2	118

第 35 表	土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器出土状況	120	第 41 表	石器・石製品・滑石製品・石造製品出土状況	122
第 36 表	円盤状製品出土状況	121	第 42 表	基石出土状況	123
第 37 表	金属製品出土状況	121	第 43 表	磚・煉瓦出土状況	123
第 38 表	煙管出土状況	122	第 44 表	銭貨出土状況	123
第 39 表	骨製品・貝製品出土状況	122	第 45 表	その他の遺物出土状況	123
第 40 表	ガラス玉・ガラス製品出土状況	122			

図版目次

図版 1	昭和 20 年代の中城御殿跡	7	図版 20	その他の輸入陶磁器・洋食器	61
図版 2	建設中の琉球政府立博物館	7	図版 21	本土産陶磁器 1	65
図版 3	完成直後の琉球政府立博物館	7	図版 22	本土産陶磁器 2	67
図版 4	トレンチ設定状況	13	図版 23	本土産陶磁器 3	68
図版 5	作業経過写真①	14	図版 24	本土産陶磁器 4	69
図版 6	作業経過写真②	15	図版 25	沖縄産施釉陶器 1	73
図版 7	層序	19	図版 26	沖縄産施釉陶器 2	75
図版 8	トレンチ 1 遺構 (石列 1・集石 1)	30	図版 27	沖縄産無釉陶器	79
図版 9	トレンチ 2 遺構 (石列 2)	31	図版 28	陶質土器	81
図版 10	トレンチ 3 遺構 (石列 3・集石 2)	33	図版 29	土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器	85
図版 11	トレンチ 4 遺構 (溝 1・石列 4)	35	図版 30	円盤状製品	89
図版 12	トレンチ 6 遺構① (集石 3)	37	図版 31	金属製品	91
図版 13	トレンチ 6 遺構② (溝 2、溝 3、溝 4、砂利道)	39	図版 32	煙管	93
図版 14	トレンチ 6 遺構③ (池状遺構)	41	図版 33	骨製品	95
図版 15	中国産青磁	45	図版 34	ガラス玉・ガラス製品	97
図版 16	中国産白磁	47	図版 35	石器・石製品・基石	99
図版 17	中国産青花 1	51	図版 36	瓦	103
図版 18	中国産青花 2	53	図版 37	銭貨	105
図版 19	中国・タイ産褐釉陶器	57	図版 38	その他の遺物	107

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦によりその殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和31（1956）年に園比屋武御嶽を嚆矢として整備を開始する。その後、同委員会は昭和45（1970）年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和47（1972）年に本土復帰を果たす。その一環で同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。その調査成果により、今日まで多くの建造物が復元を見ることができ、一般に公開されている。

今回報告する中城御殿跡の遺構確認調査は、昭和63（1988）年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした調査で、平成19（2007）年度から沖縄県土木建築部より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施している。

調査にあたっては、予算分任元である沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課に対して予算要求を行い、調査開始後には文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化課へ着手報告を行った（平成26年6月17日付 埋文第227号）。

また、調査終了後には終了報告を行うとともに（平成27年1月5日付 埋文第580号）、発見された埋蔵文化財（出土品）の内訳・数量の報告を行った（平成27年1月5日付 埋文第581号）。

第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成26（2014）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成29（2017）年度及び平成30（2018）年度に実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

平成26（2014）年度（発掘調査）

事業主体	沖縄県教育委員会
	教 育 長 諸見里 明
事業所管	沖縄県教育庁文化課
	課 長 嘉数 卓
	記念物班 班 長 金城 亀信
	主任専門員 長嶺 均
事業総括・実施	沖縄県立埋蔵文化財センター
	所 長 下地 英輝
	副 参 事 島袋 洋
	調査班 班 長 盛本 勲
	主任専門員 山本 正昭

発掘調査作業 文化財調査嘱託員 天久瑞香、新垣有一郎、崎原盛俊
発掘調査作業員 安里勝則、翁長しのぶ、島仲恵子、杉浦健治、玉寄守郎、
知名雪美、樋口光子、嶺井多津美、桑江利尚、新垣正秀

平成 29 (2017) 年度 (資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
教 育 長 平敷 昭人

事業所管 沖縄県教育庁文化課
課 長 萩尾 俊章
記念物班 班 長 上地 博
主任専門員 羽方 誠

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 金城 亀信
調査班 班 長 仲座 久宜
主 任 宮城 淳一
専 門 員 田村 薫

資料整理作業

文化財調査員 平良悟、高原彬浩、仲嶺真太
資料整理作業員 大村由美子、島千香子、照屋芳美、當真香、徳本加代子、
渡慶次学、富平砂綾子、仲間文香、根岸敦子、比嘉美智子

平成 30 (2018) 年度 (資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
教 育 長 平敷 昭人

事業所管 沖縄県教育庁文化課
課 長 濱口 寿夫
記念物班 班 長 仲座 久宜
主任専門員 羽方 誠

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 登川 安政
調査班 班 長 中山 晋
専 門 員 田村 薫、奥平 大貴

資料整理作業

文化財調査員 久場大暉、高原彬浩、外間裕一
資料整理作業員 伊禮若奈、大城友理華、大村由美子、島千香子、照屋元子、
當真香、仲村綾乃、根岸敦子、比嘉美智子

第3節 発掘作業の経過

平成26(2014)年度発掘調査は、6月2日(月)から12月22日(月)までの136日間に渡り、約450㎡の範囲で調査を行った。平成26年度調査の目的は、御殿の北側一帯を構成していた御内原地区の、かつて寄満、御寝廟殿、北之御殿、女中部屋、女中居間、炭御蔵といった建物が所在していた区域に埋蔵する遺構の残存状況の確認とした。

まず、6月2日より発掘調査作業員を10名雇用し、敷地内の除草作業を行うと同時に現場事務所(ユニットハウス)を設置し、その後発掘作業で使用する道具類を搬入し、現場作業の準備を整えた。

6月5日より、除草作業が完了した地点から順に調査区設定を行い、6月12日より重機による表土掘削を開始し、並行して不発弾探査目的の磁気探査業務を委託し、探査を実施した。この結果、鉄筋や番線、鉄パイプなどの金属片が30点確認されたが、不発弾は確認されなかった。重機による掘削後は作業員を投入し表土の清掃を行い、徐々に遺構や層の状況が明らかになってくる。

トレンチ1～5は旧県立博物館建物の真下にあたり、基礎部分の遺構は破壊されているものの、中城御殿の構造物と思われる遺構が検出されている。

トレンチ1～4の中から、地表面より40cm以降新御殿に関する遺構と思われる石列や溝など、建造物の範囲を考える上で必要となる遺構資料が確認された。大部分は破壊されているものの、溝などが部分的にトレンチ内に点在している状況であった。その後、北西側の炭御蔵を確認する目的で9月よりトレンチ6を設定した。トレンチ1～5と同様、重機による表土掘削と磁気探査を行い、地表面から約1mの深さより、炭御蔵の基礎部分と考えられる根固めの集石遺構や、溝、砂利道などを検出した。

調査開始時は気温が高く、日差しも強いことから遮光ネットによる日除けを設置し、日の傾きにあわせて移動しつつ発掘を行った。遺構の記録作業は随時写真(35mm判カラー、カラーリバーサルフィルム、白黒フィルム、ブローニー判カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ)、実測により行い、雨天時には遺物洗浄作業を行った。また、調査中に台風に見舞われ、接近前には調査区及び現場事務所の台風対策を行い、通過後は被害の有無を確認後、清掃を行った。その後、調査区に溜まった水を汲み出し調査を再開した。

なお、調査終盤には高所作業車による空撮を実施した。調査終了後には、ブルーシートで覆ったのちに土砂を投入し埋戻しを行った。

第4節 資料整理作業の経過

調査報告書の刊行に向け、平成29(2017)年度及び平成30(2018)年度に資料整理作業を実施した。出土遺物の洗浄は平成26(2014)年度の現場の雨天時にほぼ終了していたことから、遺物の整理作業は層序や遺構の関係を确认后、注記作業から開始した。

その後、順次分類、接合、図化対象遺物の抜き出しを行い、図化、トレース、図版作成、写真撮影を行った。また、整理作業中には随時、有識者に陶磁器や金属製品に関する検討・分析を依頼するとともに、比較資料収集として各地で調査を行った。

これらの作業と並行して、遺構図・土層図等のトレース後、発掘現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆ののち編集後、随意契約により印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は明治3（1870）年に現在の首里大中町に移転することが決まる。ここでは今回の調査対象となる移転後の環境について記すことにする。

中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯 26° 13′ 15″、東経 127° 43′ 05″、標高約 100 m の台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町 1 丁目 1 番 1～3 にあたる。

この基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世（180-160 万年前～1 万年前）に区分される琉球石灰岩で、敷地西側の上之御殿が存在した地区においては、拝所及び庭園でその露頭が確認できる。またその下位には、鮮新世（500 万年前～160 万年前）から中新世（2,300 万年前～500 万年前）に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から泉として湧き出すことになる。この湧水を利用した井泉・樋川は、現在も首里の各地に点在するほか、中城御殿の古写真においても確認でき、今日も豊富な湧水量を誇っている。

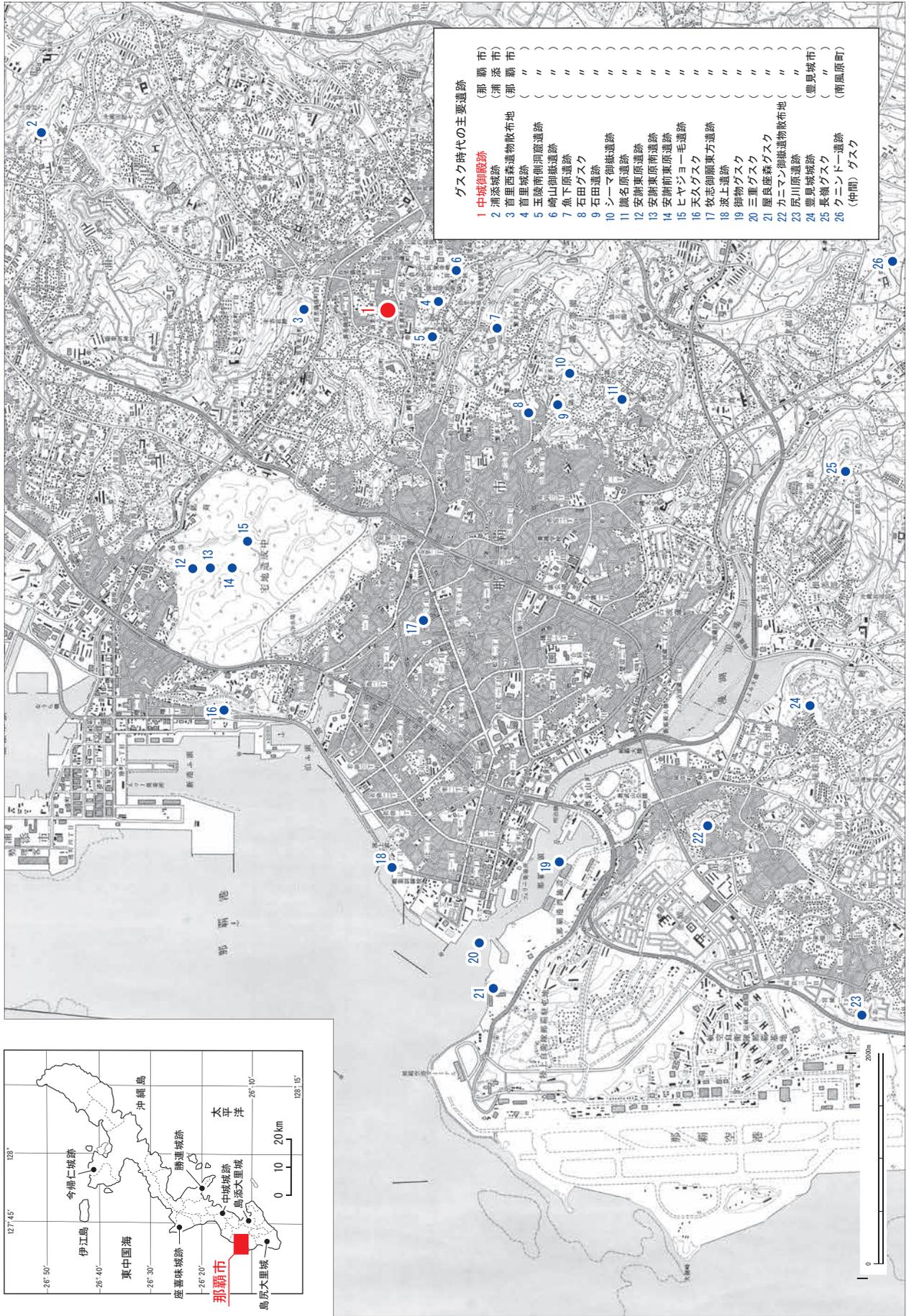
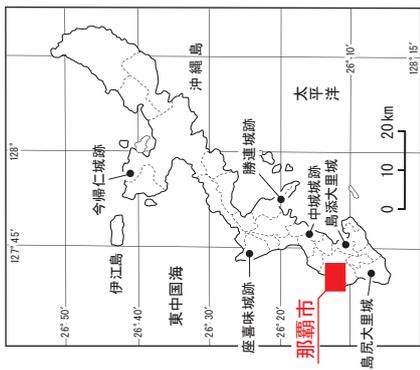
中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高い形状をなすが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡すことはできない。しかし、上之御殿が建つ西側は石牆で区画され小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島影を望むことができる。

この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713 年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を觀るに、国都の高処に発祖し、最も好し」（球陽 688 号 球陽研究会編 1974）と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ嶽は発祖としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである（都築昌子 2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、1868 年に久米村の地理師である与儀親雲上ら 3 人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされ（球陽 2206 号 球陽研究会編 1974）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。



第1図 沖縄本島の位置図



- グスク時代の主要遺跡
- 1 中城御殿跡 (那覇市)
 - 2 浦添跡跡 (浦添市)
 - 3 首里高森遺物散布地 (那覇市)
 - 4 首里城跡 (")
 - 5 五波前河原跡跡 (")
 - 6 崎山御城跡跡 (")
 - 7 魚下跡跡 (")
 - 8 石田跡跡 (")
 - 9 石田跡跡 (")
 - 10 シーメ御城跡跡 (")
 - 11 藤名跡跡 (")
 - 12 安東原跡跡 (")
 - 13 安東原跡跡 (")
 - 14 安東原跡跡 (")
 - 15 ヒヤシヨ一毛跡跡 (")
 - 16 ヒヤシヨ (")
 - 17 牧志御殿東方跡跡 (")
 - 18 波上跡跡 (")
 - 19 御物グスク (")
 - 20 三重グスク (")
 - 21 屋敷森グスク (")
 - 22 カニマン御城遺物散布地 (")
 - 23 原川跡跡 (")
 - 24 豊見城跡跡 (豊見城市)
 - 25 長嶺グスク (")
 - 26 クニントー跡跡 (南風原町)
- (中間) グスク

第2図 中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡

第2節 歴史的環境

中城御殿は、国王の世子殿として、当初は尚豊王代（在位 1621～1640年）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された（第1表）。その後、明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治3（1870）年に着工、明治7（1874）年3月に竣工し、尚典は明治8（1875）年に移転した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

中城御殿の敷地は3,408坪（11,246㎡）で、そのエリアは東西に大きく二分することができる。東側は主要な建物が群立する約2,400坪の区域で、20棟以上の建造物が密接して軒を連ねていた（第3図）。これに対し、西側は約1,000坪の区域で、巨木が鬱蒼と茂る中に上之御殿が1棟建ち、周辺は自然の岩盤を利用した庭園や、大岩を取り囲むように石造の螺旋階段を設置した拝所のほか、御射場と称される弓場が存在した。

そして、明治12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖繩分遣隊により占拠される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明治18（1885）年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿所蔵の宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなどの避難措置を執った。しかし、昭和20（1945）年4月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難した宝物類は残されていなかったため、建物とともに焼失したか、米軍により戦利品として持ち去られたことが考えられる（その一部は1947年にフィリピンから、1953年にアメリカから返還）。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる（沖縄県立博物館1996）。それまでの間、御殿は尚家の屋敷（尚侯爵邸）として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされる。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され（図版1）、のちに龍潭東側にあった博物館



図版1 昭和20年代の中城御殿跡



図版2 建設中の琉球政府立博物館



図版3 完成直後の琉球政府立博物館

を移転するため、琉球政府により買い上げられる。そして昭和40（1965）年から翌年にかけて、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され（図版2）、昭和47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

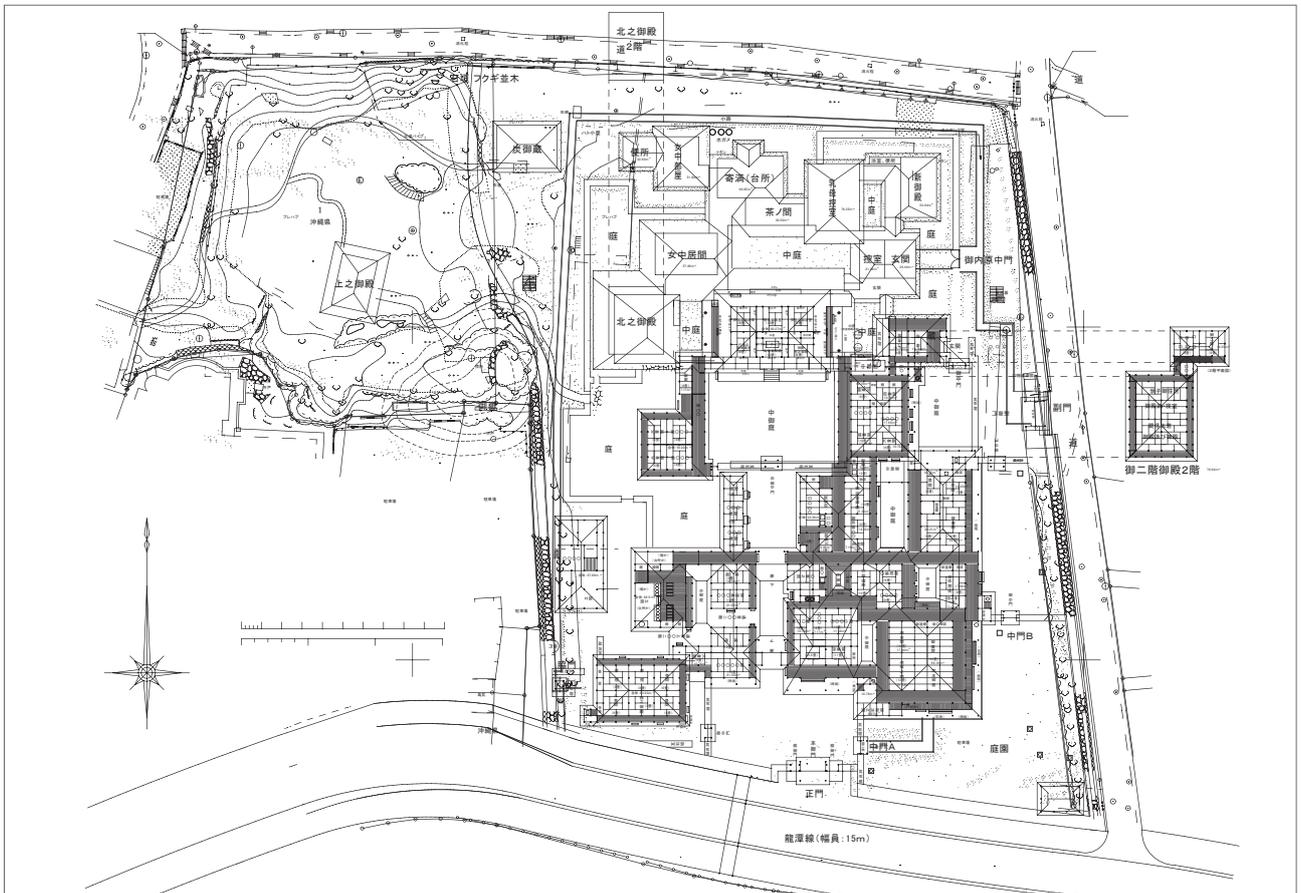
この本土復帰から20年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。復元に先立ち平成3（1991）年度、平成4（1992）年度、平成6（1994）年度の3次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積み根石や石組み遺構、ピット等の遺構を検出し、平成4（1992）年に正面及び東側石牆の復元整備が行われた（沖縄県立博物館1993、1994、1995）。その後、博物館は開館から40年が過ぎ、施設の老朽化及び収蔵機能の低下に伴い新館への移転が計画され、平成18（2006）年3月に休館、平成19（2007）年3月に閉館・移転し、同年11月3日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成21（2009）年の解体工事により撤去された。博物館移転後は、平成19（2007）年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われ、現在に至る。



第3図 中城御殿古写真と首里古地図の重ね図



第4図 中城御殿屋根伏図



第5図 中城御殿間取り復元図①

第1表 中城御殿跡関連年表

西暦	元号	事項
1621～40年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1864年	尚泰 17/ 元治元年	尚典（のちの中城王子）が生まれる
1866年	尚泰 19/ 慶応2年	尚泰王が冊封をうける
1868年	尚泰 21/ 明治元年	尚典が尚泰王の世子となる
		久米村の与儀親雲上を福州に派遣して風水を学ばせ中城御殿の風水見を行う
1870年	尚泰 23/ 明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1872年	尚泰 25/ 明治5年	琉球藩設置
1874年	尚泰 27/ 明治7年	中城御殿竣工
1875年	尚泰 28/ 明治8年	中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰 32/ 明治12年	3月 廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
		5月 尚泰・尚典ともに上京し東京麹町に屋敷を賜り華族となる
1880年頃	—	尚泰子女の安室御殿が離縁のため中城御殿へ移り住み最後の間得大君として御殿の神事に奉仕する
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1901年	明治34年	尚泰逝去し玉椋に葬られる
1906年	明治39年	尚典帰郷し中城御殿で暮らす
1917年	大正6年	尚昌の長女 文子が生誕する
1920年	大正9年	尚典57歳で没し玉椋に葬られる
		尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住む
		このころ尚文子が中城御殿を訪れる
1921年	大正10年	東宮殿下（のちの昭和天皇）来訪にあたり事前に大広間が洋間に改装される
		3月4日 東宮殿下が来県し中城御殿を訪問する
1922年	大正11年	尚泰夫人の松川御殿が中城御殿で逝去する
1923年	大正12年	鎌倉芳太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1932年	昭和7年	尚典子女の今帰仁御殿が安室御殿（間得大君）を継ぐため北之御殿に移る
1933年	昭和8年	尚文子が来訪し新御殿に滞在する
1934年	昭和9年	田邊泰が来訪する
		尚典夫人の野嵩御殿が逝去する
1936年	昭和11年	尚昌義姉の津軽照子が来訪する
1937年	昭和12年	尚文子が井伊家に嫁ぐ
1939年	昭和14年	日本民芸協会の柳宗悦・坂本万七らが来訪する
1944年	昭和19年	第32軍司令部参謀の長野英夫少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する
		10月10日 米軍による空襲により旧那覇市の9割が焼失する（十・十空襲）
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあげて炎上する
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵（肖像画）を御嶽岩のうしろに移す
		4月10日頃 日本軍が上之御殿や防空壕などを機関銃陣地にする
		戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する
		7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する（1966年まで）
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1959年	昭和34年	井伊文子が中城御殿跡を訪れる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地を購入する
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス（1951年に民営化）が当蔵へ移転する
		10月 米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の博物館新館を建設する
		龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転し11月に開館する
1972年	昭和47年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	沖縄県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査が実施される
1992年	平成4年	沖縄県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査が実施される
1994年	平成6年	沖縄県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査が実施される
2004年	平成16年	井伊文子逝去し伊是名玉椋に葬られる
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転するため休館する
2007年	平成19年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が開始される

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査概要

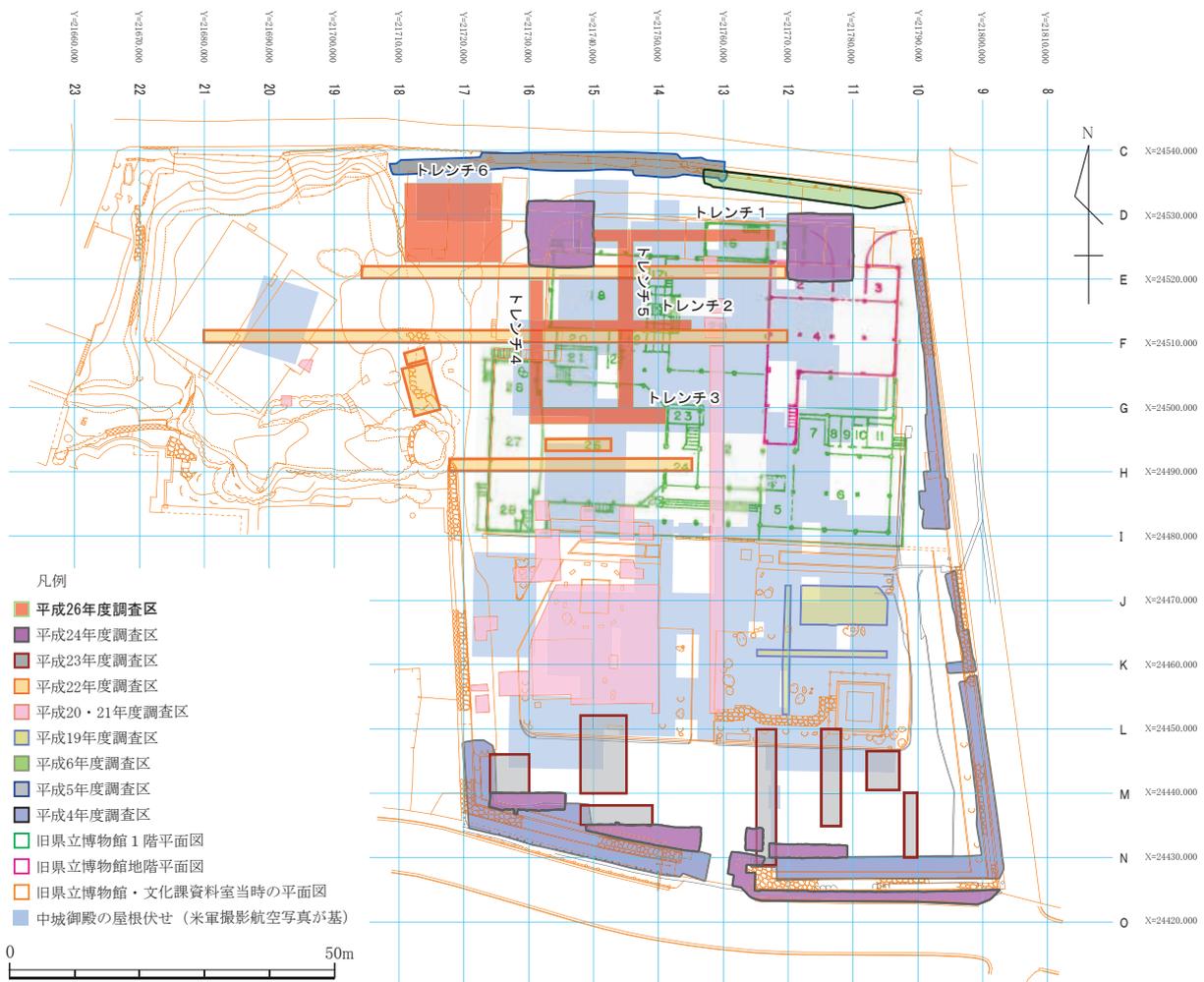
平成26年度の調査区は、平成19年度の調査開始時に設定した10m四方のグリッドに基づき、御内原と北之御殿周辺に6本のトレンチを設けて実施した。各トレンチの設定は次のとおりである（第7図）。

トレンチ1～5

中城御殿跡の北西側一帯に東西方向に3本のトレンチを設けた（北からトレンチ1・2・3）。かつて寄満、御寝廟殿、北之御殿、女中部屋、女中居間といった建物が所在していた区域にあたる。また、県立博物館当時は、自然史展示室と中庭、地下収蔵庫が設置されていた。トレンチ4及び5については、トレンチ1・2・3及び平成22年度調査区を南北に縦断する形で設置し、残された遺構の状態をより詳細に把握する目的で調査を実施した。

トレンチ6

御内原と上之御殿の境界付近北側にて、東西13m、南北11mのトレンチを設定した。かつて炭御蔵があったとされる地点で、付近には上之御殿の東端と考えられる石牆も残っている。



第7図 中城御殿発掘調査区・建物配置想定図



1. トレンチ設定状況①(南から)



2. トレンチ設定状況②(東から)

図版4 トレンチ設定状況



1. 現場草刈り前現況



2. 伐開作業



3. トレンチ設定作業



4. 磁気探査作業



5. トレンチ1重機掘削作業



6. トレンチ1遺構検出



7. トレンチ2遺構検出



8. トレンチ3遺構検出

図版5 作業経過写真①



1. トレンチ4遺構検出



2. トレンチ6遺構検出



3. 遺物洗浄作業



4. 遺構実測作業風景



5. 現場説明会（遺構解説）



6. 現場説明会（遺物解説）



7. 台風通過後水抜き作業



8. 埋戻し作業

図版6 作業経過写真②

第2節 層序

平成26年度調査区の層序は、基本的に平成22年度調査から設定している層序を踏襲し、基本層序第Ⅰ層～第Ⅴ層までを設定している。しかし、平成26年度調査においては、これまで第Ⅲ層としてきた中城御殿造成層を三分し、第Ⅲa層、第Ⅲb層、第Ⅲc層として追加した。また、第Ⅳ層としてきた中城御殿以前の層を二分し、第Ⅳa層、第Ⅳb層として追加した。平成26年度の調査区においては、博物館建物建設の際に岩盤まで攪乱が及んでいることもあり、地山層である基本層序第Ⅴ層が検出されていない。なお、各層の概要は第2表に一覧を示した。

第Ⅰ層：表土、攪乱層。おもに戦後の開発により攪乱された層や持ち込まれた土砂を指す。県立博物館解体後の造成土も含まれ、コンクリート片や鉄筋類を多く含むが、攪乱により混入した中城御殿当時の遺物も多数含まれる。これらの遺物は、表土除去の最中にⅠ層の遺物として回収した。

主な遺物：攪乱層が主体であることから、新旧の遺物が多数混在している。古手の遺物としては、15世紀代の青磁や白磁のほか、17世紀以降の肥前磁器などが含まれるが、大半は沖縄産の無釉陶器である。これらの遺物から、本遺跡の変遷を見ることができるとともに、戦災やその後の開発により、大きく改変されたことを窺い知ることができる。特徴的な遺物として、トレンチ6の池状遺構で使用されたモルタル片と暗渠に使用された陶管をあげる。モルタル片は、大正～昭和初期にかけて使用され、沖縄でも比較的古いモルタルであると思われる。暗渠で使用された陶管はおそらく薩摩焼だと考えられる。

第Ⅱ層：戦中～終戦後の堆積層。中城御殿の遺構上に堆積する層で、中城御殿の瓦をはじめとする遺物が多く含まれる。また、地点によっては戦時中に被弾した穴を周辺の瓦礫や廃棄物で埋めたと思われる痕跡が確認されており、この堆積土もⅡ層とした。ここからは、終戦直後に使用されたと思われる靴や衣類、ガラス瓶類、金属製品が大量に出土している。

主な遺物：かつて中城御殿に葺かれた大量の瓦や、戦中～戦後に廃棄されたと思われるガラス瓶類、金属製品が多く含まれる。その中には戦前のある一定期間、全国各地で焼成された統制陶器や軍用食器が含まれている。

第Ⅱb層：中城御殿当時の遺構直上に堆積する層。第Ⅱ層に含まれるが、本層は被熱した状態で木炭を多く含み、破碎した遺物とともに、遺構表面を覆うように堆積している。この状況から、戦災により破壊された直後に堆積した層であることがわかる。本層は第Ⅱ層造成時に転圧され固くしまっており、その影響で含まれる遺物も破碎した製品が多い。

主な遺物：遺物は被熱して破碎した製品が大半である。明治以降に焼成された肥前や瀬戸美濃産の陶磁器が主体である。蓋付きの碗や小碗・急須類が多く、複数個体が確認されていることから、揃いで存在していたことがわかる。その他、青磁の衛生陶器も確認された。

第Ⅲ層：基本的に中城御殿を造営するために盛土造成した層を指す。この造成層には、近世以降の陶磁器が多数含まれる。土層は均質でなく、礫などの混入も規則性が見あたらない。また、陶磁器などの遺物も多数含まれることから、周辺の土砂をランダムに投入したことが想定できる。土質及び混入物からⅢa層、Ⅲb層、Ⅲc層に三分される。

主な遺物：造成層には近世以降の沖縄産陶器が多く含まれ、その中に中国や肥前産陶磁器がわずかに含まれる。中城御殿造営にあたり客土として持ち込まれた土砂に混入していた遺物であることが考えられる。

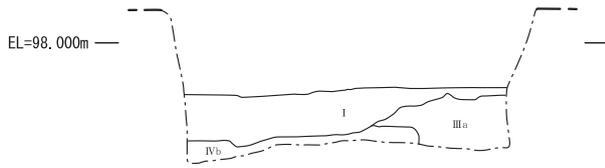
第Ⅳ層：中城御殿以前の生活層と考えられる層である。中城御殿が当地に移転する前には、首里古地図によると数件の土族屋敷が存在していたとされ、本層はこの時期のものと考えられる。遺物は近世以降の陶磁器が主体であるが、それ以前となる中世段階の陶磁器類もわずかながら散見でき、当地の変遷を物語っている。土質などからⅣa層、Ⅳb層に二分できる。

主な遺物：近世以降の沖縄産陶器や薩摩産陶器のほか、陶質土器が多い傾向にある。その中で沖縄産陶器は、胎土に白土を混入する初期沖縄産無釉陶器が多くみられる。その他中国や肥前産の陶磁器が含まれるが、福建など中国南部で焼成された青花が多くみられる。

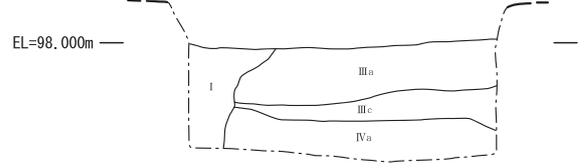
第Ⅴ層：平成19～22年度調査においては、地山として泥岩（クチャ）及び赤土（マージ）が確認されていたが、今回の調査では確認されなかった。

第2表 主要層序一覧

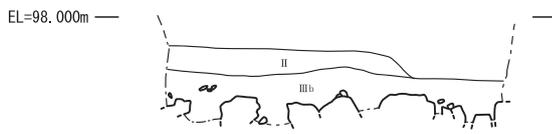
層序	層厚 (約・cm)	主な色調	主な出土遺物	年代	層・土質所見
Ⅰ層	30～170	暗褐色	多くは瓦・沖縄産の陶器で、その他金属製品、近・現代遺物が大量に出土。	現代	県立博物館やその解体後の造成土で、コンクリート片や鉄筋、埋設管用の砂、石灰岩礫・切石などが多く含まれる。
Ⅱ層	50～200	黒褐色・鈍い黄褐色	各地で焼かれた統制陶器やゴム・樹脂製品、ガラス、金属製品などの現代遺物が大量に含まれている。	沖縄戦直後	総じて砂質で大小の石灰岩切石・自然礫や木炭を含む。含まれる遺物から、終戦直後に周辺の瓦礫を被弾痕に投棄して整地したものであると思われる。
Ⅱb層	50～130	鈍い褐色・オリーブ褐色	溝などの遺構内や石畳直上に肥前や瀬戸・美濃産染付、色絵のほか、沖縄産施釉陶器が多くみられる。	近代～沖縄戦	砂質・砂利質の焼土や木炭を多く含む層であることから、沖縄戦により家屋が焼失した際の堆積層と思われる。
Ⅲ層	20～110	Ⅲa層 暗オリーブ褐色	造成土中に初期沖縄産無釉陶器や中国産青花のほか、肥前産染付や白磁が含まれている。	近代	中城御殿築造に係る造成層か、建物改修の際の層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
		Ⅲb層 暗褐色			
		Ⅲc層 灰白色			
Ⅳ層	30～50	Ⅳa層 暗オリーブ褐色	初期沖縄産無釉陶器や中国産青磁、白磁、青花のほか、肥前産染付や白磁が出土。	近世～近代	中城御殿以前の造成層か、土族屋敷が存在した頃の文化層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
		Ⅳb層 灰白色			
Ⅴ層	—	白色・黄白色	—	—	地山、岩盤。敷地北西一帯に分布するとみられる。白色で硬質、黄白色で軟質の石灰岩がみられる。



トレンチ1 サブトレ2 西壁



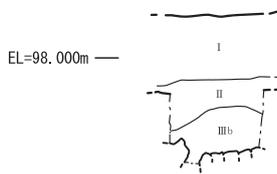
トレンチ5 (トレンチ3側) 南壁



トレンチ4 サブトレンチ北壁



トレンチ4 サブトレンチ南壁



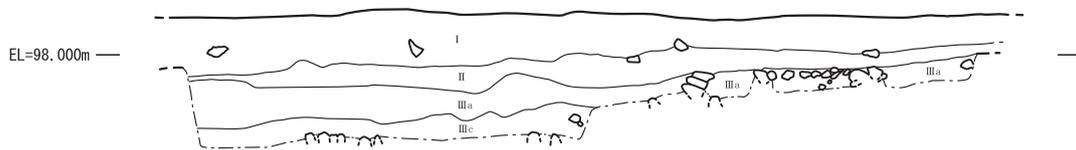
トレンチ4 サブトレンチ東壁



トレンチ6 砂利道遺構北壁



トレンチ6 畦南壁



トレンチ3 サブトレンチ北壁



第8図 層序



1. トレンチ1サブトレンチ2西壁



2. トレンチ2北壁



3. トレンチ3北壁



4. トレンチ4サブトレンチ西壁



5. トレンチ4サブトレンチ南壁



6. トレンチ4サブトレンチ北壁



7. トレンチ4南壁



8. トレンチ5南壁

図版7 層序

第3節 遺構

平成26年度の調査では、中城御殿の北側一帯を構成していた御内原地区を対象とし、トレンチ1～6の合計6本のトレンチを設けて遺構確認を行った（第9図）。トレンチの設定及び概略は、第3章第1節で示したが、ここではトレンチ毎に遺構の報告を行い、その解釈にあたっては往事の情報を照合しながら行った。なお、遺構の情報は文章で詳述し、続いて遺構図、写真を掲載した。各トレンチの遺構は次のとおりである。

1 トレンチ1

御内原の北側に東西28m、幅2mのトレンチを設定した。表土を除去したところ、遺構面はこれまでのレベルより低く検出され、その大半は破壊されたかのように思われた。表土の下には石列、集石が確認された。遺構ごとの報告を行う。

堆積

I・Ⅲa・Ⅳb層が認められる。表土から約80cm下まではI層が厚く堆積する。I層中には現代の遺物と共に中城御殿のものと思われる多量の遺物と共に赤瓦と炭が包含されている。当該層表面で集石遺構を検出した。Ⅲa層は厚さ約40cm堆積し、礫が大量に混入する。Ⅳb層は厚さ約40cm、粘土質で色調は灰白色、比較的小さな礫が混入する。Ⅲa層以下の層は南に向かってわずかな傾斜が見られ、その上のI層は戦後に傾斜を水平にするため造成事業を行ったと考えられる。近世から戦後にかけて造成事業が行われている。

遺構

石列1（第11図、図版8）

トレンチ1の東側より、1列の石列を検出した。南北方向120cmの範囲に8点の切石が残る。幅25～30cm、高さ8cmの板状の石を用いている。面として加工されているのは上面である。石列の周辺は戦後の攪乱によって破壊されている。石列は高さあまりなく、上面が平らに加工されていることから、溝の底石か、もしくは石畳の一部になる可能性がある。

集石1（第11図、図版8）

トレンチ1の中央より、集石1を検出した。それぞれの石は幅約20cm前後で、南北約1m、東西約60cmの範囲に広がる。性質は不明。

2 トレンチ2

御内原の中央に東西23m、幅2mのトレンチを設定した。旧県立博物館の建物基礎により、当時の床面がほとんど残っていない状況である。僅かに石列遺構が確認される。

遺構

石列2（第12図、図版9）

トレンチ2の東側より、1列の石列を検出した。幅約20～30cmの琉球石灰岩を並列しており、全長は検出範囲で東西に約120cmを測る。南向きに面が作られているが、加工は粗い。屋根伏せ（第4図）によると当地は女中居間と中庭の境界付近にあるため、基壇部分であることが想定できる。

3 トレンチ3

御内原の南側に東西 21 m、幅 2 m（一部拡張部 2.5 m）のトレンチを設定した。当該トレンチ中央付近で建物基壇となる切石の石列が検出され、中城御殿の中心となる施設、御寝廟殿の西端基壇の根石であることが考えられる。また、もう 1 基の石列は御寝廟殿と北之御殿を結ぶ渡り廊下の基壇根石であると考えられる。

堆積

I・II・III a・III c 層が認められる。現地表面から約 25cm まで I 層が堆積する。戦後の造成層であり遺物の年代に時期差がある。II 層が厚さ約 20cm で、中城御殿の床面造成層だと思われる。大小礫と共に赤瓦が混入する。III a 層は厚さ約 30cm、大量の炭と礫が混じり、明褐色の粘質土がブロック状に含まれる。III c 層は厚さ約 20cm。層中に III c 層と同様に明褐色粘土質のブロックがわずかに混入する。集石遺構の直下にみられるため中城御殿にかかる造成層だと考えられる。他の地点に比べて堆積の仕方が比較的的水平になっており、戦後に行われた博物館建物建設工事での破壊を免れたことが当該層から確認できる。遺構の残存状況も良好なことから、近世から現代にかけて造成事業が行われていることがわかる。

遺構

石列 3（第 13 図、図版 10）

南北方向に約 2 m、東西方向に約 3 m、L 字状の石列を当該トレンチ中央付近で検出した。石列は全て琉球石灰岩の切石を用い、北側と西側に面を有する。また、石列の南側と東側には 10～20cm の栗石が見られる。屋根伏せによると、南北方向に延びる石列は御寝廟殿と中庭の境界にあたる場所に位置しており、御寝廟殿の西端の基壇と想定できる。また、東西方向に延びる石列は御寝廟殿と北之御殿を結ぶ渡り廊下が存在していた位置にあるため、石列は廊下の下部遺構であることが考えられる。

4 トレンチ4

当該トレンチの北側にて石列遺構と溝状遺構が確認される。中城御殿に伴う排水遺構と考えられるが、屋根伏せと照らし合わせると、女中居間・寄満一帯や北之御殿に関係する遺構と想定できる。

堆積

I・II・III b 層が認められる。表土から約 40cm 下まで I 層が堆積する。II 層は厚さが約 30cm で大小礫、炭が多く混入する。III b 層は厚さ約 20cm、粘質微砂層で暗褐色、大粒の炭を多く含む。厚さ約 15cm で拳大の礫、赤瓦が混入する。中城御殿を築造するための盛土造成の層であり、瓦片も中城御殿築造時のものと考えられる。平成 22 年度の調査（トレンチ 4）において確認された層と比較すると新たに、基本層序の第 II 層が当該トレンチで確認できる。直下の第 III a 層は、標高は異なるが色調・混入物で判断した結果、平成 22 年度の調査時と比べ当該トレンチで検出した第 III 層の標高が高いことが確認できた。このことから、北に向かって標高が低く傾斜していることが窺える。近世から戦後にかけて造成事業が行われている。

遺構

溝 1（第 14 図、図版 11）

トレンチ 4 北側より検出した溝の一部と思われる遺構。大部分が配管などの設置により破壊されているが、東西方向に 2 か所残されている。東側部分は 1.5 m の範囲で検出し、配管を挟んで西側の部分では 1 m の範囲で検出している。幅約 25～50cm の琉球石灰岩の切石を並行して配置しており、い

ずれも面は北方向を向いている。底面は西側に4°程勾配しており、西へ排水することを目的としていることが考えられる。この溝は平成22年度調査時に検出した溝7につながるものと考えられ、その範囲を含めると15.5m程の長さになる。

石列4（第14図、図版11）

トレンチ4南側より石列を検出した。大部分は配管の設置などにより破壊されているが、東西方向に延びるものと考えられる。幅約25cm程の琉球石灰岩の切石を用いており、面は南向きになっている。屋根伏せと照らし合わせると、北之御殿の北端部分に位置しており、下部の基壇遺構であることが想定できる。

5 トレンチ5

御内原の中央に南北27m、幅2mのトレンチを設定した。旧県立博物館の建物基礎により、当時の床面がほとんど残っていない状況である。戦後の攪乱が著しく、遺構は確認されていない。

堆積

I・Ⅲa・Ⅲc・Ⅳa層が認められる。I層は厚さ約80cm、表土層。Ⅲa層は厚さ約30cm、大小礫を多く含む。当該層から集石・石列遺構の基層を検出した。Ⅲc層は厚さ約20cm、層中に大小礫と共に赤瓦も混入する。Ⅳa層は厚さ約20cm、層全体に比べ礫が多く混入する。博物館建物建設の際にトレンチ全体が攪乱の影響を受けているため、トレンチ3側での層序確認を行った。トレンチ3の東側で層が攪乱されていることが確認されており、当該層でも東側にその影響がみられる。

6 トレンチ6

トレンチ1の西、かつて炭御蔵があったとされる地点に東西13m、南北11mのトレンチを設定した。

3×4間規模の割栗地業を施した建物基礎遺構が検出され、かつて中城御殿北西部に所在した炭御蔵の遺構であることが確認された。また、その東側に隣接して砂利道跡が検出されている。道の縁に設置された石造り側溝遺構と、縁石である石列遺構、それに接して舗装土が確認された。更に注目される遺構としてはトレンチ南側から検出された池状遺構が確認されている。

堆積

Ⅱ・Ⅲa層が認められる。Ⅱ層は厚さ約10cm、通路の舗装面の可能性があり粘性が無い砂礫層である。Ⅱ層の表面に排水遺構などを検出したため、この層が中城御殿築造以降の層であると考えられる。Ⅲa層は厚さ約40cm、礫が多いが粘性があり、一部大量に炭が混入する、水平堆積した層である。中城御殿築造に係る造成土の可能性が考えられる。この層とほぼ同等の標高で排水遺構が検出されている。Ⅲa層で中城御殿を築造するために造成を行い、Ⅱ層でコーラルを使用して舗装を行ったと考えられる。このことから近代の造成事業だと考えられる。

遺構

集石3-1～11（第15図、図版12）

トレンチ6の中央～北側より検出した。いずれも直径約1mの範囲の中で、約5～15cm大の小礫が敷き固められており、集石同士は約1m程の等間隔で並び、南北軸に5列、東西方向に4列検出した。屋根伏せより、炭御蔵のあったとされる場所に位置しており、建物基礎遺構であると考えられる。

溝 2 (第 16 図、図版 13)

トレンチ 6 の東端より検出した。南北 3 m の範囲に広がるが、南北端及び西側は配管などの設置により破壊されている。石列部分は幅約 20 ～ 35cm 程度の琉球石灰岩の切石を並行して配置しており、面は全て西向きになっている。底石は幅約 20cm 前後の琉球石灰岩を用いており、上面を加工している。底石は北向きにわずかに傾斜しており、北方向へ排水していたと想定できる。また、西側の石列は破壊され、残存していないが、恐らくは後述する砂利道の西側縁石として機能していたと考えられる。

溝 3 (第 16 図、図版 13)

トレンチ 6 西端より検出した。南北約 3.5 m の範囲に広がり、溝 2 と並行する。石列部分は溝 2 と同様に幅約 20 ～ 35cm 程度の琉球石灰岩の切石を並行して配置している。溝 3 では東西両サイドの石列が残存していたため、溝内部の幅が約 20cm であることがわかった。底石も溝 2 と同様、幅約 20cm 前後の切石を使用しており、北側にわずかに傾斜する。溝 3 の北端から先には東西に走る溝 4 があり、交点で交わるものと想定できる。

溝 4 (第 16 図、図版 13)

トレンチ 6 の北西部より検出した。東西方向約 1 m の範囲に走る。東側は破壊されているが、上之御殿の石牆方向に延びることが想定できる。石列部分は幅約 30cm 前後の琉球石灰岩の切石を並行して配置する。底石は一部残存しており、幅約 20cm 前後の琉球石灰岩を用いている。底石の残存部はわずかに西方向に傾斜しており、溝 3 と合流し、上之御殿側へと排水されるものと想定できる。

砂利道跡 (第 16 図、図版 13)

トレンチ 6 の東側、溝 2 の隣から検出した。南北端及び東側は配管により破壊されており、南北に約 8 m の範囲で検出された。縁に幅約 20 ～ 30cm 大の琉球石灰岩の切石が並び、その脇に砂利を敷き固めている。石列は蛇行しながら南北に走るため、溝とは考えにくく、炭御蔵横の通路と考えられる。砂利道の東側は破壊されているが、恐らくは溝 2 の西側に石列が存在しており、砂利道の縁と溝の機能を併せ持っていたと想定できる。

池状遺構 (第 17 図、図版 14)

トレンチ 6 南側より検出した。東西約 6 m、南北約 3 m の範囲に広がる。南側一帯は全て破壊されており、付近に砲弾跡なども見られることから、戦時中に破壊されたと思われる。池の縁は、北側は幅約 40cm 前後の琉球石灰岩の切石によって区画され、西側は幅約 2.6 m の大きな琉球石灰岩によって区画される。当該遺構は床面と石積み面側にモルタルを貼っていることから、大正末から昭和初めにかけて造営されたものと考えられる。この池状遺構は聞き取りや古写真などでは確認されておらず、今後において更なる検証が必要とされる。

まとめ

平成 26 年度調査において、中城御殿跡の北側一帯に 6 カ所のトレンチを設定したが、一部のトレンチを除いて、基本層序第 I ～ IV 層まで確認できた。博物館建物建設の基礎工事における攪乱によって、平成 26 年度調査区では基本層序第 II b 層が検出されなかったため、この一帯には基本層序第 II b 層が含まれないことがわかった。それと同時に基本層序第 V 層がすべてのトレンチで確認できなかった。従来までの調査成果を踏まえ、戦後の造成事業を 3 段階に区別した。

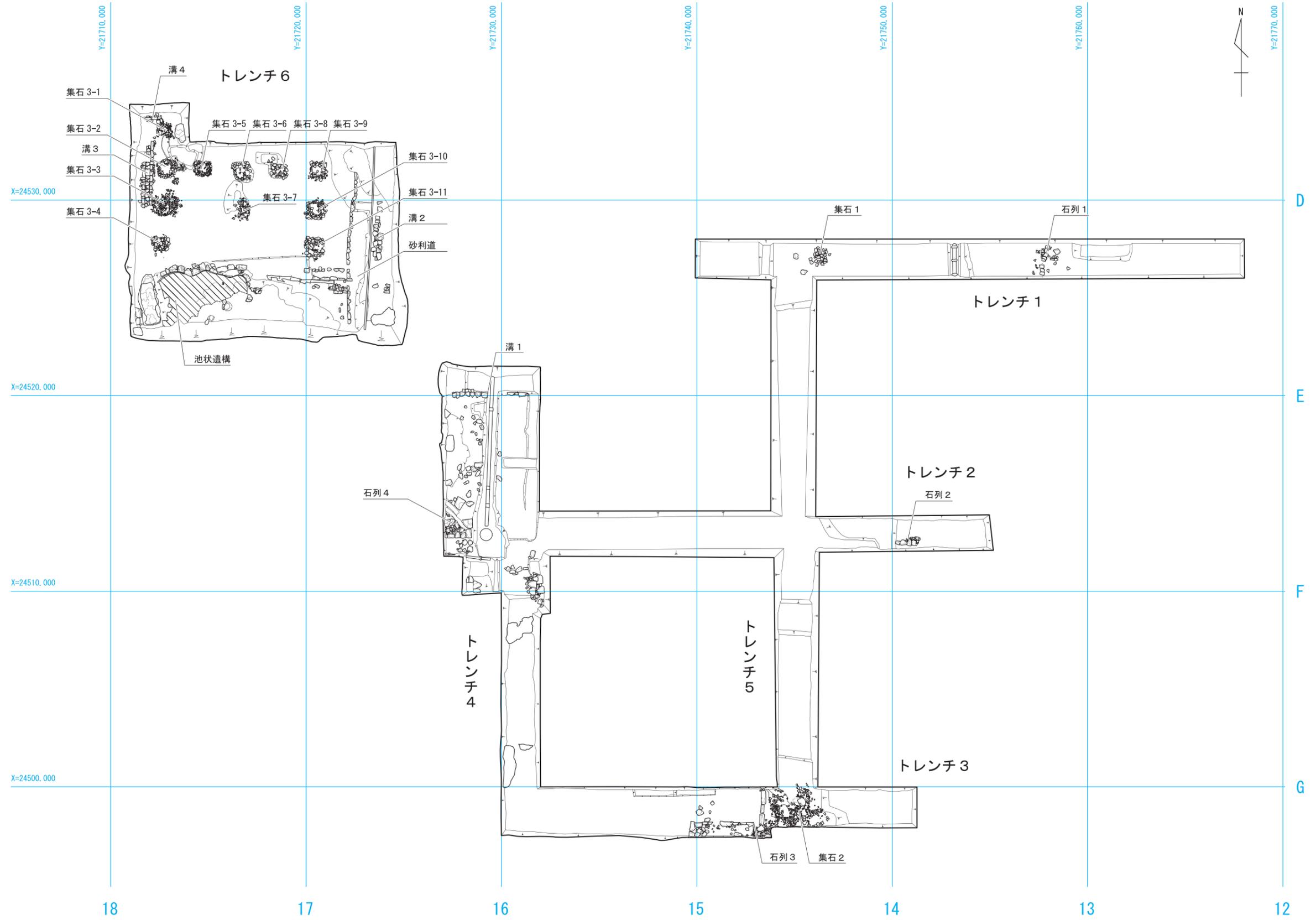
第 I 期：戦後直後の平場造成

第 II 期：博物館築造の際に係る基礎工事掘削攪乱

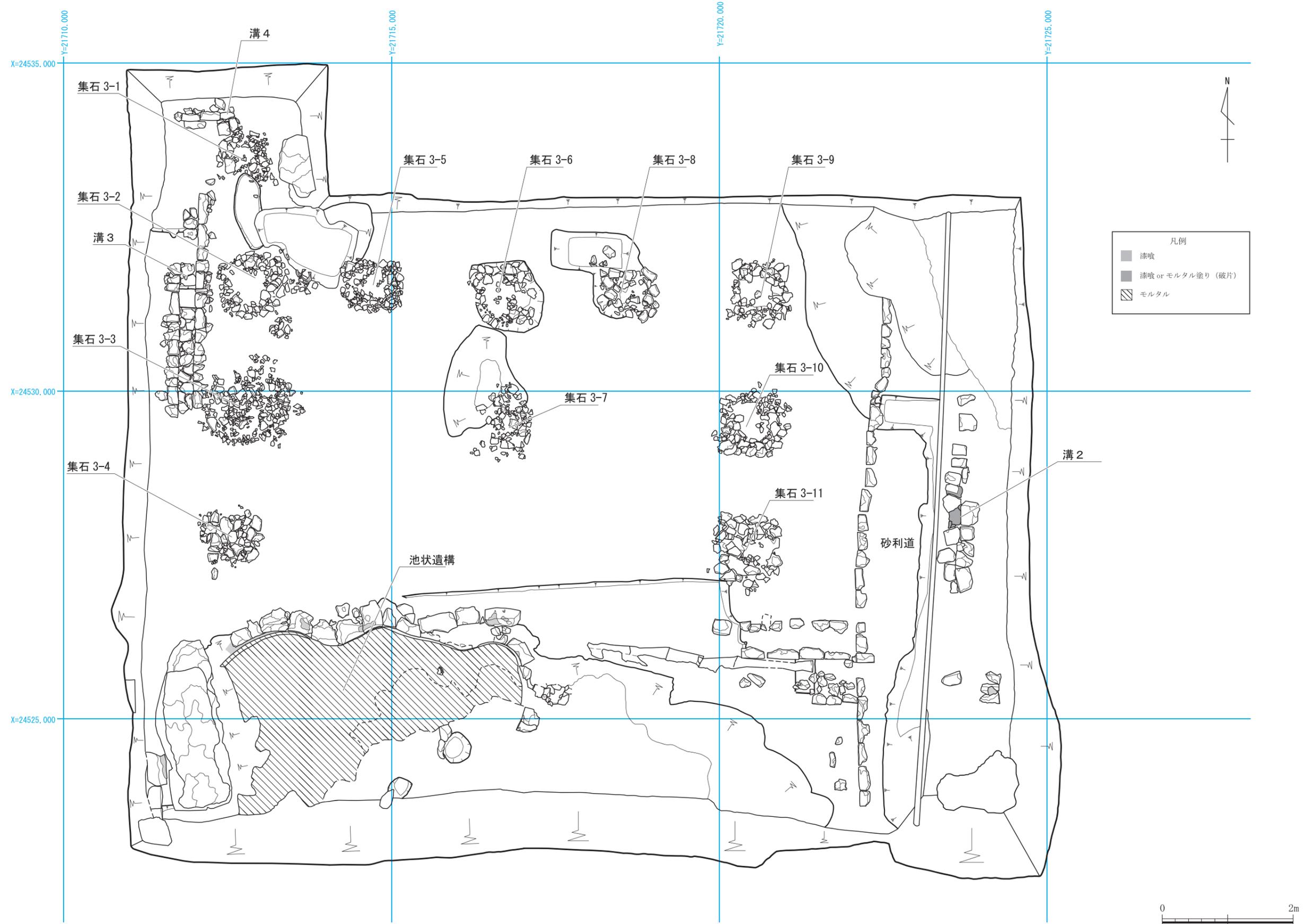
第Ⅲ期：博物館本館撤去時の平場造成

トレンチ1は第Ⅰ期～第Ⅲ期まで影響を受けている。遺構の残存状況が悪く、トレンチ1の東側で攪乱を確認した。トレンチ3は第Ⅰ～Ⅲ期まで影響を受けている。トレンチ3の東側では博物館本館の玄関部分建設時による攪乱の影響がみられたが、中央部では石列が2基検出され、包含層の残存状況も良好であった。トレンチ4は第Ⅰ～Ⅲ期までの影響を受けている。トレンチ4の南北両端と中心部で攪乱と博物館時のものと思われる埋設配管が検出された。それと同時に平成22年度発掘調査時の埋土も確認された。トレンチ2・5は第Ⅱ・Ⅲ期の影響を受ける。とくに第Ⅱ期の影響が強く遺構の残存状況も悪かった。トレンチ6は第Ⅰ～Ⅲ期の影響を受けている。トレンチの一部で博物館建物の基礎が表土面で検出されたが、基礎工事の攪乱が極めて少ないため遺構の残存状況が良好であった。

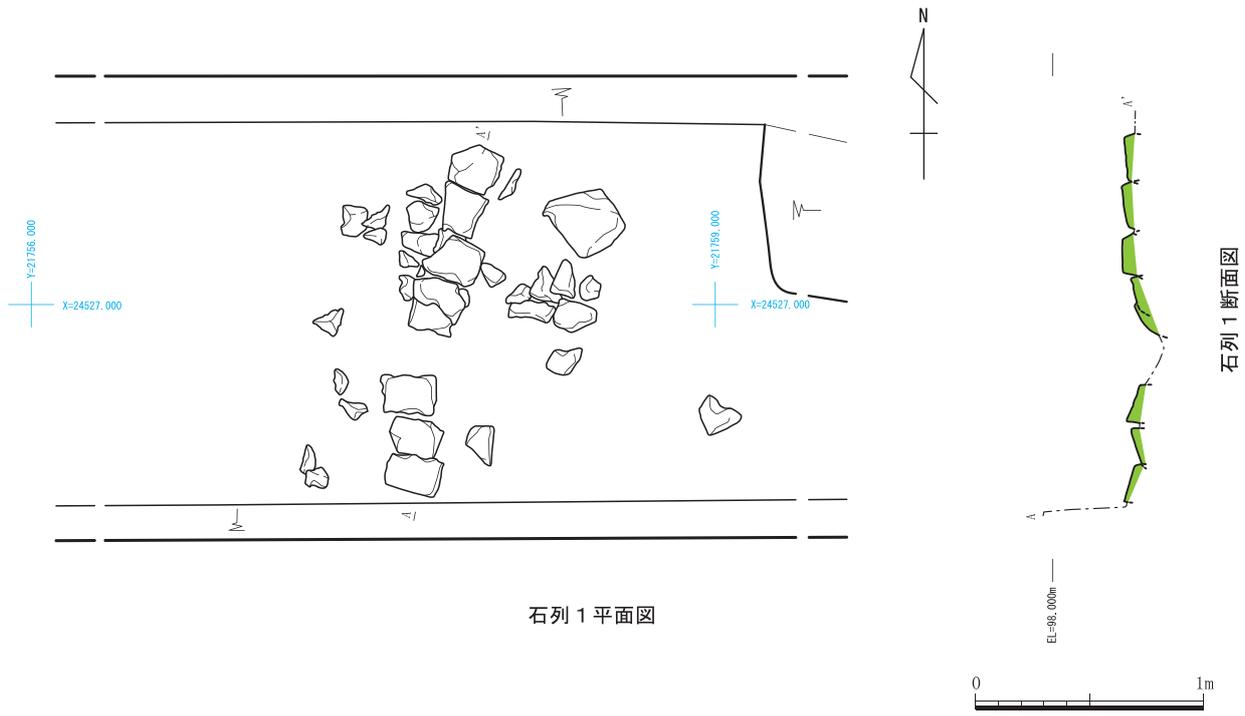
トレンチ全体を通して第Ⅱ期の影響を強く受けていることが窺えることが、とりわけトレンチ2・5で確認できた。トレンチ6では博物館本館から外れているため、開発の影響を受けなかったことが、遺構が残る要因とされる。このことから、今回の調査区全体で近世から現代にかけて造成事業が行われていることが窺える。



第9図 遺構全体平面図

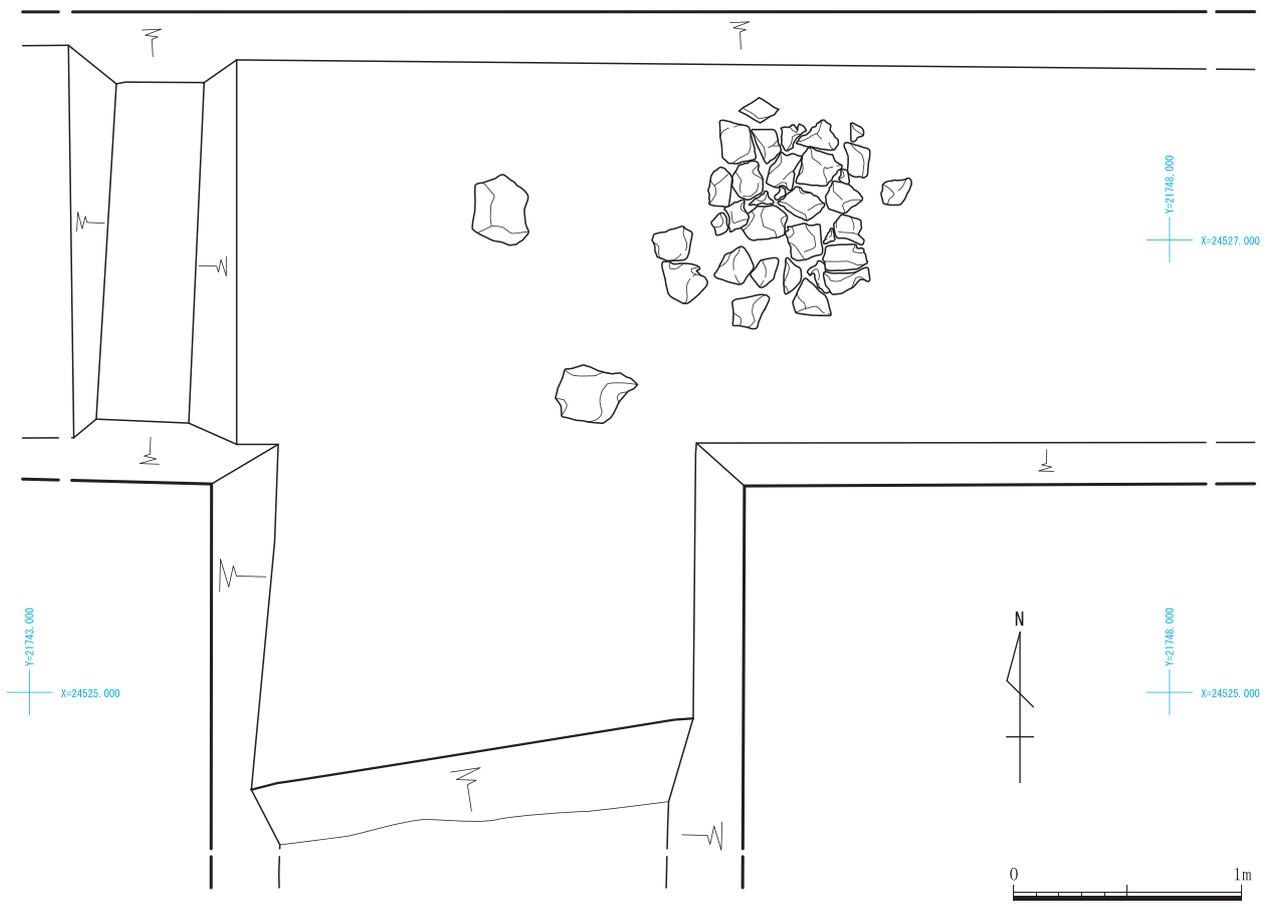


第 10 図 トレンチ 6 遺構全体平面図



石列 1 平面図

石列 1 断面図



集石 1 平面図

第 11 図 トレンチ 1 遺構 (石列 1・集石 1)



1. トレンチ1全景（南から）



2. トレンチ1石列1（南から）



3. トレンチ1石列1（北から）



4. トレンチ1集石1（南から）



5. トレンチ1集石1（北から）

図版8 トレンチ1遺構（石列1・集石1）



1. トレンチ2遺構（南から）

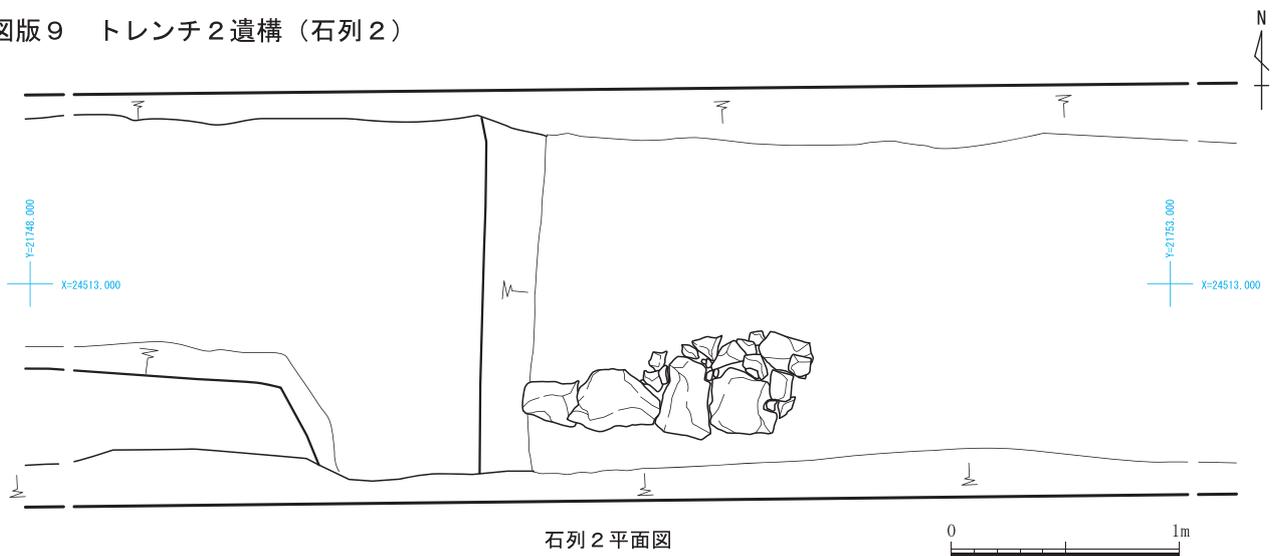


2. トレンチ2遺構（東から）



3. トレンチ2石列2（南から）

図版9 トレンチ2遺構（石列2）



第12図 トレンチ2遺構（石列2）



第13図 トレンチ3遺構（石列3・集石2）



1. トレンチ3全景（南から）



2. トレンチ3石列3、集石2（南から）



3. トレンチ3石列3（西から）

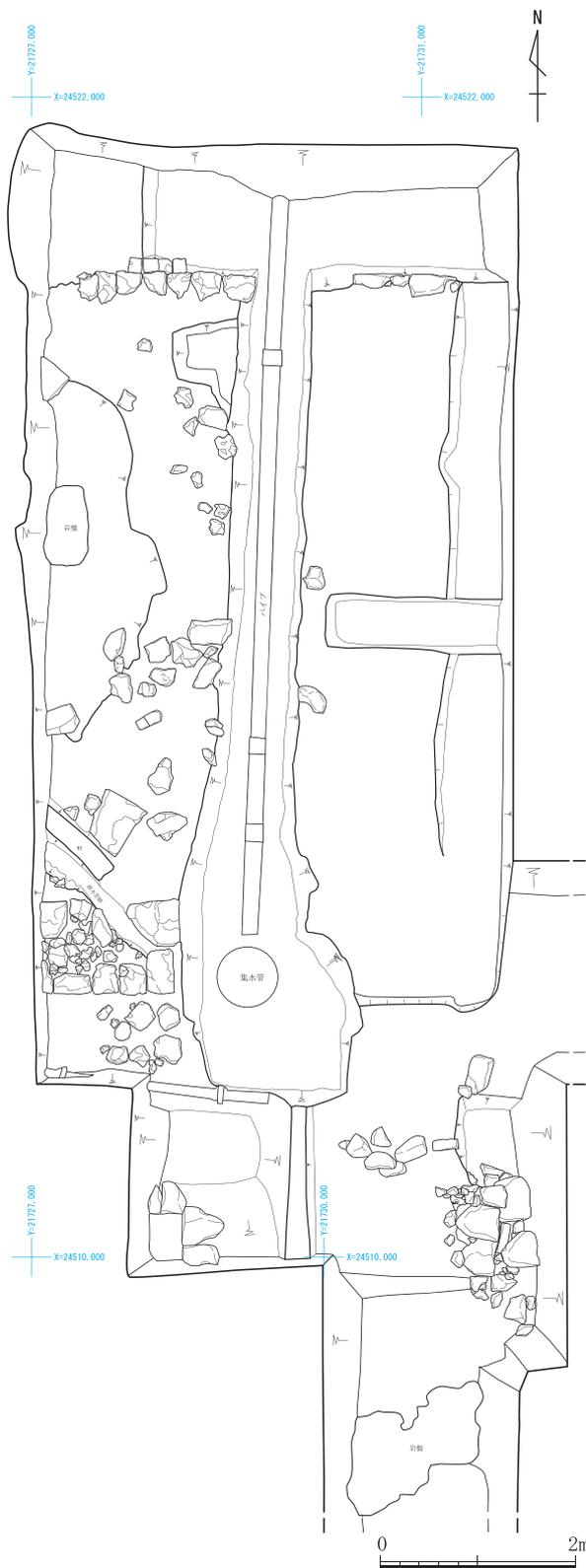


4. トレンチ3石列3（東から）

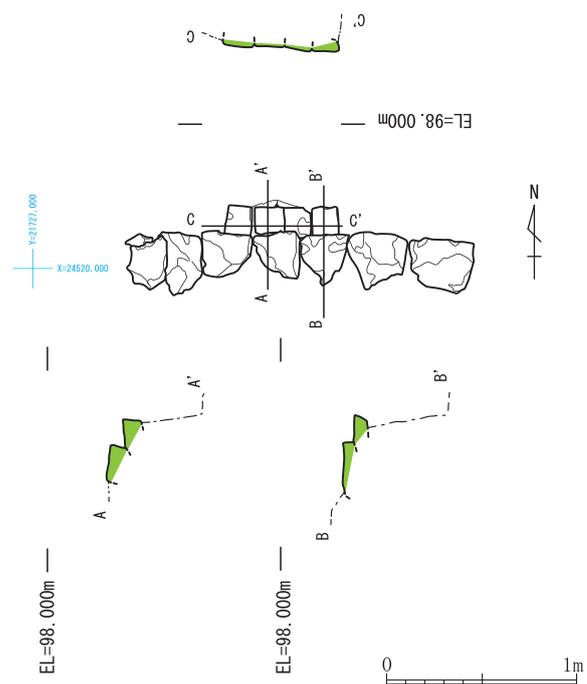


5. トレンチ3石列3、集石2（北東から）

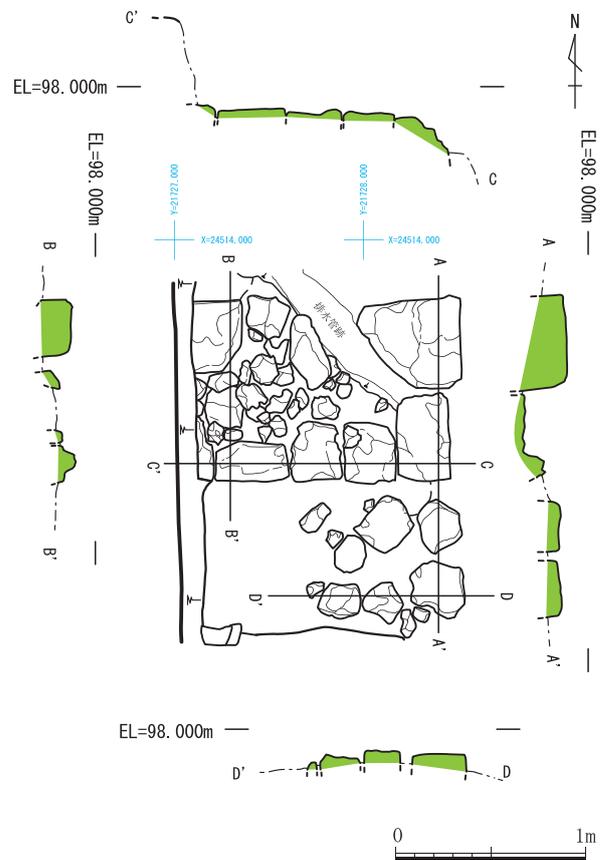
図版 10 トレンチ3遺構（石列3・集石2）



トレンチ4平面図

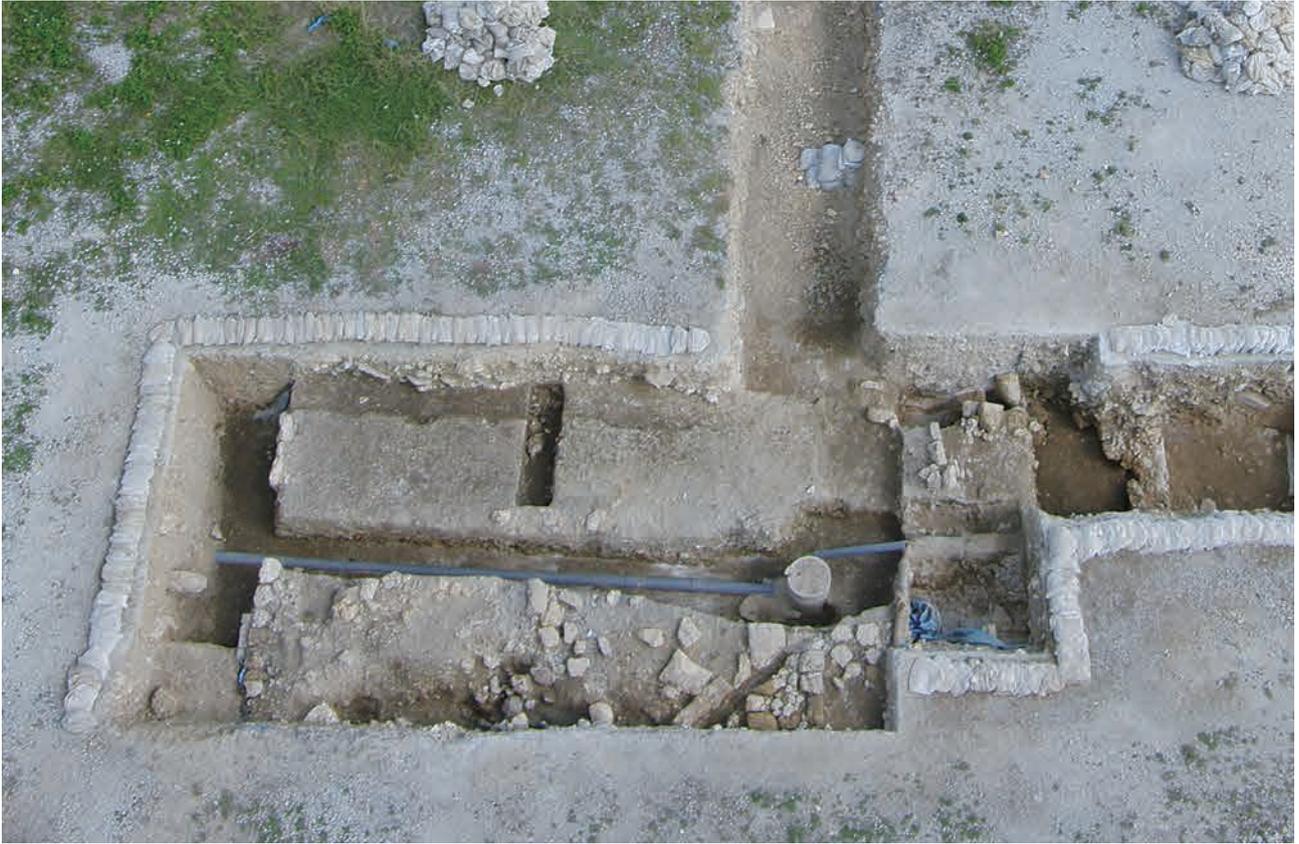


溝1平面図・断面図



石列4平面図・断面図

第14図 トレンチ4遺構（溝1、石列4）



1. トレンチ4 (西から)



2. トレンチ4溝1①(西側、北から)



3. トレンチ4溝1②(東側、北から)



4. トレンチ4石列4 (南から)



5. トレンチ4石列4 (西から)

図版11 トレンチ4遺構(溝1・石列4)



1. トレンチ6集石遺構（南から）



2. トレンチ6集石3-1（西から）



3. トレンチ6集石3-2（西から）

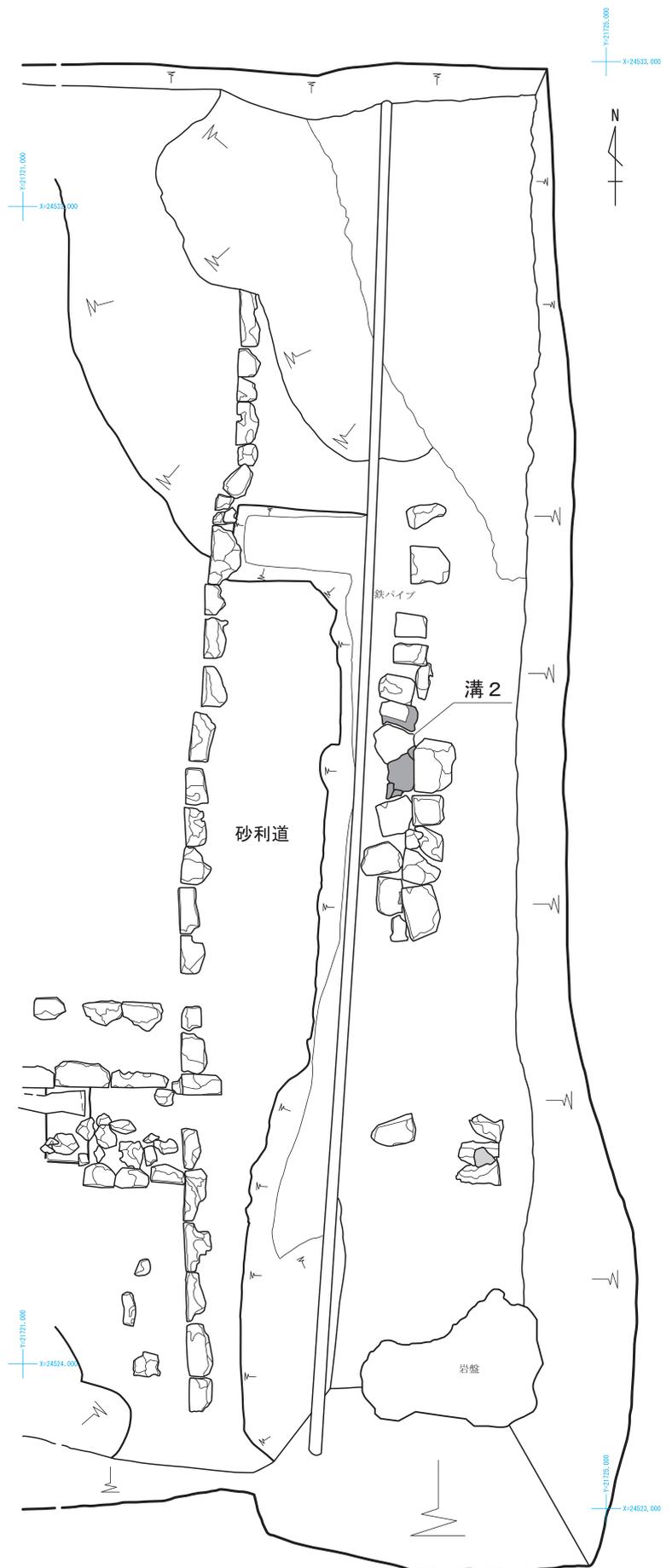
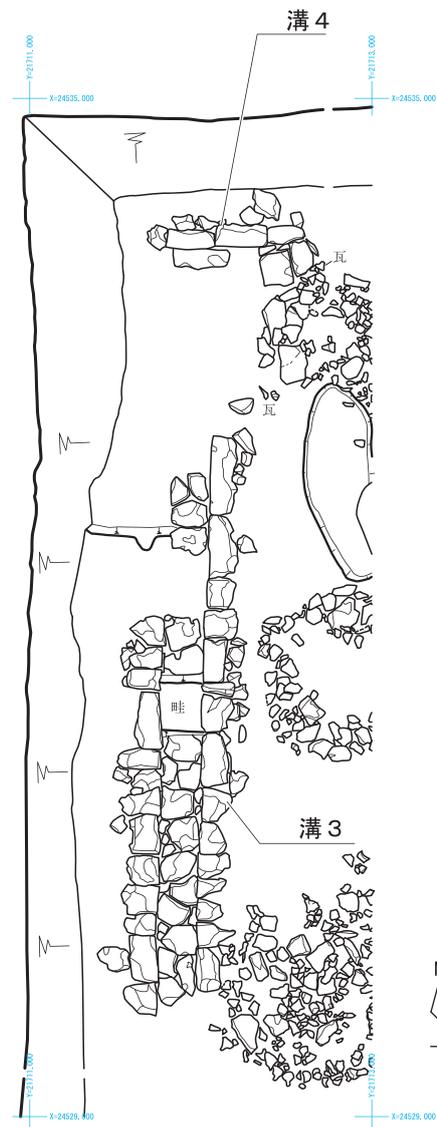


4. トレンチ6集石3-6（北から）



5. トレンチ6集石3-11（東から）

図版 12 トレンチ6遺構①（集石3）



第16図 トレンチ6遺構②（溝2、溝3、溝4、砂利道）



1. トレンチ6全景（南から）



2. トレンチ6溝3・4（西から）



3. トレンチ6溝3・4（北から）



4. トレンチ6溝2・砂利道（東から）



5. トレンチ6溝2サブトレンチ（南から）

図版 13 トレンチ6遺構②（溝2、溝3、溝4、砂利道）



1. トレンチ6 池状遺構（南から）



2. トレンチ6 池状遺構（南から）



3. トレンチ6 池状遺構（南東から）



4. トレンチ6 池状遺構（西から）

図版 14 トレンチ6 遺構③（池状遺構）

第4節 出土遺物

本報告の対象となった人工遺物は総計で24,545点である。その種別は沖縄産施釉陶器が最も多く、本土産陶磁器、陶質土器と続く。

ここでは遺物の種別ごとに概要、観察表、実測図、写真の順に報告を行い、集計表は本章の末尾(108頁～)に掲載した。また特徴的な遺物を図化対象とし、胴部片や小片等は集計のみを行った。図化対象外の人工遺物でも、当遺跡の特質を表し、変遷を知る上で必要と思われる遺物は写真と観察表を掲載した。なお、これら遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合がある。また、その縮尺も基本的に33～50%としたが、大型・小型の遺物に関しては適宜縮小・拡大し、展開を追加した資料がある。

1 中国産青磁

中国産の青磁は総計307点が得られている。産地は龍泉窯産が多いが、景德鎮窯産の製品も一定量得られ、少数だが漳州、泉州、福建産も見られる。器種は碗、小碗、皿、盤、杯、瓶、壺、袋物が確認され、碗や小碗が多い。年代的には14世紀後半～19世紀代までの資料が見られるが、15～16世紀代の龍泉窯産が多く見られる。次に器種ごとの概要を記し、個々の資料の詳細は観察表に記載する。

①碗 (第18図1～5)

明代の龍泉窯産。外面に文様を施すもの(図1～3)や内底に型押し(図4・5)を施すものがある。

②小碗 (第18図6・7)

清代の景德鎮窯産。外底に銘款を描くものがある(図6)。

③壺 (第18図8～10)

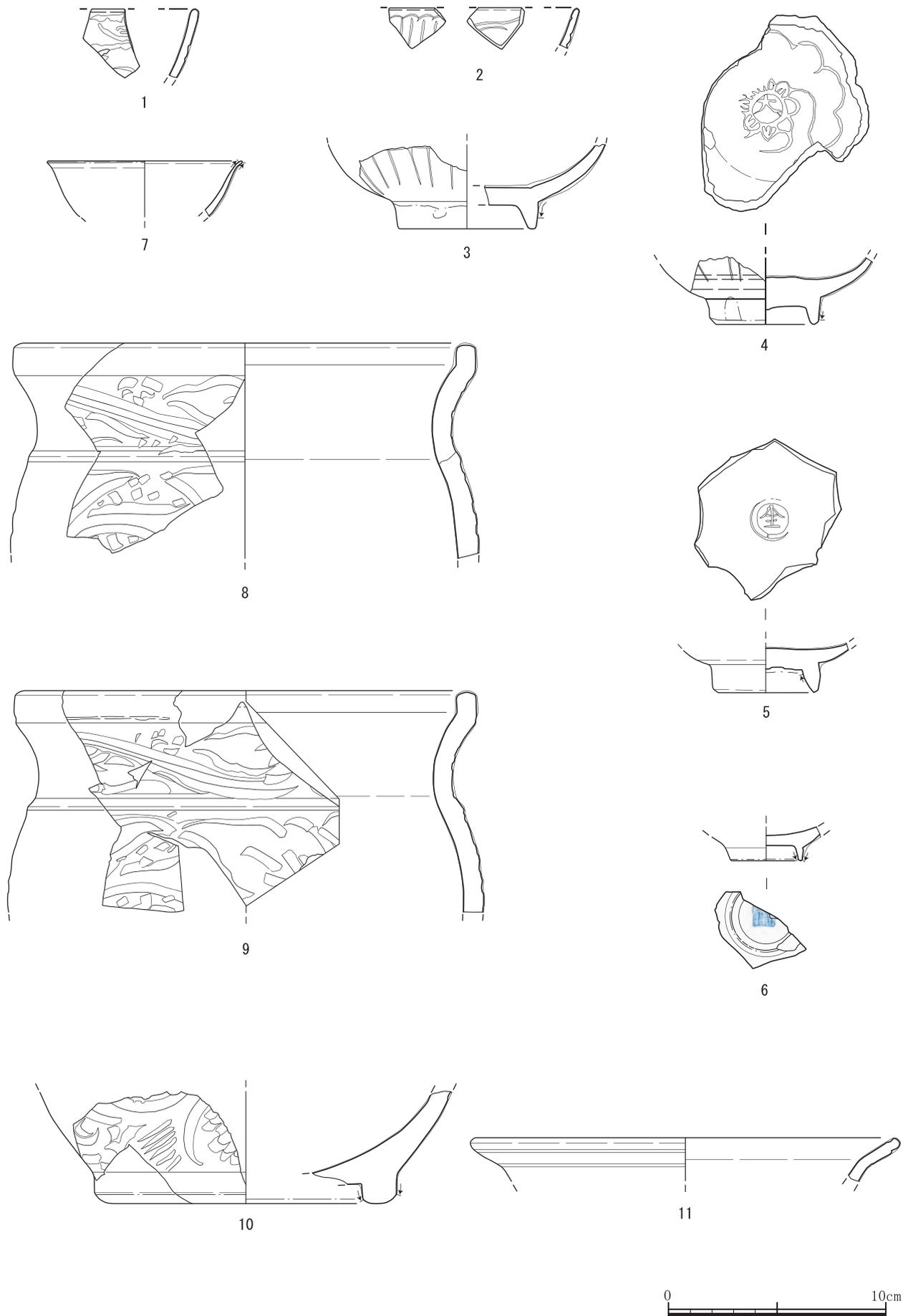
景德鎮窯産で口縁部(図8・9)と底部(図10)がある。同一個体だと思われる。

④盤 (第18図11)

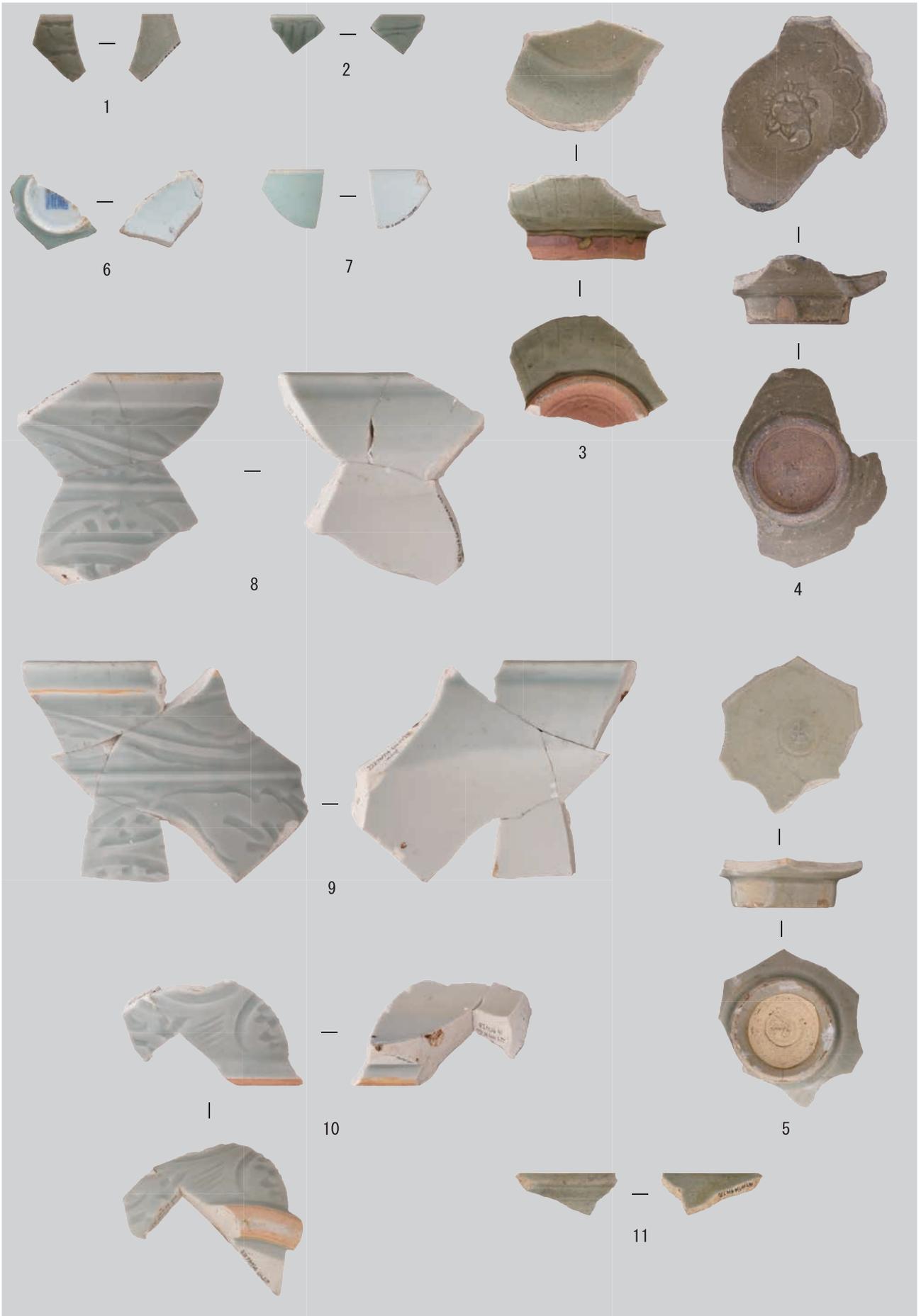
明代のもので、産地は不明。

第3表 中国産青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			観察事項			出土地
				口径	器高	底径	釉 (範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第18図 図版15	1	碗	口縁部	—	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。微細な黒色粒を少量含む。	文様は草花文と思われるが不鮮明。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半～15c中葉。 碗V類(瀬戸ほか2007)。	4トレI層
	2	碗	口縁部	—	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。微細な黒色粒を少量含む。	外面に蓮弁文。内面に波状文を施すが不鮮明。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。碗VI-1類(瀬戸ほか2007)。	6トレI層
	3	碗	底部	—	—	6.4	釉を内底から高台脇まで施釉。両面に粗い貫入。	灰白色でやや粗い。微細な黒色粒を多く含む。	外面腰部までに蓮弁文を施す。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。碗VI-1類(瀬戸ほか2007)。	4トレI層
	4	碗	底部	—	—	5.0	釉を内底から高台外面まで施釉し一部露胎。	灰色でやや粗い。微細な黒色粒と白色粒を含む。	外面は線刻蓮弁を腰部まで施文。内底に「大」の型押し。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。碗VI-1類(瀬戸ほか2007)。	3トレインジキ 3I層
	5	碗	底部	—	—	4.8	釉を内底から高台内面まで施釉。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	内底に「全」の型押し。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。碗VI類(瀬戸ほか2007)。	1トレI層
	6	小碗	底部	—	—	3.3	外面と内面の釉を掛け分け後、暈付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	4トレI層
	7	小碗	口縁部	9.0	—	—	外面と内面の釉を掛け分ける。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で19c。	1トレII層
	8	壺	口縁部	21.4	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	外面に草文か植物の文様。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半～19c前半。図9、10と同一個体。	6トレイケI層
	9	壺	口縁部	21.4	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	外面に草文か植物の文様。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半～19c前半。図8、10と同一個体。	6トレII層
	10	壺	底部	—	—	14.0	釉を両面に施釉後、暈付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に草文か植物の文様。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半～19c前半。図8、9と同一個体。	6トレII層
	11	盤	口縁部	19.8	—	—	釉を両面に施釉。	淡黄色でやや粗い。微細な黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。明代。	4トレI層



第 18 图 中国産青磁



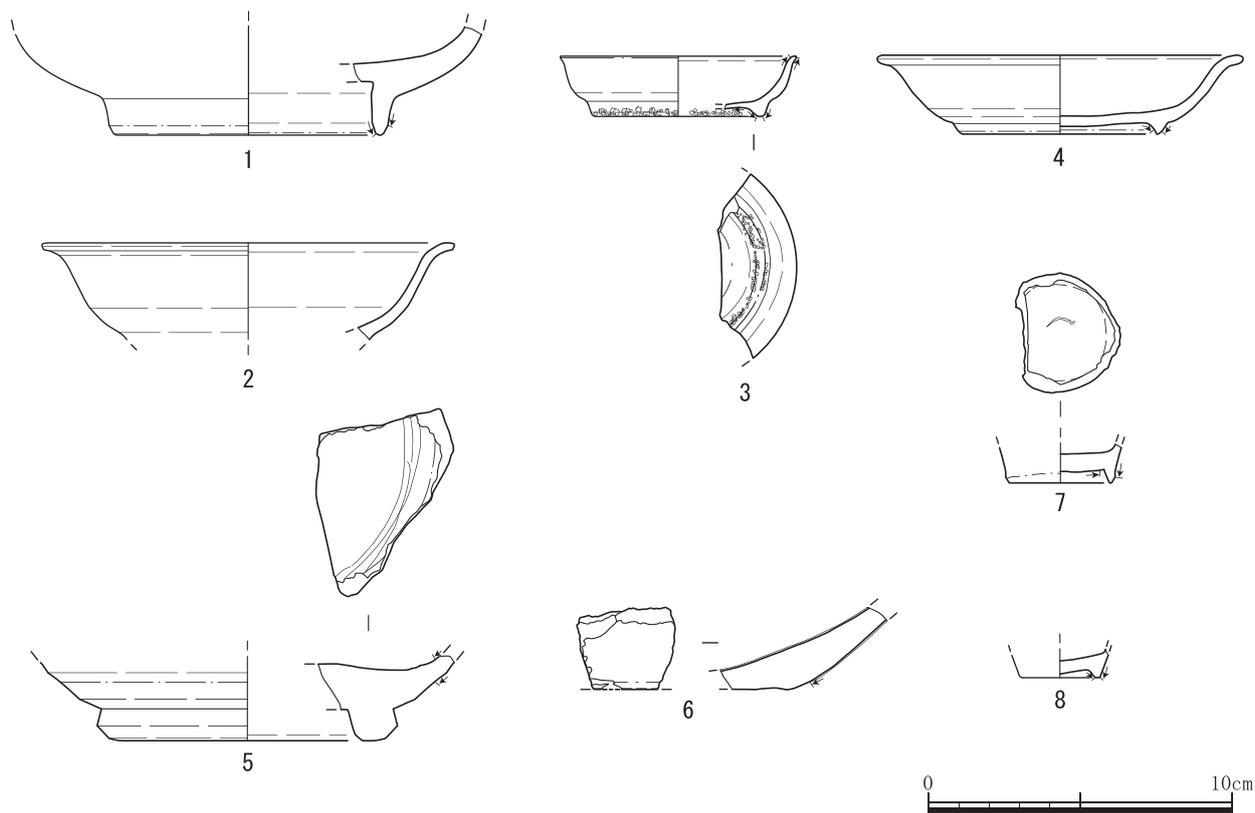
图版 15 中国産青磁

2 中国産白磁

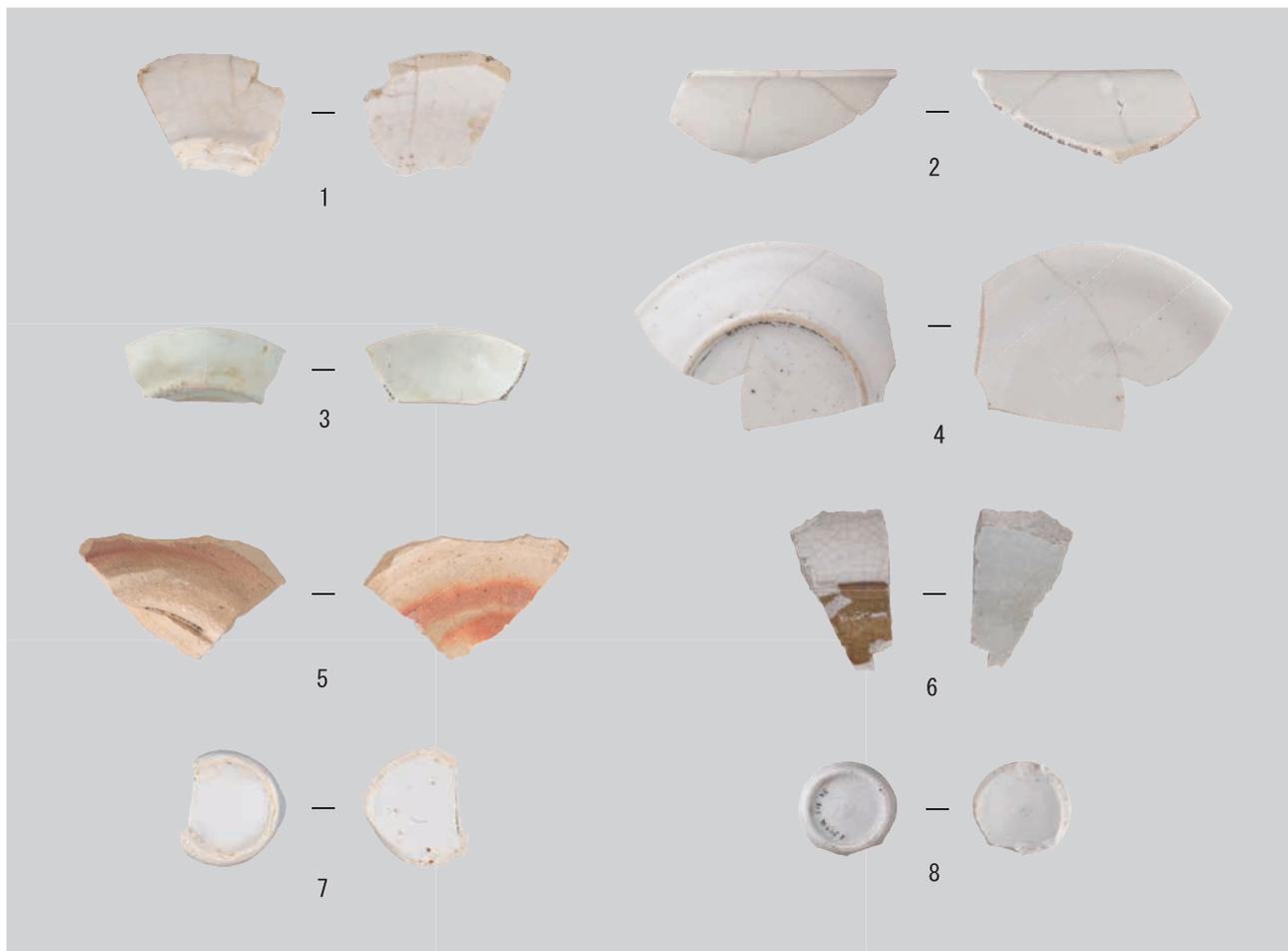
中国産の白磁は総計 430 点が出土している。産地は徳化窯産が多く、次いで福建産、景德鎮窯産と続く。器種は碗、小碗、皿、鉢、盤、杯、小杯、瓶、壺、灯明皿、袋物、蓮華が確認され、碗や小碗が多く見られる。年代的には明代～清代までの資料が得られているが、清代の徳化窯産が多く得られている。個々の遺物の詳細は観察表に記載する。

第 4 表 中国産白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			観察事項			出土地
				口径	器高	底径	釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第 19 図 図版 16	1	碗	底部	—	—	9.2	透明釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色でやや粗い。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で明代。	1トレサブトレ I 層
	2	皿	口縁部	13.6	—	—	透明釉を全面に施釉。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で明代。	3トレイシジキ 3 I 層
	3	皿	口～底	7.8	2.0	5.7	透明釉を全面に施釉後、口唇部、畳付、内底中央部を釉剥ぎ。	白色で細かい。	無文で型成形。畳付に溶着防止の砂付着。徳化窯産で 18 c～19 c。	4トレ II 層
	4	皿	口～底	12.0	2.6	6.7	透明釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で明代。	4トレサブトレ II 層
	5	鉢	底部	—	—	9.9	釉を内面胴部から外面胴部まで施釉。	淡黄色でやや細かい。	無文で轆轤成形。福建・広東系で 16 c 後半～17 c 前半。	4トレ I 層
	6	鉢	底部	—	—	—	透明釉を全面に施釉後、外底を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。微細な黒色粒を多く含む。	無文で轆轤成形。福建産で清代。	1トレ I 層
	7	杯	底部	—	—	3.4	灰白色釉を高台胎と外底に施釉。畳付と外底縁部は露胎。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。内底に爪痕。景德鎮窯産。	4トレ II 層
	8	杯	底部	—	—	2.7	透明釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	無文で型成形。徳化窯産で明代。	1トレ I 層



第 19 图 中国産白磁



图版 16 中国産白磁

3 中国産青花

中国産の青花は総計 1,611 点が得られている。産地は徳化窯産が多く、次いで景德鎮窯産、福建・広東系、福建産と続く。少数ながら漳州窯産も得られている。器種は碗、小碗、小杯、小鉢、皿、盤、瓶が確認され、碗や小碗が多く見られる。年代的には明代～清代までの資料が得られているが、清代の徳化窯産が多く得られている。以下に器種ごとの概要を記し、個々の遺物の詳細は観察表に記載する。

①碗（第 20 図 1～15）

景德鎮窯産（図 1～4）、徳化窯産（図 5～7・11）、福建・広東系（図 8～10・13）、福建産（図 12・14・15）があり、景德鎮窯産の中には官窯クラスと見られる製品（図 2）がある。

②小碗（第 21 図 16・17）

どちらも清代の製品で外底に銘が施される。

③小杯（第 21 図 18）

底部片で、清代の徳化窯産。内底に砂が付着する。

④小鉢（第 21 図 19）

口縁部が直口する製品で、清代の景德鎮窯産。

⑤皿（第 21 図 20～23）

徳化窯産（図 20・21）と景德鎮窯産（図 22・23）があり、景德鎮窯産の中には明代の製品（図 23）がある。

⑥盤（第 21 図 24）

口縁部片で、清代の福建・広東系。

⑦瓶（第 21 図 25）

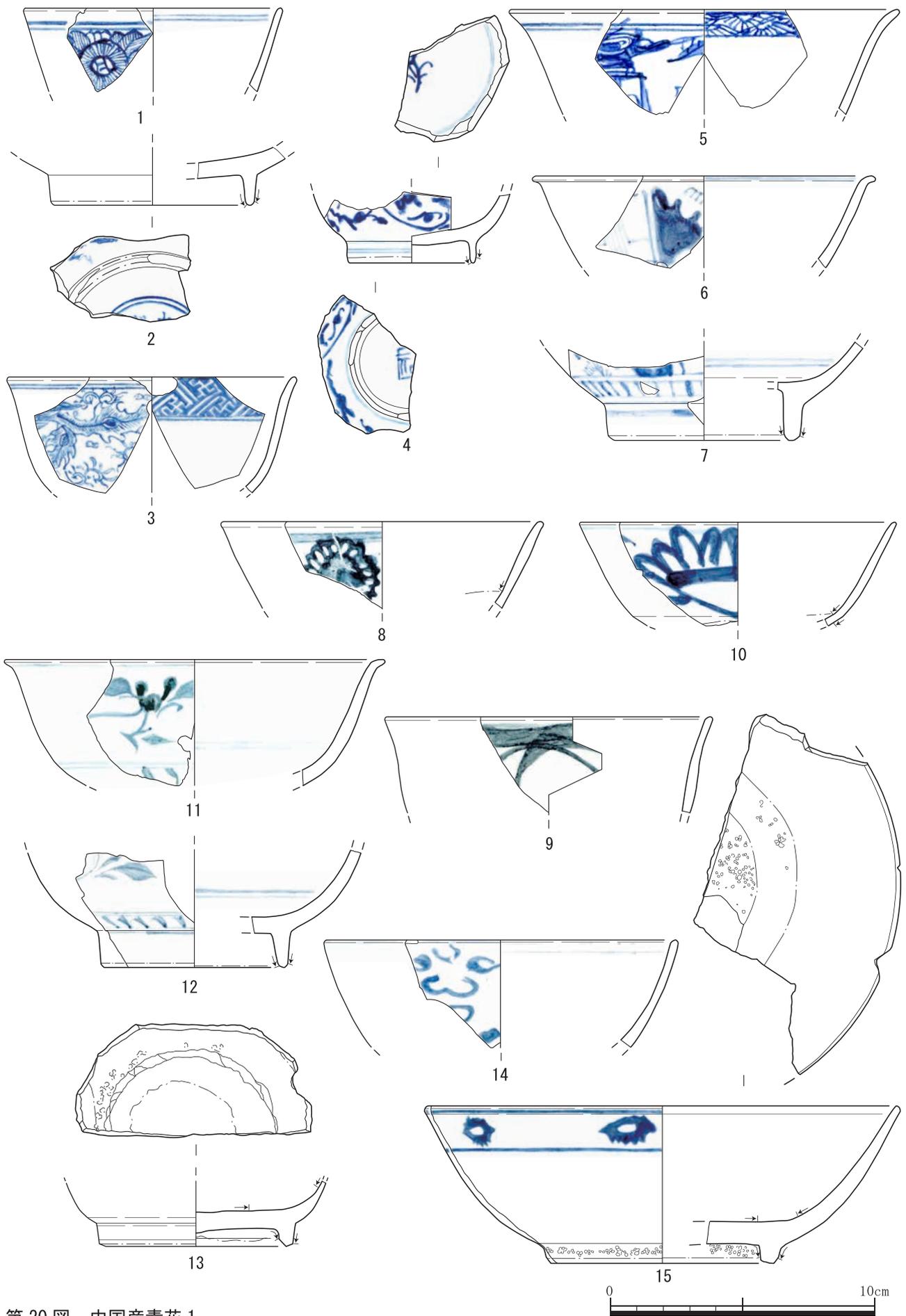
胴部片で、明代の景德鎮窯産。

第 5 表 中国産青花観察一覧 1

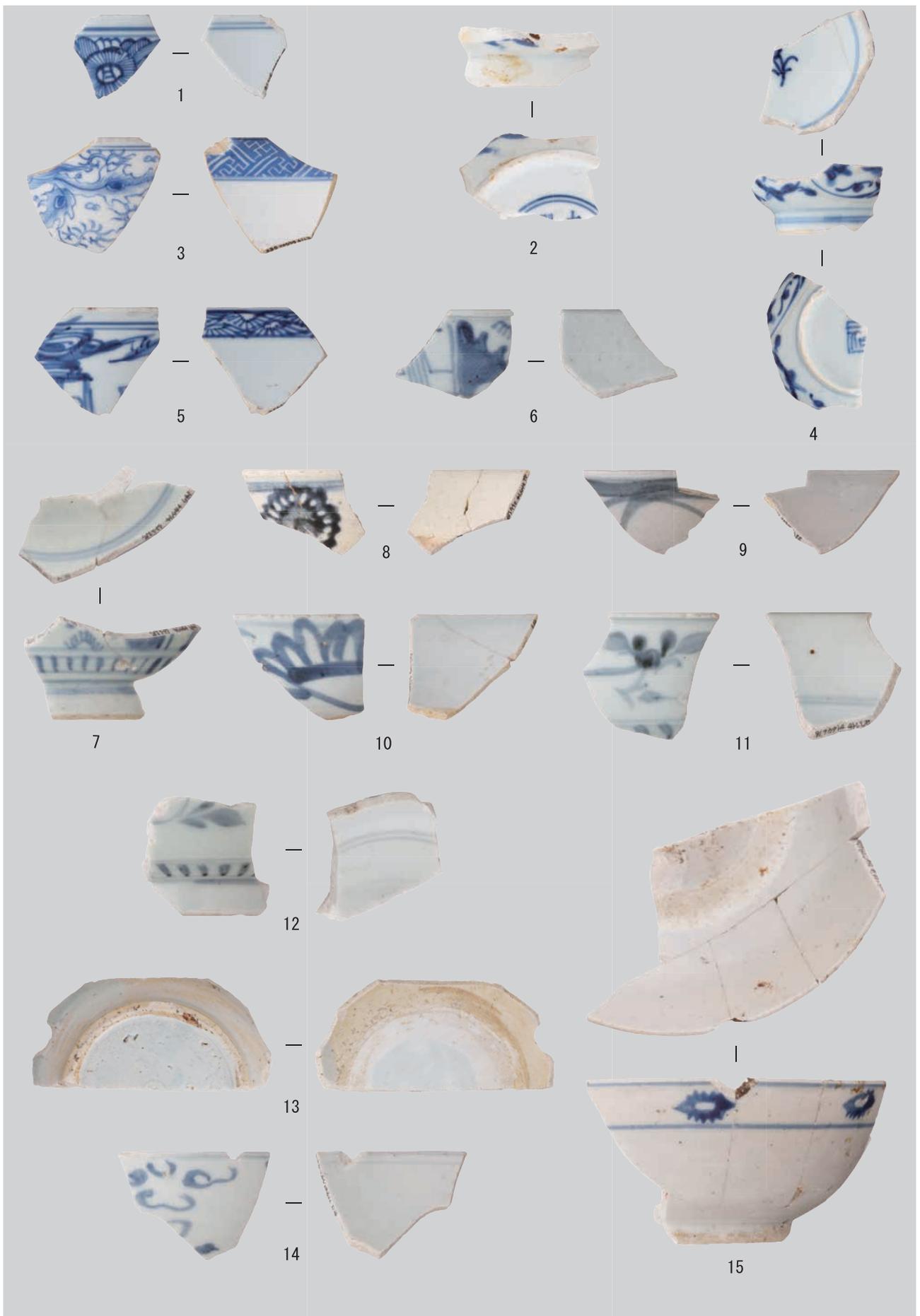
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			観察事項			出土地
				口径	器高	底径	釉 (範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第 20 図 図版 17	1	碗	口縁部	9.8	—	—	釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に花文と二重圏線、内面に二重圏線。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	3 トレ I 層
	2	碗	底部	—	—	7.7	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に不鮮明の文様。外底に「大清康熙年製」銘と思われる官窯クラスの碗。轆轤成形で 17 c 後半～18 c 前半。	6 トレイケ I 層
	3	碗	口縁部	11.0	—	—	釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に葉文と唐草文。轆轤成形。景德鎮窯産で 19 c。	6 トレ II 層
	4	碗	底部	—	—	4.8	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に唐草文、内底に草花文。外底に銘あり。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	1 トレ I 層
	5	碗	口縁部	14.8	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	外面に寿字文。型成形。徳化窯産で清代。	1 トレ I 層

第5表 中国産青花観察一覧2

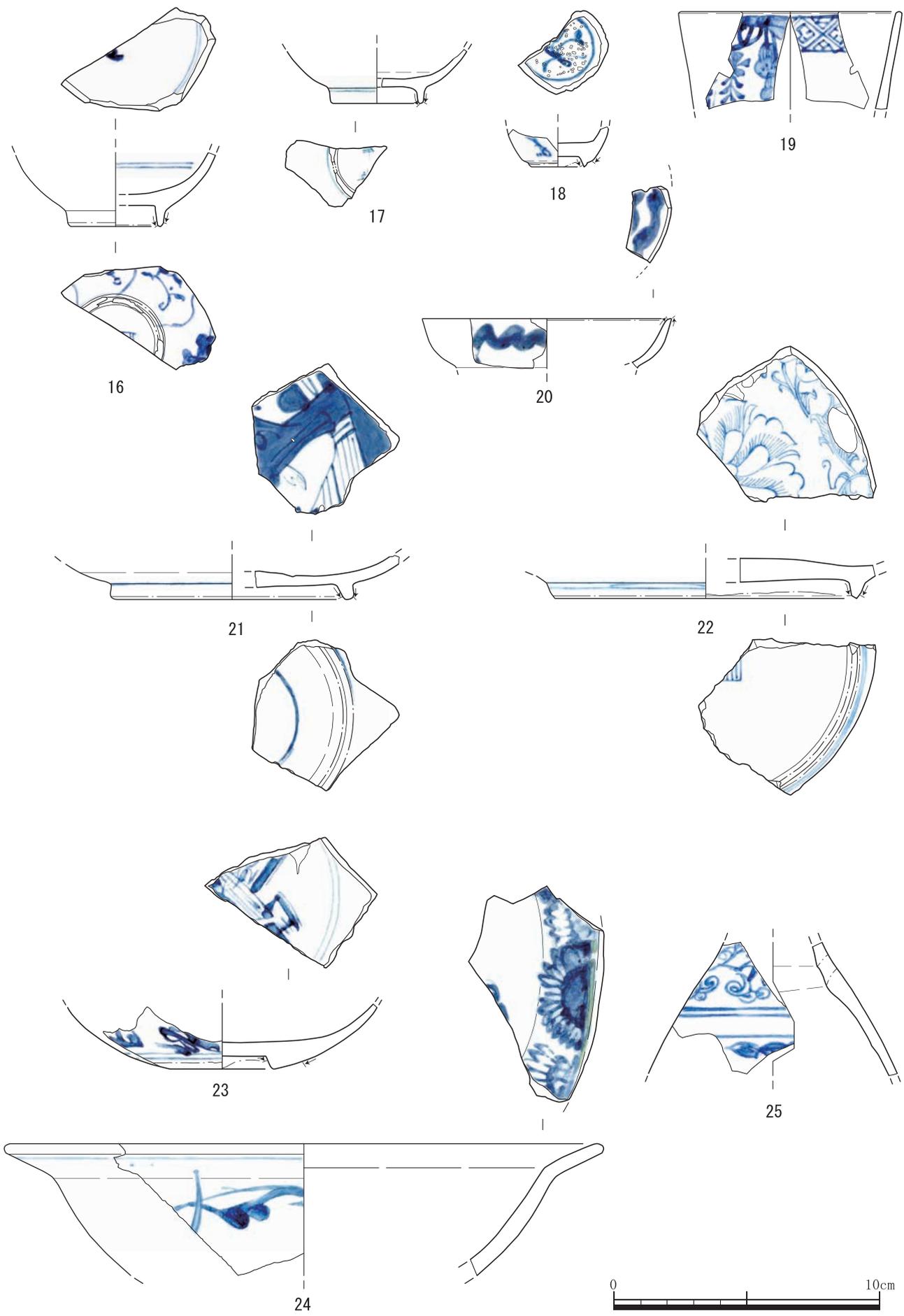
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			観察事項			出土地
				口径	器高	底径	釉 (範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第20図 図版17	6	碗	口縁部	13.0	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。微細な黒色粒を多く含む。	外面に寿文を施すが不鮮明。型成形。徳化窯産で18c。	6トレI層
	7	碗	底部	—	—	7.2	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	外面に蓮弁文+寿字文か。型成形。徳化窯産で清代。	6トレIケI層
	8	碗	口縁部	12.2	—	—	釉を内面胴部から外面に施釉。	淡黄色でやや細かい。	外面にスタンプによる花文。轆轤成形。福建・広東系で清代。	2トレI層
	9	碗	口縁部	12.4	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	外面に草文を施すが不鮮明。轆轤成形。福建・広東系で清代。	6トレII層
	10	碗	口縁部	12.0	—	—	釉を内面胴部から外面胴部まで施釉。	灰白色で細かい。黒色粒を少量含む。	外面に草花文。轆轤成形。福建・広東系で清代。	6トレI層
	11	碗	口縁部	14.4	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	外面に草花文と蓮弁文、内面に二重の圏線。轆轤成形。徳化窯産で清代。	4トレI層
	12	碗	底部	—	—	7.1	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に草花文と蓮弁文。轆轤成形。福建産か。清代。	3トレII層
	13	碗	底部	—	—	7.3	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。	灰白色でやや細かい。	無文で轆轤成形。福建・広東系で清代。	6トレIケI層
	14	碗	口縁部	13.4	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	外面に雲文、内面に二重圏線。轆轤成形。福建産で清代。	6トレII層
	15	碗	口底	18.0	6.0	8.8	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。	灰白色で緻密。黒色粒を少量含む。	外面にスタンプによる花文と圏線。轆轤成形。畳付に溶着防止の砂付着。福建産で19c。	6トレI層
第21図 図版18	16	小碗	底部	—	—	3.6	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に唐草文、外底に銘あるが不鮮明。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	6トレI層
	17	小碗	底部	—	—	3.5	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	高台脇に二重圏線。外底に銘を施すが不鮮明。官窯クラス。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	4トレI層
	18	小杯	底部	—	—	2.0	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色でやや細かい。	内底に文様を施すが不鮮明で、溶着防止の砂付着。型成形。徳化窯産で清代。	4トレI層
	19	小鉢	口縁部	8.4	—	—	釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に草花文、内面に襷十字文。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	2トレI層
	20	皿	口縁部	9.4	—	—	釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面と内面に波文を施すが不鮮明。型成形。徳化窯産で清代。	6トレI層
	21	皿	底部	—	—	9.2	釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。微細な黒色粒を少し含む。	内面に人物文を施すが不鮮明。型成形。徳化窯産で清代。	6トレI層
	22	皿	底部	—	—	11.4	釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内面にペンシルドローイングによる草花文。外底に銘あり。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。	6トレII層
	23	皿	底部	—	—	4.0	釉を全面に施釉後、高台脇～畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面、内面ともに文様を施すが不鮮明。碁笥底で轆轤成形。景德鎮窯産で明代。	4トレI層
	24	盤	口縁部	22.6	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	外面に文様を施すが不鮮明。口縁部内面にスタンプによる花文。轆轤成形。福建・広東系で清代。	1トレI層
	25	瓶	胴部	—	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	外面に草花文。轆轤成形。景德鎮窯産で明代。	4トレII層



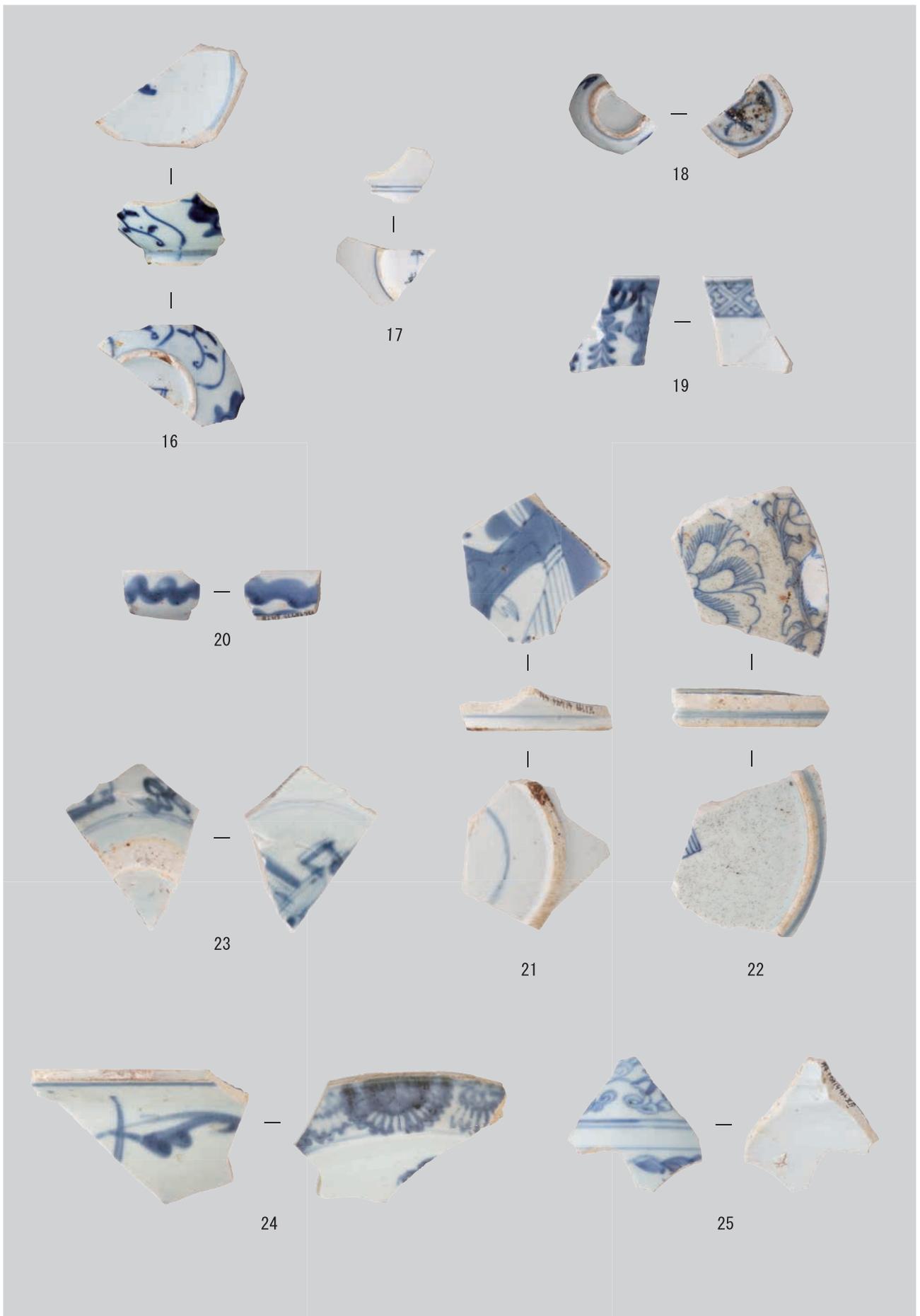
第 20 图 中国産青花 1



图版 17 中国産青花 1



第 21 图 中国産青花 2



图版 18 中国産青花 2

4 中国・タイ産褐釉陶器

ここでは中国産とタイ産の褐釉陶器をまとめて報告する。褐釉陶器は中国産で総計 585 点、タイ産で総計 48 点が得られ、過去の調査では上記 2 つのほかにミャンマー産の褐釉陶器も出土している（金城 2011、羽方 2016）。

2014 年度の調査ではタイ産褐釉陶器に比べ中国産褐釉陶器が多く出土する様子が見られ、2008・2009・2010・2011・2012 年度の調査報告でも同様の結果となっている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010、2011、2012、2013、2016）。次に、種類ごとの概要を述べ、詳細は観察表に記述する。

1. 中国産褐釉陶器（第 22 図 1～7）

器種は壺、壺か甕、瓶、急須、植木鉢がみられ、そのうち状態の良好な壺（図 1～5）、急須（図 6）、植木鉢（図 7）の図化を行った。

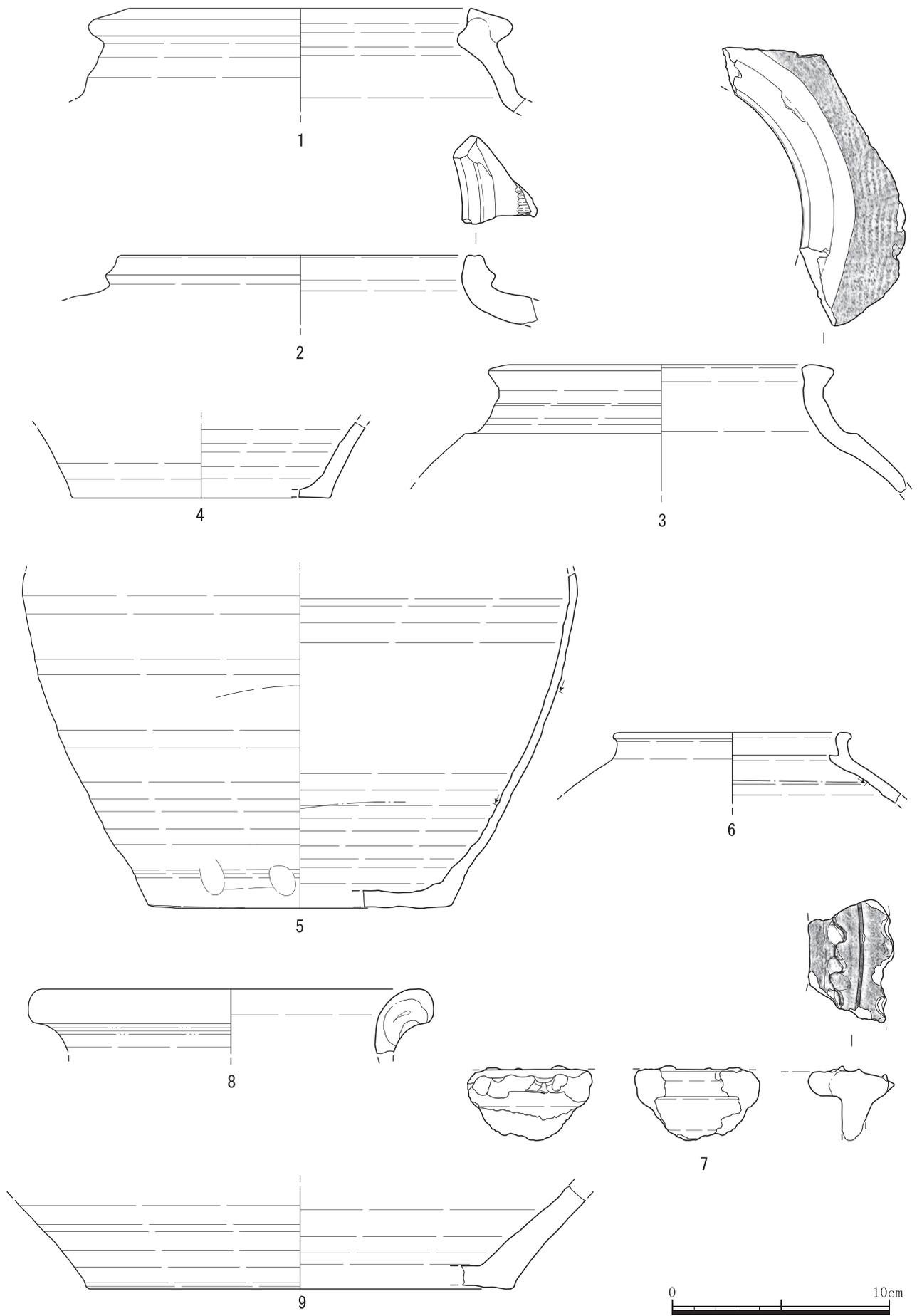
壺は明代から清代の製品が得られ、清代に製作された褐釉陶器は首里城などで殆ど得られておらず（仲座 2012）、中城御殿で使用されていたと考えられる。植木鉢は過去の調査では見られなかった器種である。

2. タイ産褐釉陶器（第 22 図 8・9）

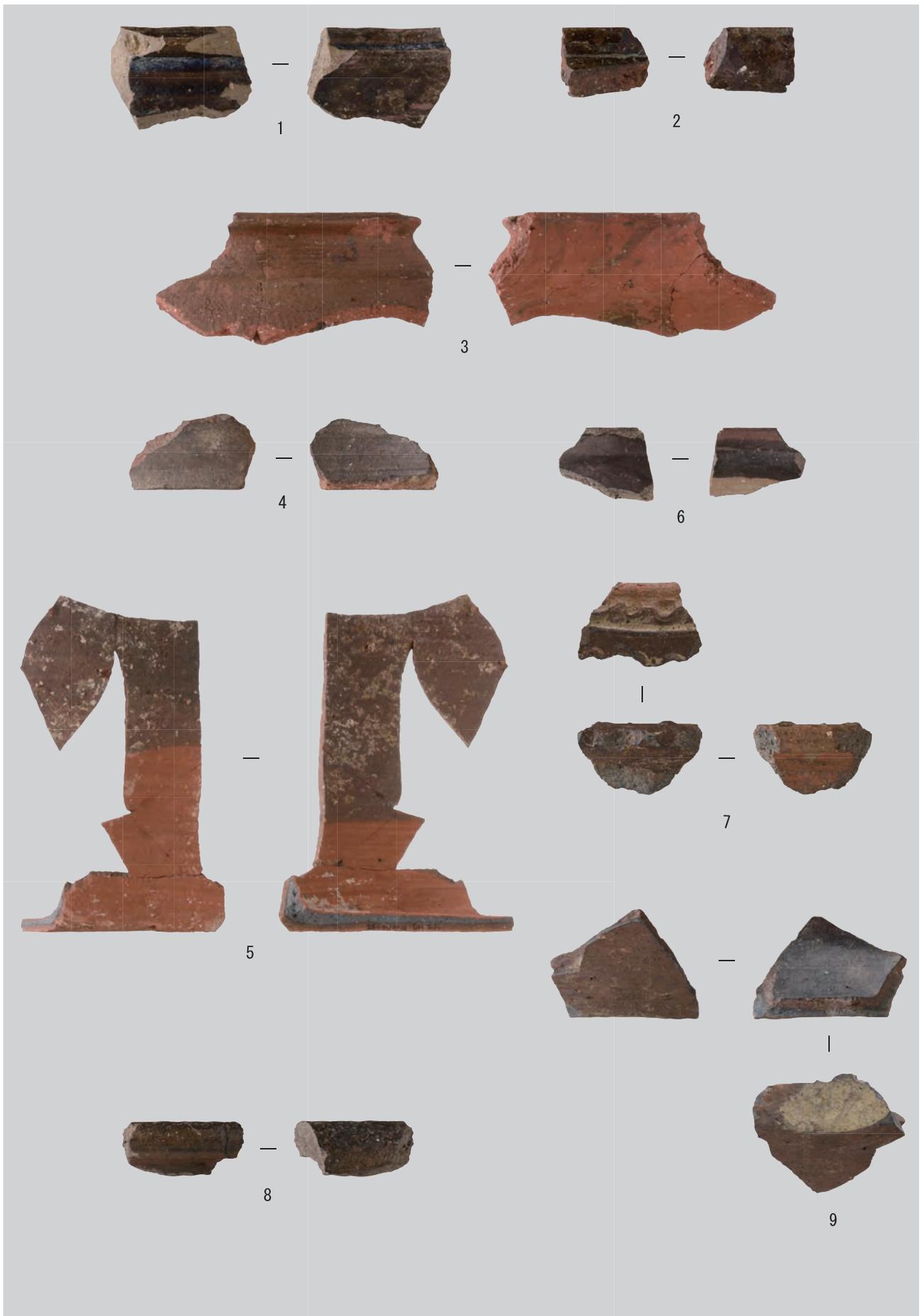
器種は壺と瓶が得られ、そのうち状態の良好な壺（図 8・9）の図化を行った。どちらも 16～17 世紀に製作されたと考えられる資料である。図 8 は口縁部を丸く肥厚させる資料で、図 9 は底部で外底に目跡が見られる製品である。

第6表 中国・タイ産褐釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	出土地
					口径	器高	底径				
第22図 図版19	1	壺	口縁部	福建	19.6	—	—	全面に薄い黒褐色釉。微光沢あり。	にぶい黄色土でやや軟質。白色粒を含む。	外面の稜線が明瞭。内外の口縁部に青い光沢が横位に走る。磁電窯系。明代。	4トレI層
	2	壺	口縁部	中国	18.0	—	—	全面に薄い黒褐色釉。	赤褐色土で粗い。粗い白色粒、赤色粒を含む。	口縁三角形状で口唇が平坦。明代。	3トレII層
	3	壺	口縁部	中国	16.0	—	—	暗褐色の釉を非常に薄く施釉。	赤褐色土で粗い。粗い白色粒、赤色粒を多く含む。	口縁三角形状で口唇が広く平坦。外面頸部の轆轤痕が明瞭。肩部に叩き痕あり。清代。	6トレIケ サブトレI層
	4	壺	底部	中国	—	—	12.0	無釉。	赤褐色土で細かい。白色粒を多く含む。	内面胴部の轆轤痕が明瞭。清代か。	4トレII層
	5	壺	底部	中国	—	—	14.0	暗褐色の釉を非常に薄く施釉。内外胴部下半は無釉。	にぶい赤褐色土。底部は赤褐色と灰色の2層の素地。細かい白色粒を含む。	両面とも稜線が明瞭。底部付近に指痕付着。清代か。	6トレII層
	6	急須	口縁部	中国	11.0	—	—	黒褐色の釉を両面に施釉。	灰黄褐色土。細かい白色粒を密に含む。	内面胴部は無釉。17～18cか。	3トレI層
	7	植木鉢	口縁部	中国	—	—	—	外面は暗褐色の釉を薄く施釉。内面は赤褐色の釉を薄く施釉。	青灰色土で粗い。細かい白色粒を密に含む。粗い石英を少量含む。	口縁部断面がT字形の植木鉢。全体的に釉を薄く施釉。	4トレI層
	8	壺	口縁部	タイ	18.8	—	—	暗褐色の釉を薄く施釉。	灰白色土で粗い。白色粒や赤色粒が少量入る。	口縁部丸縁の壺。16～17cか。	2トレI層
	9	壺	底部	タイ	—	—	19.5	無釉。	素地は2層で灰色と灰褐色。堅緻。微細白色粒を少量含む。	内外面轆轤痕が明瞭。底部に目跡あり。16～17cか。	6トレI層



第 22 図 中国・タイ産褐釉陶器



図版 19 中国・タイ産褐釉陶器

5 その他の輸入陶磁器・洋食器

ここでは、前項に収まらない外国産の輸入陶磁器（色絵、褐釉染付、青磁染付、瑠璃釉、紫砂）と洋食器を一括して報告する。鉄釉、鉄釉染付、三彩、紅釉も出土しているが、細片のため図化していない。多くの種類の陶磁器が見られ、清代の陶磁器や西洋陶器、「MADE IN USA」の銘が入る磁器が得られるなど、中城御殿の変遷を垣間見ることができる。これら遺物の詳細は観察表に記述する。

1. 色絵（第23図1～8）

中国産色絵は総数85点が出土しており、そのうち8点を図化した。産地は景德鎮窯産が多く、次いで徳化窯産となる。その他福建産が少量含まれる。器種は碗が多く、小碗、皿、小杯、蓋、袋物は少量であった。

2. 紫砂（第23図9・10）

紫砂は総数36点が出土しており、2点を図化した。器種はほとんどが急須で、蓋、壺はごく僅かであった。図9は急須の注ぎ口、図10は急須の口縁部である。

3. 褐釉染付（第23図11）

中国産褐釉染付は総数2点を得られ、1点を図化した。今回得られた資料の器種は小碗のみで、2点とも景德鎮窯産であった。

4. 青磁染付（第23図12・13）

中国産青磁染付は総数15点が出土しており、そのうち2点を図化した。器種は碗、小碗があるが、その中でも小碗が多く見られ、産地が判別できた資料は全てが景德鎮窯産であった。図12は八卦文を施す資料で、図13は太極図を施す資料である。

5. 瑠璃釉（第23図14）

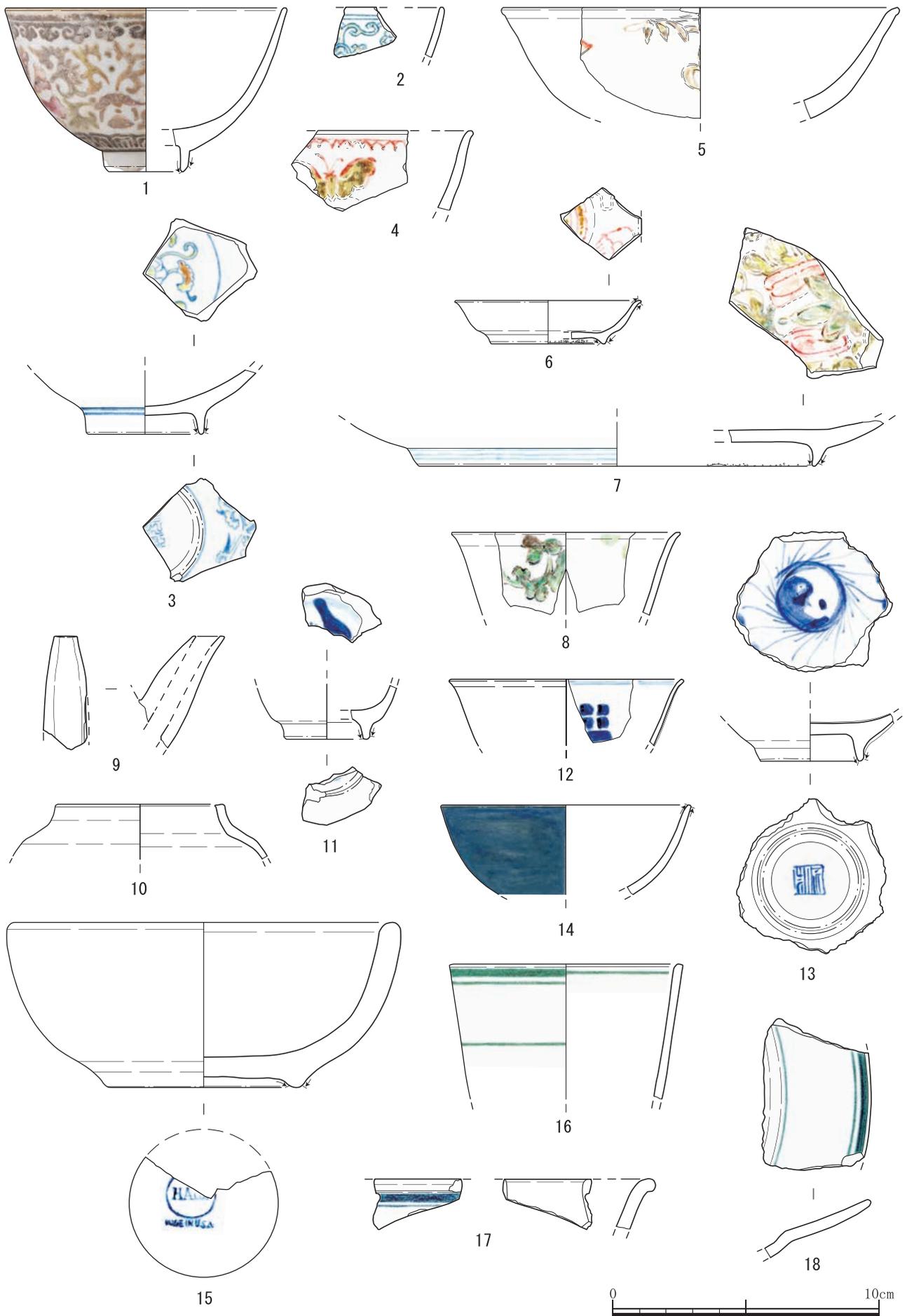
中国産の瑠璃釉は総数34点が出土し、そのうち1点を図化した。器種は小杯と小碗が多く見られ、碗、皿、袋物は少数であった。

6. 洋食器（第23図15～18）

洋食器は総数42点を得られ、そのうち4点を図化した。器種は皿が多く、次いで碗、小碗となるが、小碗はごく僅かであった。ティーカップと思われる製品（図16）やディナープレートと思われる製品（図18）も得られている。

第7表 その他の輸入陶磁器・洋食器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	産地	種別	法量 (cm)			文様構成	釉 (範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	出土地
						口径	器高	底径					
第23図 図版20	1	碗	口 底	景德鎮	色 絵	10.6	6.2	3.2	外面に花唐草文やラマ式 蓮弁。	釉を全面に施釉後、疊 付を釉剥ぎ。	白色でやや緻密。	粉彩の碗。外面上部の文様と外面 下部のラマ式蓮弁は青で彩色。外 面胴部中央は黄・緑・桃色で彩色。 19c 前～19c 中頃。	6トレII層
	2	小碗	口 縁部	景德鎮	色 絵	—	—	—	口縁部外面に圈線、胴 部外面に草花文。	両面に施釉。	白色で緻密。	豆彩の小碗。轆轤成形。清代。	4トレI層
	3	碗	底 部	景德鎮	色 絵	—	—	4.4	内底および胴部外面に草 花文。外底に銘款。	釉を全面に施釉後、疊 付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	豆彩の碗。「道光年製」の記銘あり。 官窯クラス。轆轤成形。18c 前半～ 18c 中頃。	6トレI層
	4	碗	口 縁部	徳化	色 絵	—	—	—	外面上部に圈線・蓮弁。 外面中央部に蝶のような 文様。	釉を全面に施釉。	灰白色で緻密。	型成形。清代。	1トレI層
	5	碗	口 縁部	福建	色 絵	15	—	—	外面に植物のような文様。	釉を全面に施釉。	灰白色でやや緻 密。	轆轤痕が外面に明瞭。轆轤成形。 清代。	4トレI層
	6	皿	口 底	徳化	色 絵	7	1.65	4.3	胴部内面、内底に施文 するが不鮮明。	釉を全面に施釉後、口 唇部と疊付を釉剥ぎ。	白色でやや緻密。	疊付に溶着防止の砂付着。型成形。 清代。	4トレII層
	7	皿	底 部	景德鎮	色 絵	—	—	15.1	内面に草花文、高台に3 条の圈線。	釉を全面に施釉後、疊 付を釉剥ぎ。	白色でやや緻密。	轆轤成形。清代。	4トレI層
	8	小碗	口 縁部	徳化	色 絵	8.6	—	—	外面に草花文。	釉を全面に施釉後、口 唇部を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に微小なシワあり。内面に調整 痕が明瞭。清代。	4トレI層
	9	急須	注 口	中国	紫 砂	—	—	—	無文。	無釉。	暗赤灰色で硬質。	紫泥。器面はなめらか。型成形。 清代。	6トレI層
	10	急須	口 縁部	中国	紫 砂	6.4	—	—	無文。	無釉。	赤褐色で硬質。	朱泥。外面はなめらかで、内面は ざらつく。清代。	4トレI層
	11	小碗	底 部	景德鎮	褐 釉 染 付	—	—	3.2	内底に施文するが不鮮 明。外底に圈線。	外面と内面の釉を掛け 分け、疊付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	轆轤成形。清代。	4トレI層
	12	小碗	口 縁部	景德鎮	青 磁 染 付	8.8	—	—	口縁部内面に圈線、胴 部内面に八卦文。	外面と内面の釉を掛け 分け。	白色で緻密。	轆轤成形。18c 後半～19c 前半。	4トレI層
	13	小碗	底 部	景德鎮	青 磁 染 付	—	—	3.9	内底に太極図。外底に 銘款。	外面と内面の釉を掛け 分け、疊付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	轆轤成形。清代。	4トレI層
	14	碗	口 縁部	徳化	瑠 璃 釉	9.4	—	—	無文。	外面と内面の釉を掛け 分け、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	瑠璃釉厚手。型成形。18c 後半～ 19c 前半。	6トレ層
	15	碗	口 底	西洋	磁 器	14.8	6.25	7.2	無文。	透明釉を全面に施釉後、 疊付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	大型の碗。外底に「MADE IN USA」の文字。	6トレII層
	16	碗	口 縁部	西洋	陶 器	8.8	—	—	口縁部の内外面と胴部外 面に圈線。全面に細かい 貫入。	透明釉を両面に施釉。	白色で細かい。	直口する形状からティーカップか。 断面に煤付着。	1トレI層
	17	鉢	口 縁部	西洋	陶 器	—	—	—	口縁部外面に二重圈線。 全面に細かい貫入。	透明釉を両面に施釉。	白色でやや細か い。	口縁形状は玉縁。	4トレI層
	18	皿	口 縁部	西洋	陶 器	—	—	—	口縁部内面に圈線。	透明釉を両面に施釉。	白色でやや粗い。	折縁皿でディナー(ミート)プレート と思われる。	6トレイク I層



第 23 図 その他の輸入陶磁器・洋食器



図版 20 その他の輸入陶磁器・洋食器

6 本土産陶磁器

本土産陶磁器は近世から近代までの製品が出土した。近代の製品については特徴的なものを図化し、それ以外は写真のみで報告する。以下に種別ごとの概要を記し、詳細は観察表で述べる。

1. 青磁・色絵（第24図1～6）

ここでは2種の陶磁器をまとめた。青磁は7点、色絵は424点出土した。その中で青磁2点(図1・2)、色絵(図3～6)4点を図化し、報告する。器種は碗(図1・3・5)、香炉(図2)、深皿(図4)、皿(図6)で、産地は肥前産や瀬戸美濃産がある。

2. 染付（第24図7～11）

染付は234点出土している。器種は碗、皿、角皿、袋物で、この中の碗(図7～9)、角皿(図10)、皿(図11)を図化した。皿(図11)は洋食器だが本土産なので当項に含めた。

3. 施釉・褐釉陶器（第25図12～14・19～21・第26図22）

施釉陶器は328点、褐釉陶器は396点出土し、その中で施釉陶器は3点(図12～14)、褐釉陶器は4点(図19～22)を図化し報告する。施釉陶器の器種は碗(図12・13)、蓋(図14)で、産地は肥前や薩摩がある。褐釉陶器の器種は壺(図19～21)および陶管(図22)で、産地は薩摩がある。

4. 本土産磁器（第25図15～18・図版24-23～33）

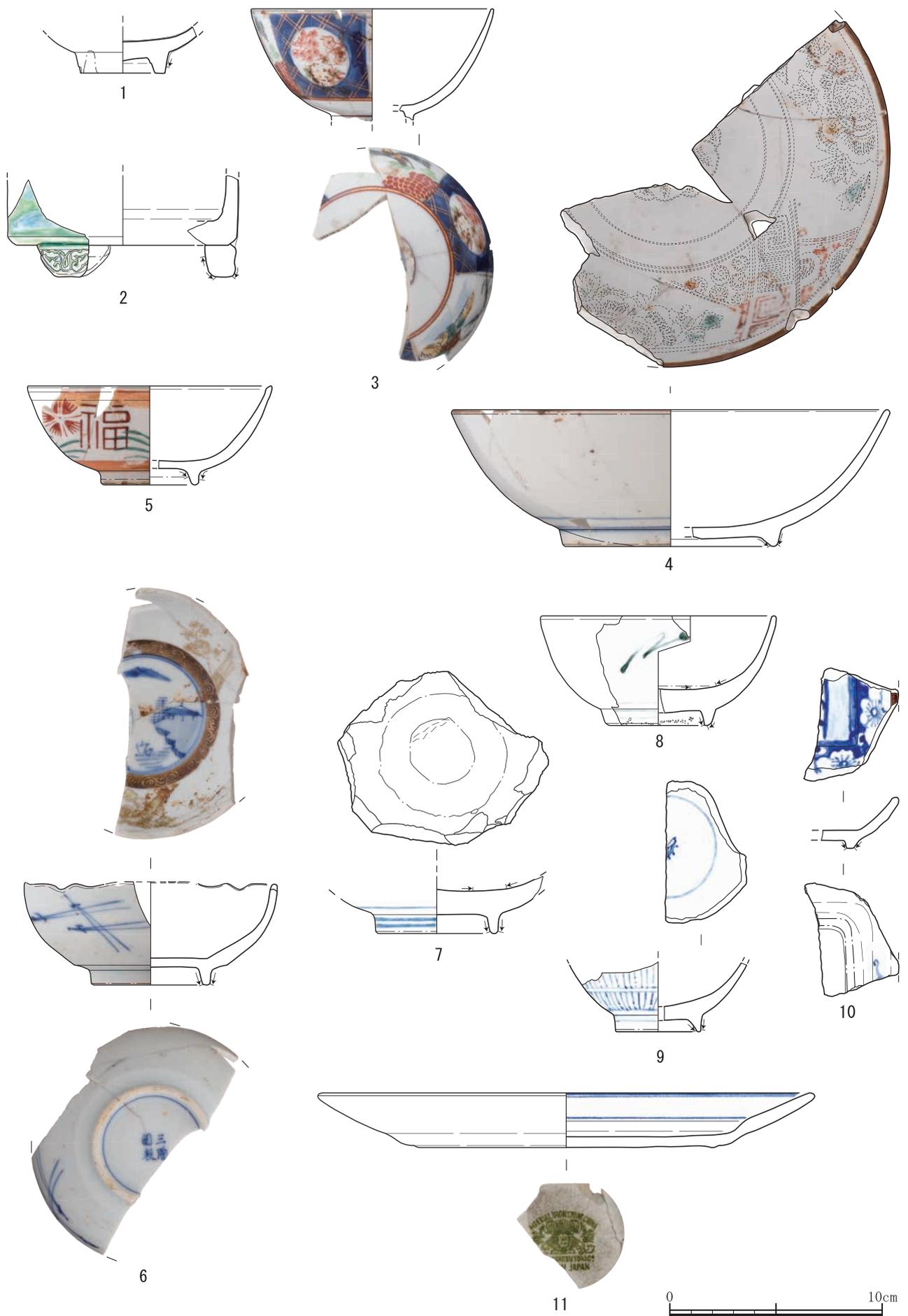
本項で本土産磁器としてあげたのは、前項に収まらない明治以降の製品や、1941～1945年まで生産されたいわゆる統制陶器を指す。総計4,414点出土しており、ここでは15点を報告する。器種は碗(図15・16・図版24-23～27)の他にパレット(図17)や湯呑み(図版24-29)など多様である。また、浦添市内間西原古墓群で顔料が入った状態で出土した磁器製容器(浦添市教育委員会1994)と類似する製品(図版24-33)もある。

第8表 本土産陶磁器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	種別	器種	産地	部位	法量(cm)			釉 (色・質・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見	出土地
						口径	器高	底径				
第24図 図版21	1	青磁	碗	肥前	底部	—	—	4.0	釉を内面から高台まで施釉。高台の一部から外底が露胎。	灰白色で細かい。	内底の釉があばた状に剥がれる。壘付の形状が不均一。17cか。	4トレI層
	2	青磁	香炉	瀬戸美濃	底部	—	—	10.8	釉を外面に施釉。壘付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内面に轆轤成形痕が明瞭。底部に浮文を施す。近代。	6トレI層
	3	色絵	碗	本土	口縁部	11.4	—	—	釉を全面に施釉。	白色で緻密。	外面の口縁部と腰部に金色の圏線。金色の線で区画し、四方禰、松、山水などの文様を施す。近代。	6トレI層
	4	色絵	深皿	本土	口～底	20.6	6.5	10.2	釉を全面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	内底に草花文や雷文を施すが不鮮明。近代。	6トレII層
	5	色絵	碗	瀬戸美濃	口～底	11.5	4.7	4.6	釉を全面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。黒色粒を少し含む。	色絵で草花文と「福」の文字。外面の口縁部と腰部に光沢の強い橙色の圏線。近代。	6トレイケI層
	6	色絵	皿	本土	口～底	11.9	4.9	5.6	釉を全面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	口縁部形状は波状。外面に草のような文様。内面に桜文や渦巻文。内底に山水文。近代。	6トレイケI層
	7	染付	碗	肥前	底部	—	—	5.8	釉を両面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	内底と壘付に溶着防止の砂付着。近世。	3トレイシジキ3I層
	8	染付	碗	肥前	口～底	11.1	5.2	5.0	釉を全面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	壘付に溶着防止の砂付着。19c。	1トレI層
	9	染付	碗	肥前	底部	—	—	4.0	釉を両面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	内底に目跡。内底に文様を施すが不鮮明。近世。	1トレI層
	10	染付	角皿	肥前	口～底	—	2.4	—	釉を全面に施釉後、壘付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内面に花文などを施すが不鮮明。19c後半。	6トレI層

第8表 本土産陶磁器観察一覧2

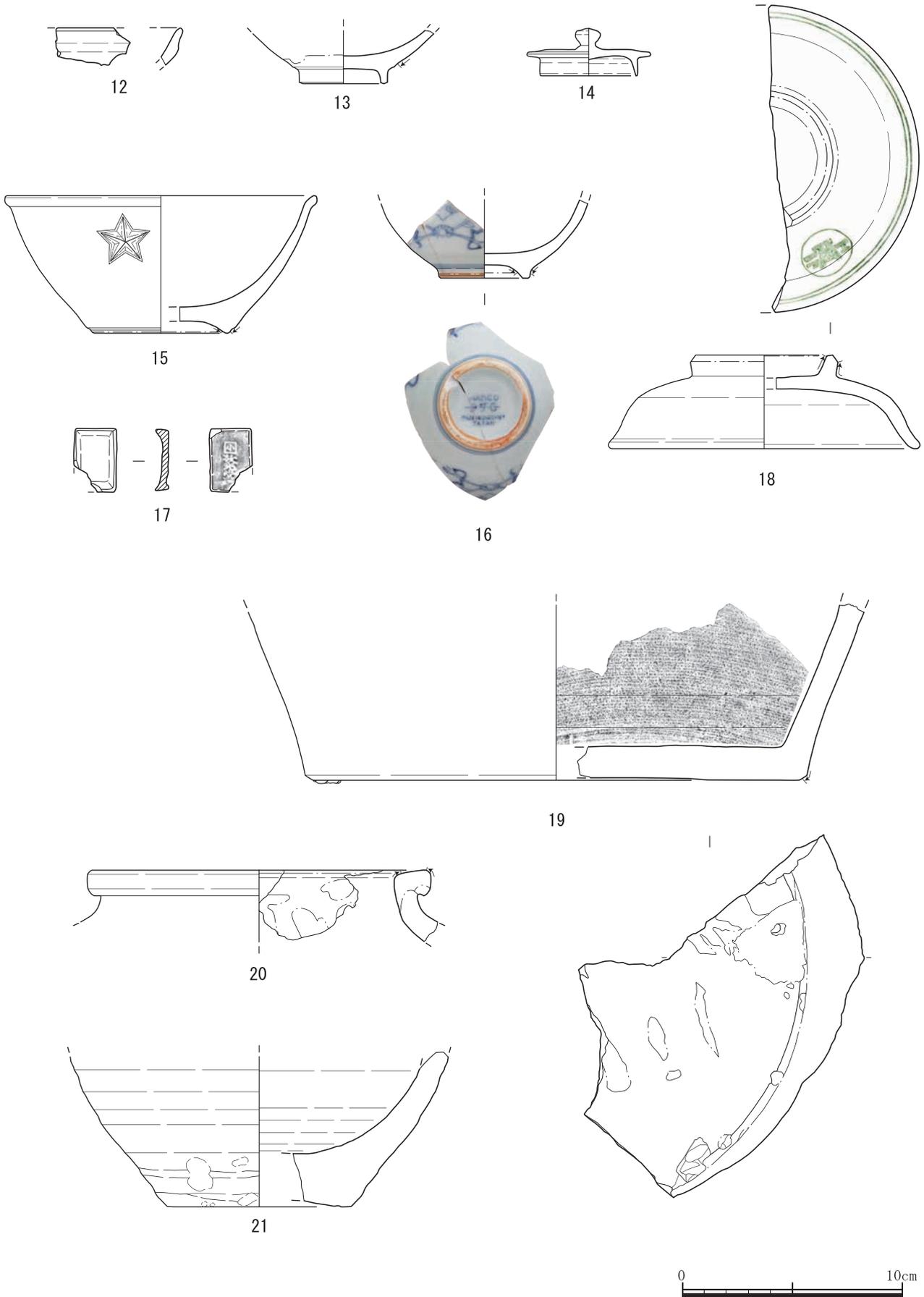
挿図番号 図版番号	番号	種別	器種	産地	部位	法量(cm)			釉 (範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	所見	出土地
						口径	器高	底径				
第24図 図版21	11	染付	皿	本土	口～底	23.4	2.6	14.0	釉を全面に施釉。	白色で細かい。	内面口縁・胴部に圈線。全面に細かい貫入あり。不鮮明ながら外底に「IN JAPAN」の銘があり、日本製か。	6トレⅡ層
第25図 図版22	12	施釉	碗	肥前	口縁部	—	—	—	釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。	天目茶碗の口縁部。1590～1610年代か。	4トレⅠ層
	13	施釉	碗	肥前	底部	—	—	4.0	透明釉を両面に施釉。外面胴部以下は露胎。	灰黄色で細かい。	高台脇に轆轤成形痕が明瞭。近世。	3トレⅠ層
	14	施釉	蓋	本土	撮み～袴	庇 5.6	袴 4.4	—	釉を全面に施釉。	暗赤褐色で緻密。	急須の蓋。撮みの傍に孔あり。轆轤成形。近代。	4トレⅡ層
	15	本磁	碗	瀬戸美濃	口～底	14.2	6.3	6.3	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	口縁形状は玉縁。大日本帝国陸軍の帽章となる五芒星が陰刻されることから、軍用食器と思われる。20c。	6トレイ サブトレⅠ層
	16	本磁	碗	本土	底部	—	—	4.2	やや青みがかった釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	ペンシルドローイングによる草花文。外底に「JAPAN」の文字が施されるが不鮮明。近代。	6トレⅠ層
	17	本磁	パレット トカ	本土	口～底	縦 2.9	横 1.9	厚 0.6 0.3	釉を全面に施釉。	白色で緻密。	外底に「小 放光堂」の凸印。型成形。絵画で使用するパレットと思われる。近代か。	6トレⅠ層
	18	本磁	蓋	本土	撮み～庇	撮み 6.7	庇 14.1	—	釉を全面に施釉後、撮みを釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に緑色の二重圈線と「栄」のマークを施す。どんぶり碗の蓋か。近代。	6トレイ サブトレⅠ層
	19	褐釉	壺	薩摩	底部	—	—	22.8	釉を内底から外面胴部に施釉。底部は無釉。	赤褐色で粗い。石英・白粒を多く含む。	内底から胴部内面にかけて轆轤成形痕が明瞭。底部に貝目あり。近世末。	1トレⅠ層
	20	褐釉	壺	薩摩	口縁部	15.6	—	—	釉を全面に施釉。	暗灰色で粗い。石英含む。	口唇部から口縁部内面にかけてナデ調整痕が明瞭。	3トレⅡ層
	21	褐釉	壺	薩摩	底部	—	—	8.4	釉を外底から外面胴部に施釉。	灰色で粗い。白粒を多く含む。	内外面胴部に轆轤成形痕が明瞭。	6トレⅠ層
第26図 図版23	22	褐釉	陶管	薩摩	口～底	広端 21.8	狭端 17.25	長さ 59.6	釉を両面に施釉。内面の釉はムラが多い。	赤褐色でやや粗い。白粒・石英を含む。	狭端部の外面に12条の横位沈線。内面に櫛状工具による調整痕や指ナデ痕が明瞭。	6トレⅠ層
図版24	23	本磁	碗	瀬戸美濃	口～底	16.2	—	—	釉を全面に施釉。	白色で緻密。	底部に「瀬234」の緑具須印。軍用食器か。型成形。	6トレイ サブトレⅠ層
	24	本磁	碗	砥部	口～底	13.4	6.2	4.6	全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内外面に型紙刷りによる文様。口縁内面・内底・高台脇・高台側面の圈線手書き。内底に目跡あり。いわゆるスナンマカイ。近代。	6トレⅠ層
	25	本磁	碗	砥部	口～底	13.8	6.3	5.2	全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内外面に型紙刷りによる文様。口縁内面・内底・高台脇・高台側面の圈線手書き。内底に目跡あり。いわゆるスナンマカイ。近代。	1トレⅠ層
	26	本磁	碗	本土	口～底	10.0	5.1	3.4	全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面胴部に色絵による草花文と人物文を施す。近代。	6トレⅡ層
	27	本磁	碗	瀬戸美濃	底部	—	—	—	両面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外底に「岐40」の凸印。	1トレⅠ層
	28	本磁	小碗	瀬戸美濃	口～底	8.8	5.1	3.4	全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外底に「品164」の具須印。	6トレイ サブトレⅠ層
	29	本磁	湯呑み	本土	口～底	8.8	9.25	5.6	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台脇は釉厚め。	白色で緻密。	外面胴部に型成形の痕跡あり。胴部から高台にかけて花のような浮文や波状文を施す。近代。	6トレⅡ層
	30	本磁	小碗	瀬戸美濃	底部	—	—	3.6	外面と内面を掛け分け後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	クロム青磁。外底に「岐867」の具須印。型成形か。	6トレイ サブトレⅠ層
	31	本磁	杯	瀬戸美濃	口～底	5.6	2.9	2.1	釉を全面に施釉後、高台下部から畳付を釉剥ぎ。	緑色で緻密。	内底に型成形の痕跡あり。近代。	4トレⅠ層
	32	本磁	小杯	本土	口～底	5.1	2.8	2.0	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面胴部に寿文字や植物のような文様を施す。畳付に溶着防止の砂付着。型成形か。近代。	6トレイ サブトレⅠ層
	33	本磁	容器	瀬戸美濃	口～底	2.6	2.3	2.4	釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	平面観が外面は8角形、内面は円形。外底に「岐155」の凸印。顔料を入れた容器か(浦添市教育委員会1994)。	6トレ不明



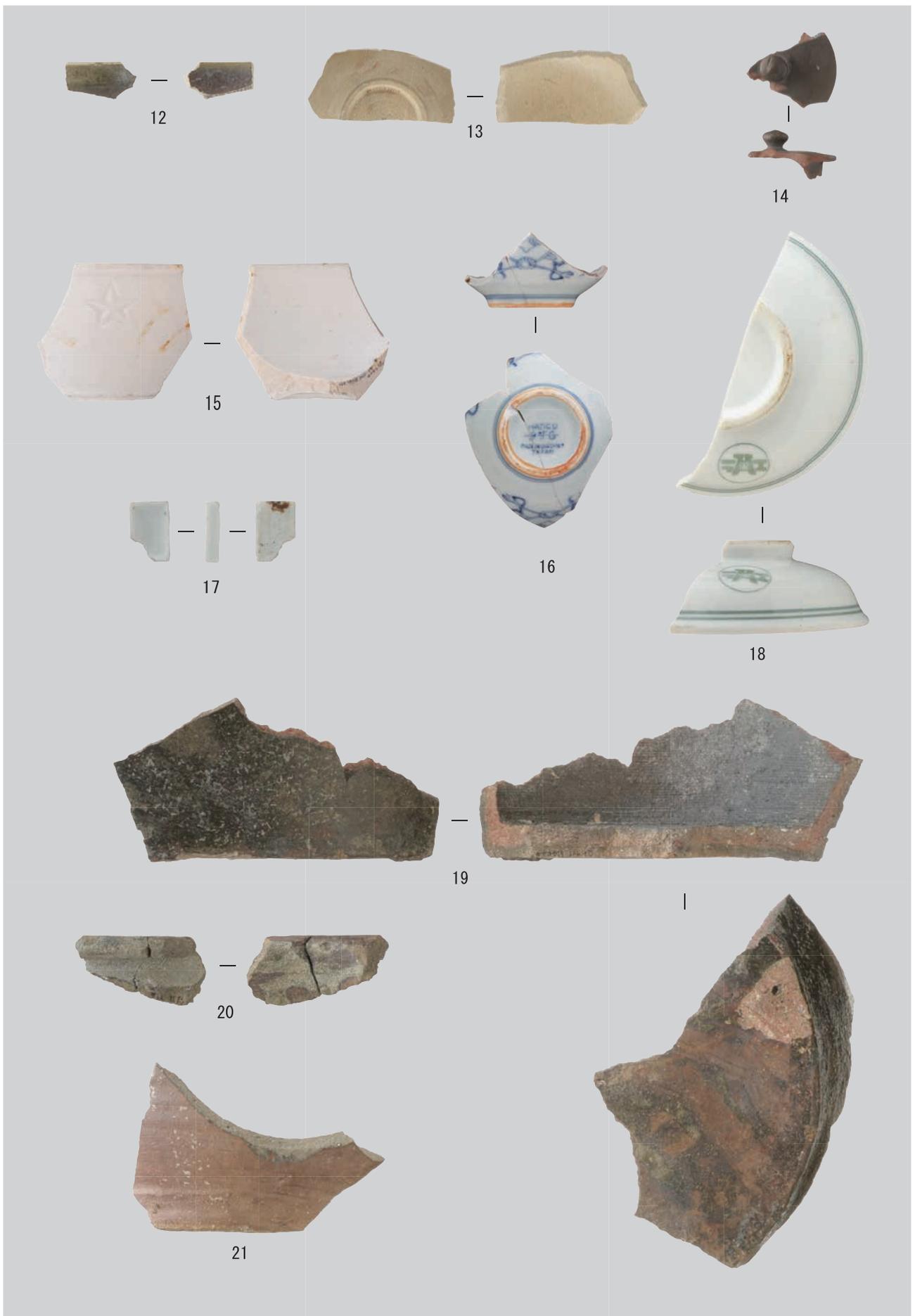
第 24 図 本土産陶磁器 1



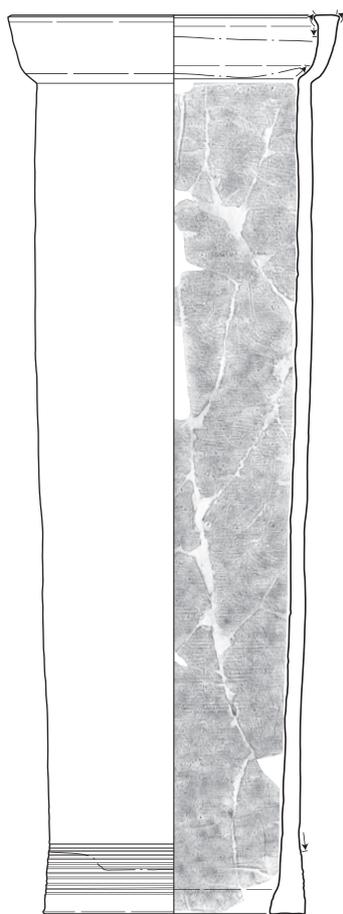
图版 21 本土産陶磁器 1



第 25 図 本土産陶磁器 2



图版 22 本土産陶磁器 2



22

0 10cm



22

第 26 图 本土産陶磁器 3

図版 23 本土産陶磁器 3



图版 24 本土産陶磁器 4

7 沖縄産施釉陶器

方言で「上焼(ジョウヤチ)」と称する一群で、器の表面に釉薬を施す製品である。総数は7,014点が出土している。器種は多くの種類が見られるが、今回の報告では状態の良好な碗、小碗、皿、小杯、灯明皿、湯呑み、鉢、急須、鍋、蓋、火入、火炉、灯明具の図化を行った。詳細は観察表に記述する。碗と小碗は釉や文様に多くの種類が見られたため、キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4(金城2017)の分類方法を参考にし、さらに本遺跡の特徴的な項目を追加し分類を行った。碗と小碗の分類は以下の通りである。

碗(第27図1～8)

- A類: 灰釉を単掛けするもの。文様の有無から、1類(無文)と2類(有文)に分けた。
- B類: 白釉を単掛けするもの。文様の有無から、1類(無文)と2類(有文)に分けた。
- C類: 黒釉を施釉するもの。施釉方法と文様の有無から、1類(黒釉単掛けで無文)、2類(黒釉と灰釉を掛け分け、①無文、②有文)、3類(黒釉と白釉を掛け分け、①無文、②有文)、4類(黒釉と鉄釉を掛け分け)に分けた。
- D類: 鉄釉を施釉するもの。施釉方法から、1類(鉄釉単掛けで無文)、2類(鉄釉と灰釉の掛け分け)、3類(鉄釉と白釉の掛け分け)に分けた。
- E類: 緑釉を施釉するもの。施釉方法から、1類(緑釉単掛けで無文)、2類(緑釉と灰釉を掛け分け)、3類(緑釉と白釉を掛け分け)に分けた。
- F類: 褐色釉を施釉するもの。施釉方法から、1類(褐色釉単掛け無文)、2類(褐色釉と白釉を掛け分け)に分けた。
- G類: イッチン技法を施すもの。
- A-2類、B-1類、C-2類、D-1類、D-3類、E類、F-2類は小片のため図化を行っていない。

小碗(第27図9～14)

- A類: 灰釉を単掛けするもの
- B類: 白釉を単掛けするもの。文様の有無と器形から、1類(無文)、2類(無文で胴部に面取り)、3類(有文)に分けた。
- C類: 黒釉を施釉するもの。施釉方法から、1類(黒釉を単掛け)、2類(黒釉と灰釉を掛け分け)、3類(黒釉と白釉を掛け分け、①無文、②有文)に分けた。
- D類: 鉄釉を施釉するもの。施釉方法と器形から、1類(鉄釉を単掛け)、2類(鉄釉を単掛けし胴部に面取り)、3類(鉄釉と灰釉を掛け分け)、4類(鉄釉と白釉を掛け分け)に分けた。
- E類: イッチン技法を施すもの。
- A類、B-2類、C-1類、C-2類、D類は小片のため図化を行っていない。

第9表 沖縄産施釉陶器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量 (cm)			釉・文様 (種類・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	出土地
					口径	器高	底径				
第27図 図版25	1	碗	A-1	底部	—	—	6.1	灰釉 釉を内外胴部半ばまで施釉。無文。	灰色で細かい。	内底に溶着防止の砂付着。	1トレI層
	2	碗	B-2	口縁部	11.4	—	—	白釉 白釉を外側胴部に施釉し、その上から全面に透明釉を掛ける。外面胴部に線彫。	灰色で緻密。	外面胴部に轆轤痕が明瞭。線彫部の釉が緑色。	6トレイクサブトレI層
	3	碗	B-2	口～底	14.2	6.6	6.4	白釉 白釉を全面に施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、量付を釉剥ぎ。内面口縁から外面胴部にかけて具須の文様。	黄白色でやや軟質。	内底と量付に白土付着。	6トレII層

第9表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

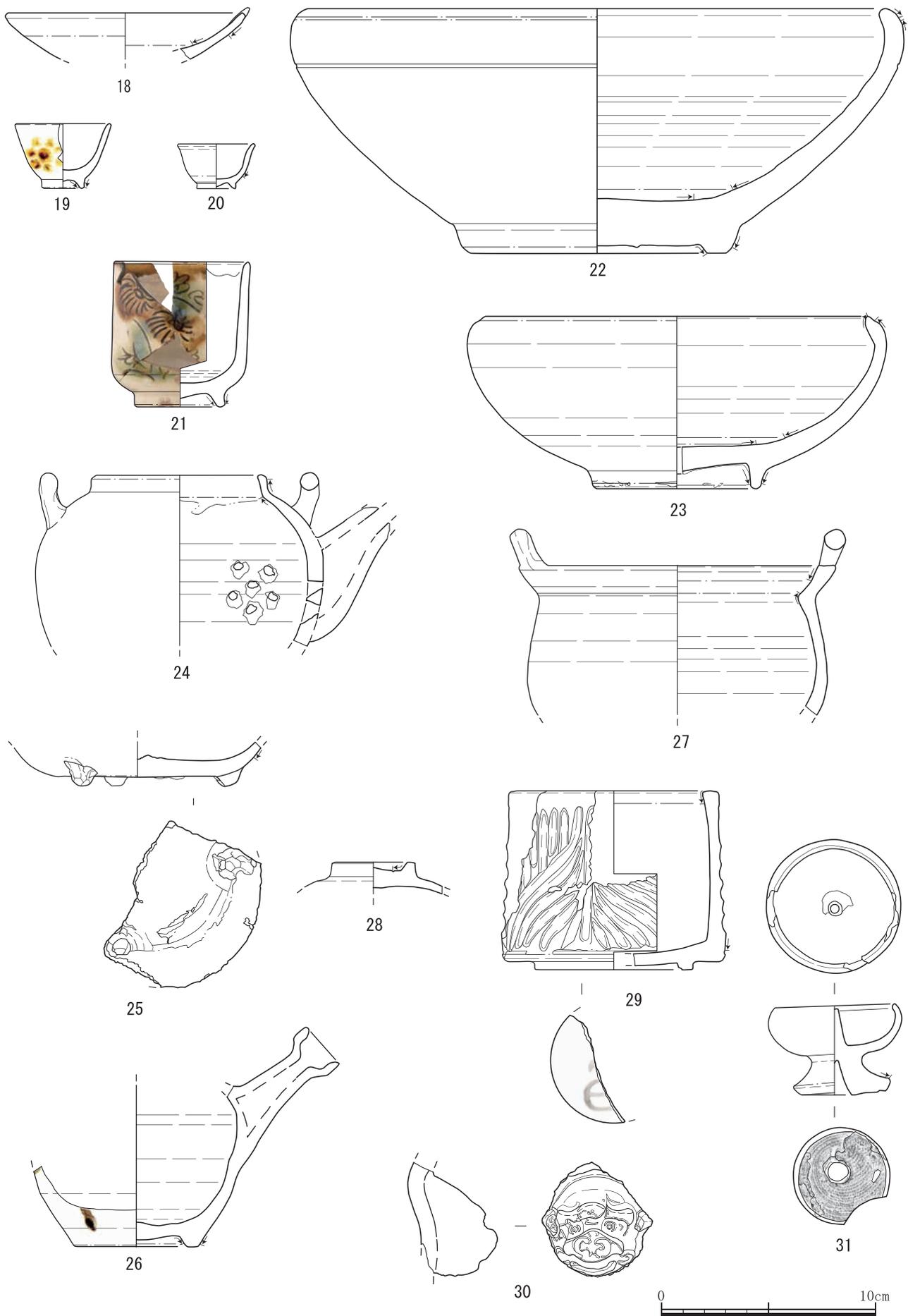
挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量 (cm)			釉・文様 (種類・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	出土地
					口径	器高	底径				
第27図 図版25	4	碗	C-3-①	口～底	11.6	5.9	5.5	黒釉 外面は黒釉、内面は白化粧と透明釉を施釉。内底を蛇の目釉剥ぎ。高台下半は露胎。無文。	灰色で細かい。	内底と畳付に白土付着。	4トレⅠ層
	5	碗	C-1	口～底	12.6	5.8	5.8	黒釉 外面胴部から内面胴部まで施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ。高台は露胎。無文。	灰色で緻密。	内底と畳付に白土付着。	4トレⅠ層
	6	碗	D-2	底部	—	—	6.0	掛け分け 外面は鉄釉、内面は灰釉を施釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。高台は露胎。無文。	灰色で緻密。	高台と内底に白土付着。	4トレⅠ層
	7	碗	F-1	口縁部	16.3	—	—	褐釉 釉を両面に施釉。内面胴部以下は露胎。無文。	淡橙褐色で細かい。	口縁が直口する碗。	4トレⅠ層
	8	碗	G	口～底	11.5	5.45	4.8	イツチン 釉を全面に施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。蛇の目部に白化粧を施す。外面に圏線と波状文、内面に圏線、内底に渦巻状の文様。	灰色で細かい。	畳付に白土付着。	6トレイ サブトレⅠ層
	9	小碗	B-1	口～底	8.3	4.3	3.8	白釉 全面白釉で内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。蛇の目部に白化粧を施す。無文。	黄白色でやや軟質。	畳付に白土付着。	6トレⅡ層
	10	小碗	B-2	口～底	7.9	5.05	3.8	白釉 全面に白釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面胴部を面取り。無文。	灰色で緻密。	畳付に白土付着。内底に溶着防止の砂付着。	4トレⅠ層
	11	小碗	B-3	底部	—	—	3.3	白釉 外面は練込釉に上から透明釉、内面は白釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。	褐色と白色がマーブル状でやや軟質。	畳付に溶着防止の砂付着。	1トレⅠ層
	12	小碗	B-3	口～底	8.6	4.7	4.0	白釉 全面に白釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。呉須で外面に草花文、内面に花文。	黄白色でやや軟質。	畳付に溶着防止の砂付着。	6トレⅡ層
	13	小碗	C-3-①	口～底	8.0	4.4	3.8	掛け分け 外面は黒釉、内面に白釉を施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。蛇の目部に白化粧を施す。無文。	暗赤褐色で緻密。	畳付に白土付着。	6トレⅡ層
	14	小碗	E	口～底	9.2	5.0	3.7	イツチン 釉を全面に施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。蛇の目部に白化粧を施す。外面に施文。	橙色で細かい。	外底に溶着防止の砂付着。	6トレイ サブトレⅠ層
	15	皿	—	口～底	10.1	2.75	4.6	白釉 全面に白釉を施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。内底に「獸」の文様。	褐色で細かい。	畳付に白土付着。中国の十二章の模様「獸」を内底に施す。	6トレⅡ層
	16	皿	—	口～底	10.5	3.05 (3.0)	4.3	掛け分け 内面に白釉、外面口縁部に灰釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面胴部以下は露胎。無文。	黄白色でやや軟質。	畳付から高台内部にかけて白土付着。	1トレⅡ層
	17	皿	—	口縁部	9.6	—	—	掛け分け 外面は黒釉、内面は白釉を施釉後、内底を釉剥ぎ。内面口縁部から内面胴部にかけて数条の浮線を施文。	淡橙褐色でやや軟質。	内面に貫入が見られる。	3トレⅠ層
	第28図 図版26	18	灯明皿	—	口縁部	11.2	—	—	黒釉 両面に黒釉を施釉。内面胴部下半と外面胴部下半は露胎。無文。	黄白色でやや軟質。	口縁部に三角状の突起を有する。
19		小杯	—	口～底	4.5	3.1	2.0	透明 全面に釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面胴部に花文を施す。	白色でやや軟質。	畳付に白土付着。内面は轆轤痕が明瞭。	6トレⅡ層
20		小杯	—	口～底	3.6	2.1	1.8	透明 全面に釉を施釉。外面胴部下半以下は露胎。無文。	灰白色で細かい。	内面の轆轤痕が明瞭。	1トレⅠ層
21		湯呑み	—	口～底	6.5	6.9	4.3	白釉 全面に白釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面胴部に線影で草花文を施文。	淡橙褐色で細かい。	畳付に白土付着。高台内部に微量の砂付着。	6トレイ サブトレⅠ層
22		鉢	—	口～底	26.8	11.5	12.6	掛け分け 外面は褐色釉、内面に白釉を施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎ。無文。	淡黄白色でやや軟質。	内底に白土付着。外底に目跡あり。	6トレⅡ層
23		鉢	—	口～底	17.9	8.1	7.8	掛け分け 外面は黒釉、内面は白釉を施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ、畳付は釉剥ぎ。無文。	淡黄白色でやや軟質。	内底と畳付に白土付着。	6トレⅡ層
24		急須	—	口縁部	8.2	—	—	掛け分け 外面は白釉、内面は褐色釉を施文。無文。	橙色で細かい。	両面とも轆轤痕が明瞭。	6トレⅡ層
25		急須	—	底部	—	—	7.9	白釉 外面は白釉、内面と底部は露胎。	灰色でやや粗い。	焼成時に付着したと思われる黒釉が底部に付着。	3トレⅡ層
26		急須	—	底部	—	—	5.8	掛け分け 外面は白釉、内面は鉄釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。外面胴部に鉄絵を施す。	灰色で緻密。	外底に微量の砂付着。	6トレイ サブトレⅠ層
27		鍋	—	口縁部	14.8	—	—	掛け分け 外面は黒釉、内面は白釉を施釉。口縁部の蓋の設置部を釉剥ぎ。	黄白色でやや軟質。	口縁部の釉剥ぎ部分に白化粧を施す。	6トレⅡ層
28		蓋	—	撮み	撮み 3.9	—	—	褐釉 外面を施釉、内面は露胎。	明赤褐色で細かい。	内面の轆轤痕が明瞭。	6トレⅠ層
29		火入	—	口～底	9.8	8.4	7.4	黒釉 外面から内面口縁部まで施釉、内面は露胎。外面胴部を線影で施文。	橙色で細かい。	内面の轆轤痕が明瞭。外底に墨書きあり。	4トレⅠ層
30		火炉	—	胴部	—	—	—	鉄釉 外面は鉄釉、内面は露胎。	灰色で緻密。	内面の轆轤痕が明瞭。獣面の双耳。	6トレⅡ層
31		灯明具	—	口～底	5.6	4.3 (4.1)	4.5	褐釉 全面施釉し、底部のみ露胎。	橙色で細かい。	外底に糸切り痕が明瞭。	3トレⅠ層



第 27 図 沖縄産施釉陶器 1



図版 25 沖縄産施釉陶器 1



第 28 図 沖縄産施釉陶器 2



图版 26 沖縄産施釉陶器 2

8 沖縄産無釉陶器

方言で「荒焼（アラヤチ）」と称する焼き締め陶器の一群で、総数 2,726 点が出土している。今回の報告では、那覇市湧田古窯を中心に焼成されたと考えられる初期沖縄産無釉陶器も本項に含めている。出土する器種は壺・甕類が多く、次いで鉢、播鉢、瓶、植木鉢の順で続く。ここでは状態の良好な 13 点の図化を行い、初期沖縄産無釉陶器は小片のため図化を行っていない。以下、器種ごとに概要を述べ、詳細は観察表に記述する。

①灯明皿（第 29 図 1）

煤が付着することから灯明皿と考えられる。

②播鉢（第 29 図 2～4）

口縁が逆 L 字状の製品（図 2・3）と注口（図 4）がある。いずれも轆轤痕が明瞭である。

③鉢（第 29 図 5）

高台をもつ鉢で、外底に窯印と考えられる沈線がある。

④植木鉢（第 29 図 6・7）

肥厚して段をもつ植木鉢（図 6）と、水抜き孔を有する植木鉢の底部（図 7）がある。

⑤蓋（第 29 図 8）

壺の蓋。下部は丁寧に仕上げるが、上面はナデが徹底せず、器面は粗い。

⑥壺（第 29 図 9・10）

口縁が玉縁状の資料である。図 9 は口縁からゆるやかに肩部に至り、図 10 は口縁からそのまま肩部に至る器形である。

⑦火炉（第 29 図 11）

耳を有する製品。口縁や口縁の割れ付近に煤が付着する。

⑧焜炉（第 29 図 12）

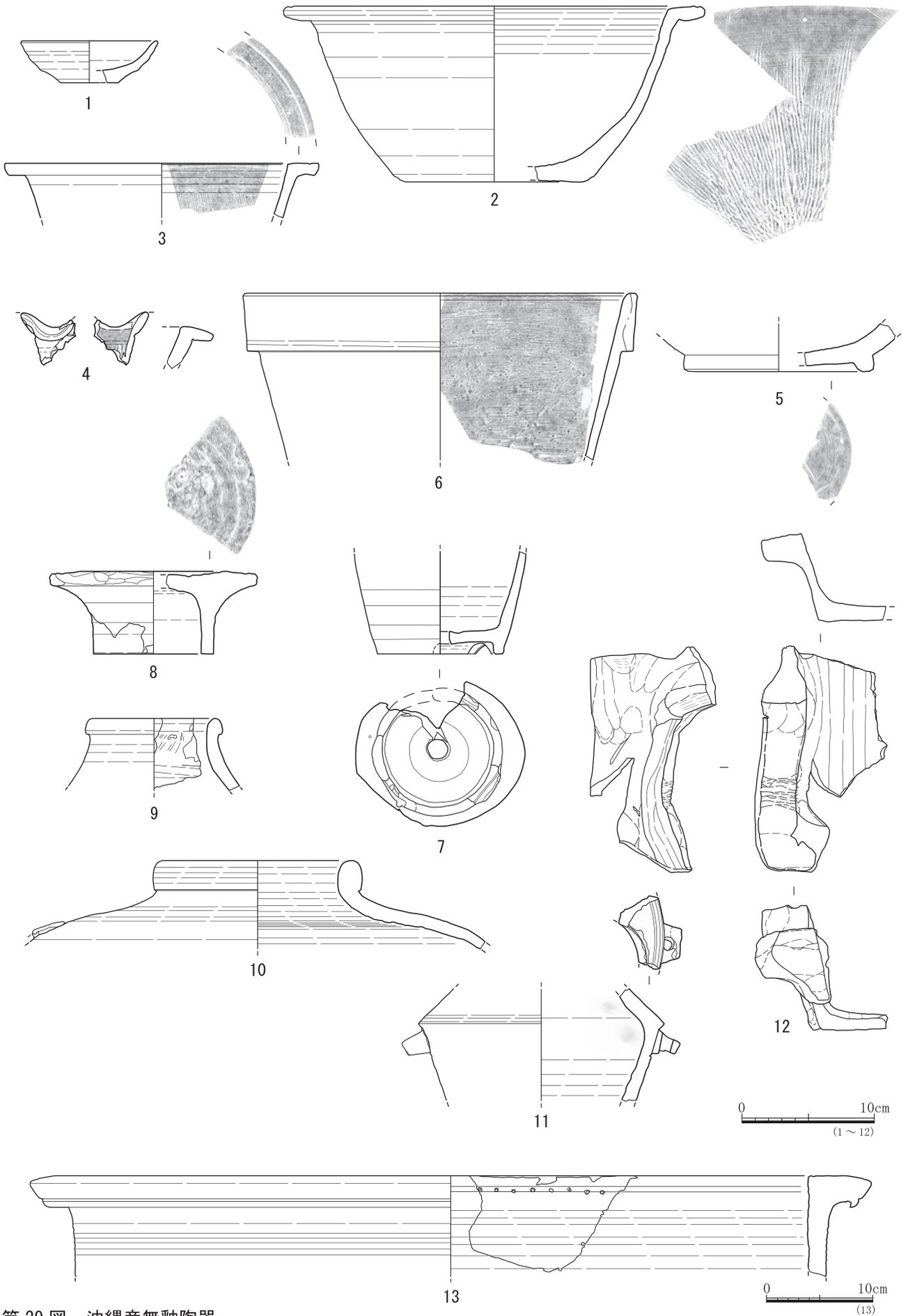
指ナデ痕や爪痕が残る製品。胎土に靨殻を含み、器面に靨殻痕が見られる。

⑨甕（第 29 図 13）

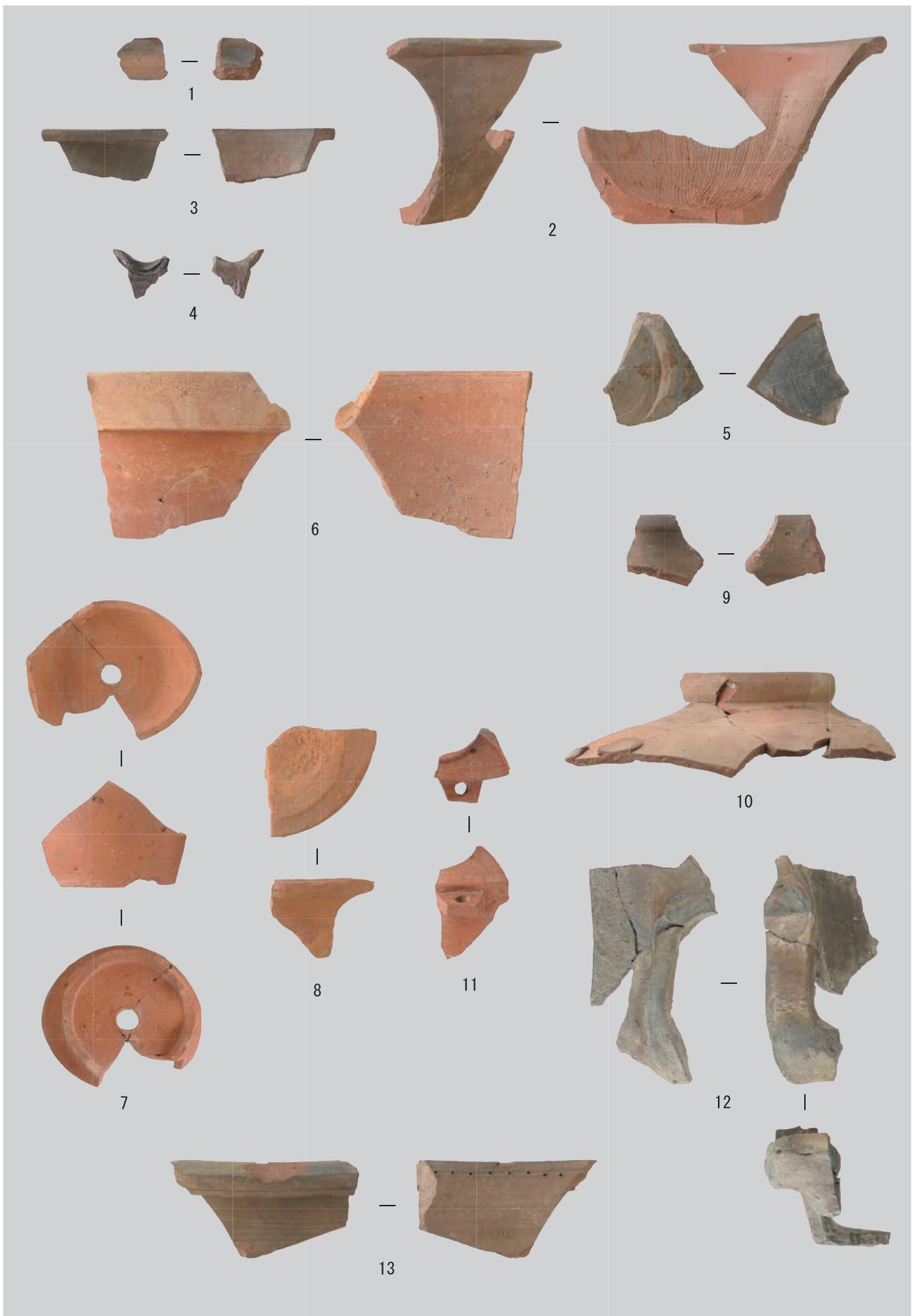
水甕と考えられる資料。口縁断面が逆 L 字状を呈す。口縁部の内側に横位の刺突を施す。

第 10 表 沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			色調			混入物	成形・調整・文様等	出土地
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第 29 図 図版 27	1	灯 明 皿	口～底	10.4	3.2	4.4	褐色	褐色	黒褐色	なし	ベタ底の灯明皿。内外面轆轤痕明瞭。口縁部外面と胴部内面に煤付着。	3トレ I 層
	2	播 鉢	口～底	31.8	13.4	13.4	暗赤褐色	暗赤褐色	赤褐色	白色粒僅か	内外面轆轤痕が明瞭。楯目は隙間なく密。	6トレイケ I 層
	3	播 鉢	口縁部	23.7	—	—	暗赤褐色	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	なし	内外面轆轤痕が明瞭。楯目は浅い。	2トレ I 層
	4	播 鉢	注口	—	—	—	黒褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	なし	内外面轆轤痕が明瞭。楯目は深い。	1トレ I 層
	5	鉢	底部	—	—	14.3	黄灰色	灰褐色	灰色	微細な白・ 赤粒	高台、外底、内面胴部の轆轤痕が明瞭。外底に窯印のような沈線あり。	6トレイケ サブトレ I 層
	6	植 木 鉢	口縁部	29.8	—	—	赤褐色	橙色	にぶい 橙色	なし	口唇平坦。口縁外面の轆轤痕が明瞭。内面に短い横筋が密に入る。	6トレ I 層
	7	植 木 鉢	底部	—	—	9.5	赤褐色	赤褐色	赤褐色	なし	水抜き孔を有する植木鉢。全面に轆轤痕が明瞭。内底側から穿孔か。	6トレ I 層
	8	蓋	庇～袴	庇 15.7	6.3	袴 9.1	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	なし	胴部内外面の轆轤痕が明瞭。鐙縁部に指ナゲ痕あり。	6トレ I 層
	9	壺	口縁部	10.4	—	—	暗褐色	赤褐色	暗褐色	なし	口縁部が玉縁状。内外面轆轤痕が明瞭。	4トレ II 層
	10	壺	口縁部	15.8	—	—	にぶい 赤褐色	赤褐色	赤褐色	なし	口縁部が玉縁状。内外面轆轤痕が明瞭。肩部に耳貼付。	6トレ II 層
	11	火 炉	口縁部	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	なし	内面轆轤痕が明瞭。口縁部に煤付着。耳の右側に指痕あり。	4トレ I 層
	12	焜 炉	口～底	—	—	—	黒褐色	灰褐色 暗青灰	褐灰色	粗穀	内面に指ナゲ痕が明瞭。外面に指痕や爪痕。胎土に粗穀あり。底部に目跡。	4トレ I 層
	13	甕	口縁部	79.6	—	—	暗褐色	赤褐色	暗褐色	なし	外面胴部に5条の沈線を廻らす。内面口縁部に刺突を横位に施す。水甕か。	6トレ I 層



第 29 図 沖縄産無釉陶器



図版 27 沖縄産無釉陶器

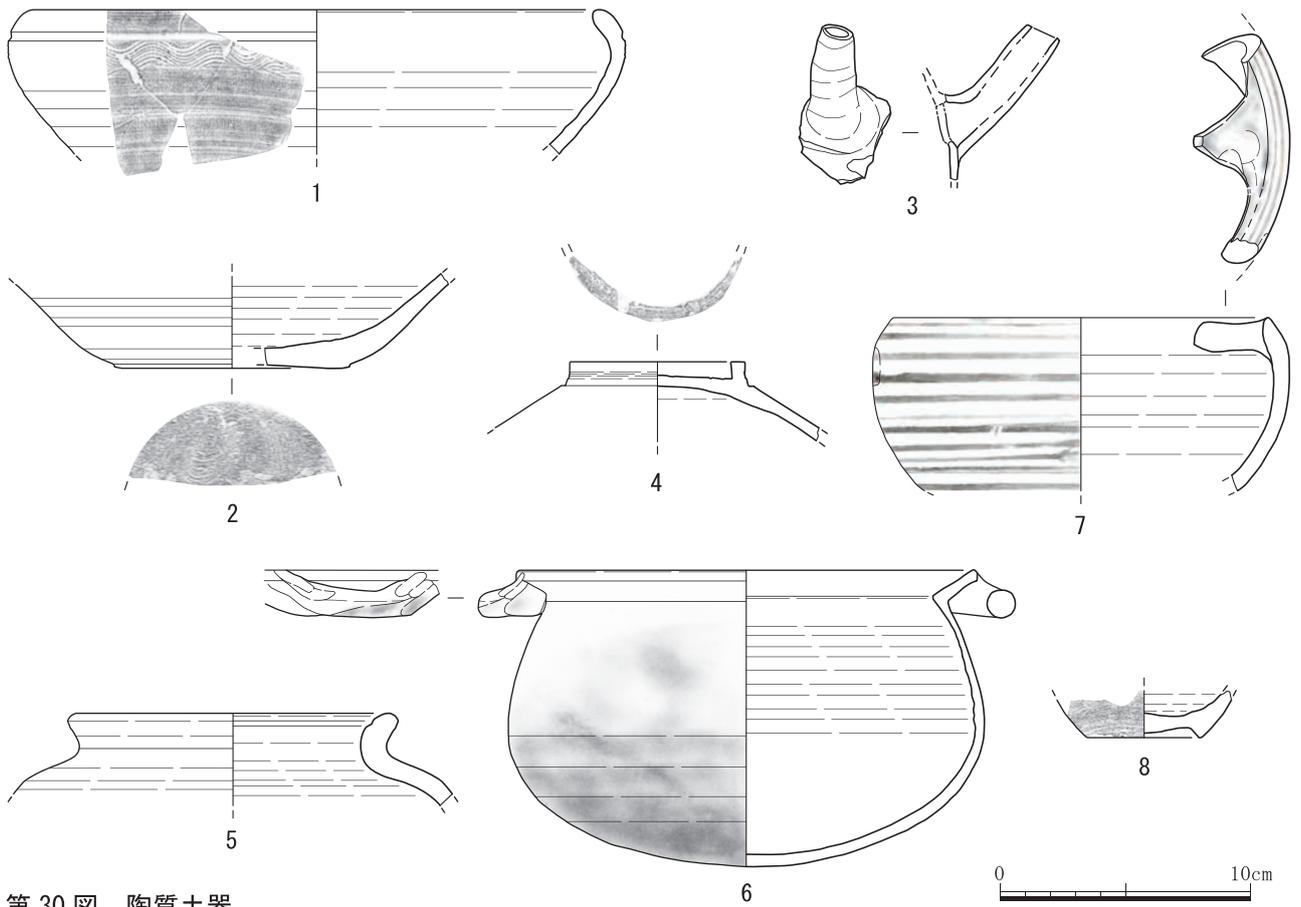
9 陶質土器

陶質土器とは、表面に釉をかけない窯焼成の土器で、土器と陶器の中間的性質をもつもの（宮里 2012）である。アカムヌーとも呼ばれ、耐火性を高めるためにニービを混ぜるので、黄色っぽく見える（曾根 1983）。

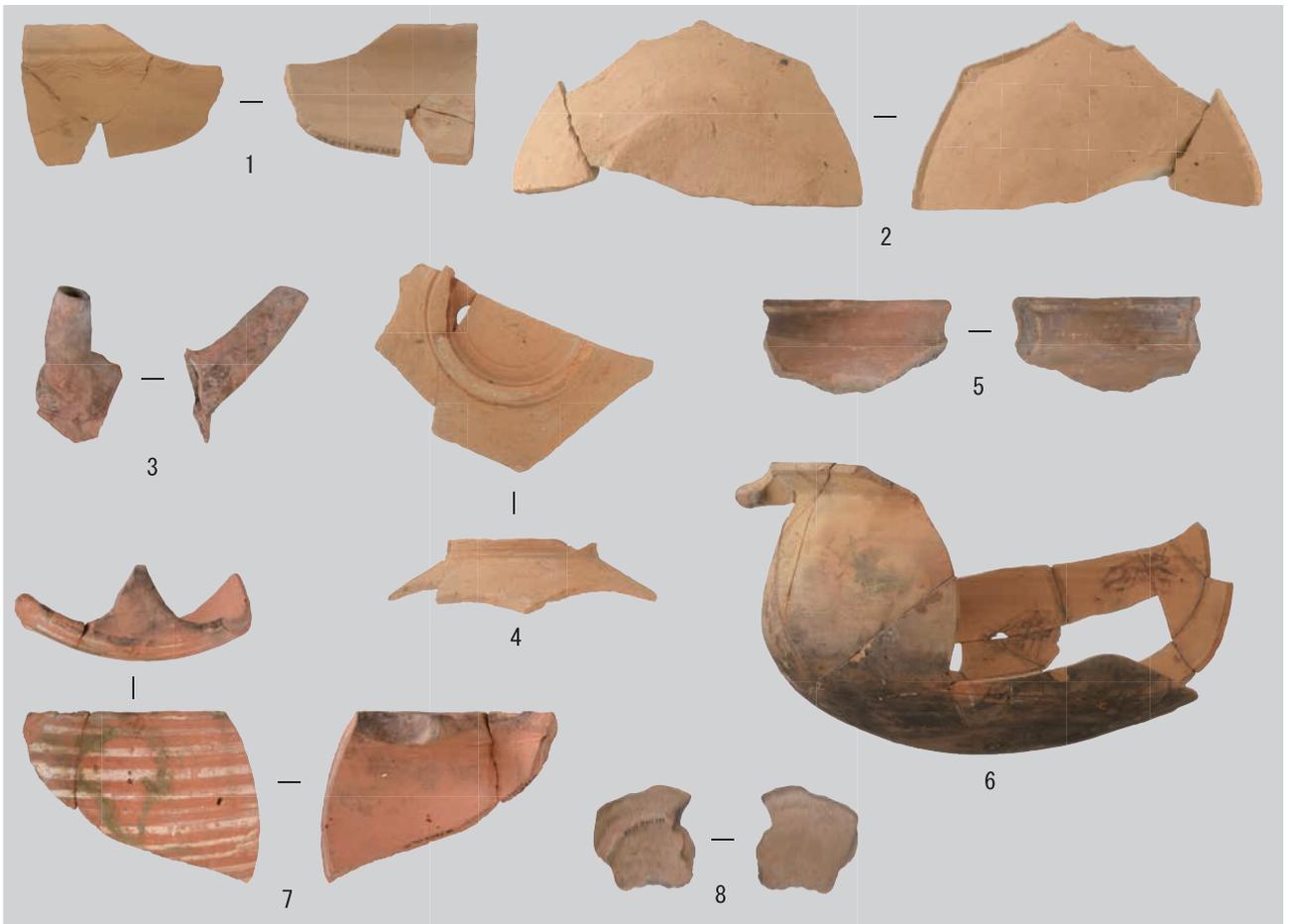
今回の調査では総数 4,540 点が出土している。器種は、急須、火炉、火入、焜炉、蓋、フライパン状製品、七輪などがあり、そのうち状態の良好な鉢、急須、蓋、壺、鍋、火炉、袋物の 8 点を図化した。詳細は以下の観察表に記述する。

第 11 表 陶質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)				色調	成形・調整・文様など	出土地
				口径 (庇)	器高	底径 (袴)	胴径 (撮み)			
第 30 図 図版 28	1	鉢	口縁部	22.6	—	—	—	橙色	口縁が内湾する鉢。内外面轆轤痕が明瞭。波状の線を胴部に施す。	6トレⅢ a 層
	2	鉢	底部	—	—	8.8	—	橙色	外面轆轤痕が明瞭。底部に糸切痕あり。白色粒や赤粒を僅かに含む。	6トレⅡ層
	3	急須	注口	—	—	—	注口 1.4	橙色	注口部全面に煤付着。指ナデ痕あり。	3トレⅡ層
	4	鍋の蓋	撮み	—	—	—	撮み 7.0	橙色	撮みに少量の煤付着。光沢をもつ微細粒を多く、赤粒を少量含む。近世～近代。	4トレⅠ層
	5	壺	口縁部	13.2	—	—	—	外側：黄橙色 断面：灰オリーブ色	内外口縁に煤付着。全面に轆轤痕が明瞭。黒粒を少量含む。	3トレイシジキⅢ Ⅰ層
	6	鍋	口～底	18.4	11.9	2.5	—	橙色	耳、胴部下半から底部に煤付着。全面轆轤痕が明瞭。	4トレⅠ層
	7	火炉	口縁部	14.9	—	—	—	外側：橙色 断面：灰オリーブ色	胴部が丸みをおびる器形。口縁に煤付着し、指ナデ痕あり。胴部に白い圈線あり。	4トレⅠ層
	8	袋物	底部	—	—	4.6	—	外側：にぶい黄橙色 断面：灰オリーブ色	上げ底の底部。光沢をもつ微細粒を多く含む。底部の仕上げはやや粗い。	6トレⅡ層



第 30 图 陶質土器



图版 28 陶質土器

10 土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器

本項では、土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器をまとめて報告する。土器・硬質土器は総数 90 点、埴埴は総数 2 点、瓦質土器は総数 65 点が出土し、そのうち器形的特徴が窺える 11 点の図化を行った。以下、種類ごとに概要を述べ、詳細は観察表に記述する。

1. 土器・硬質土器（第 31 図 1～5）

土器は、宮古式土器、パナリ焼（八重山式土器）、硬質土器（本土産焙烙）が出土した。最も多いのは宮古式土器（51 点）で、次に硬質土器（30 点）、パナリ焼（5 点）と続く。年代的には近世に位置づけられる資料が主体となる。このうち、宮古式土器 2 点、パナリ焼 1 点、硬質土器 2 点の図化を行い、報告する。

図 1・2 は多量の砂粒や赤色土粒が混入することから宮古式土器に分類されるもので、図 2 は煤が付着する製品である。

図 3 は大粒の貝殻片が多量に混入することから、パナリ焼（八重山式土器）に分類されるものである。

図 4・5 は硬質土器（本土産焙烙）で、図 5 は外器面のほぼ全面に煤が付着する製品である。

2. 埴埴（第 31 図 6）

埴埴は 1 点を図化し、報告する。器種は碗形の口縁部で、内器面に緑青が付着する製品である。

3. 瓦質土器（第 31 図 7～11）

瓦質土器は碗、鉢、壺、瓶、火炉、焜炉、竈、蓋など多くの器種が出土している。そのうち、碗、鉢、火炉、焜炉の 5 点を図化し、報告する。

図 7 は碗の底部資料で、内外器面に轆轤痕が見られる。とくに内器面の轆轤痕が明瞭である。

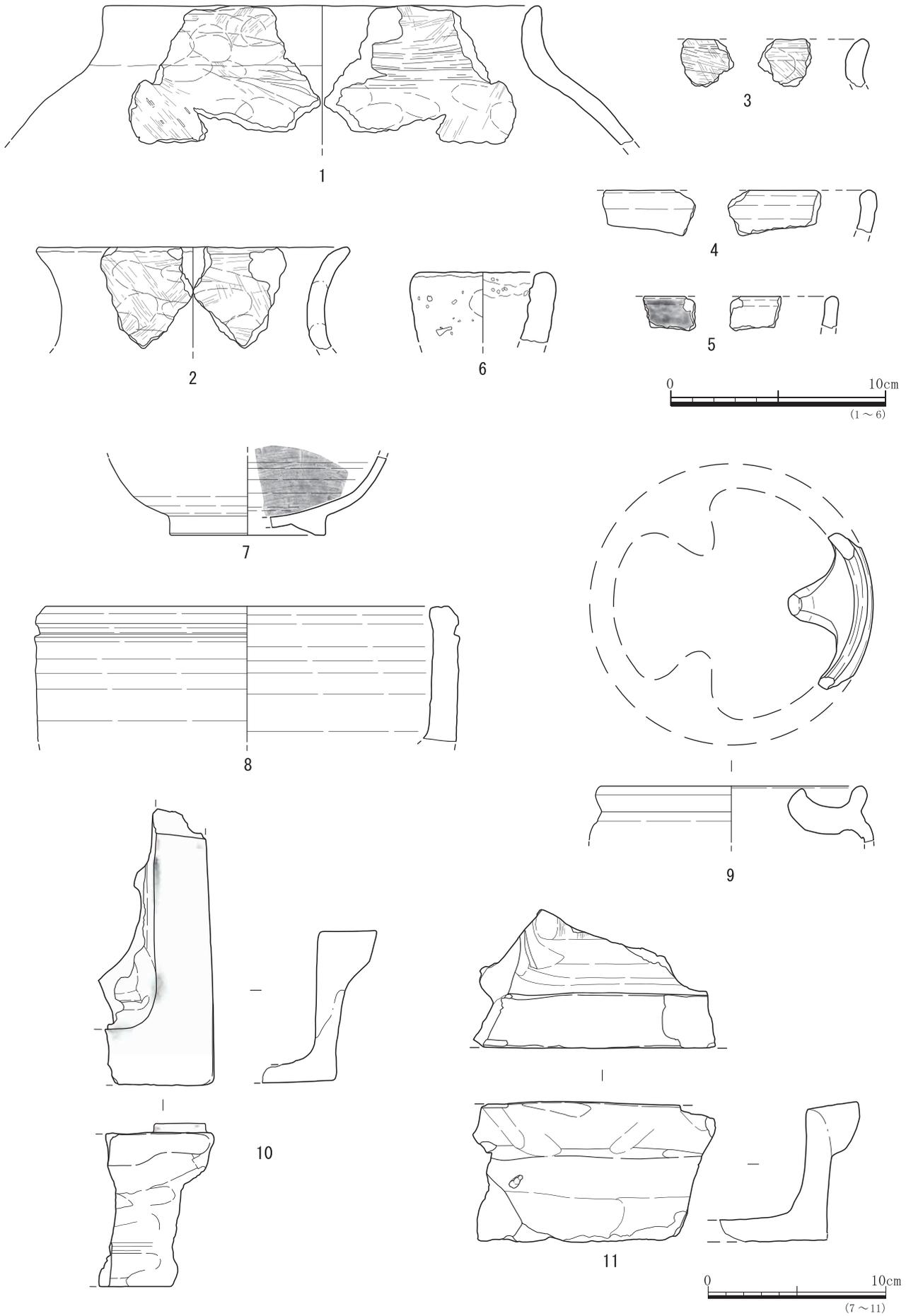
図 8 は鉢の口縁部資料で、口縁部外面に一条の溝を巡らせる。また、器面は所々混入物が剥落し、あばた状を呈している。

図 9 は火炉の口縁部資料で、外面に丁寧な轆轤痕が見られる。突起部は器面へ貼り付け後、丁寧に接着部を指ナデする様子が窺えるが、突起部の下部は雑な仕上がりとなっている。

図 10・11 は焜炉の口縁部から底部が残存する資料で、口縁断面が逆 L 字状を呈する製品である。図 10 は器面全体に靱痕が見られ、図 11 は口唇部や内器面に明瞭なナデ調整痕が見られる。

第 12 表 土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項			出土地	
						文様	器色・胎土・混入物等	器面調整		その他
第 31 図 図版 29	1	宮古式土器	壺	口縁部	20.4 — —	無文	内外器面ともに橙色で、胎土は泥質。混入物は赤色土粒、石灰質砂粒（多量）を含む。	内外器面とも横位のナデ調整。	内器面胴部は混入物の砂が露出しない。	3トレ イジキ 3 I 層
	2	宮古式土器	壺	口縁部	14.6 — —	無文	内外器面ともに橙色で、胎土は泥質。混入物は赤色土粒、石灰質砂粒（多量）を含む。	外器面は指頭押圧痕で、内器面はナデ調整と指頭押圧痕。	内外器面ともに煤付着。	6トレ I 層
	3	パナリ焼 （八重山式 土器）	壺	口縁部	— — —	無文	内外器面ともに明赤褐色で、胎土は泥質。混入物は大粒の貝殻片（多量）を含む。	外器面はナデ調整で、内器面はナデ調整と指頭押圧痕。	2～4mm 大の粗い石灰質砂粒を多く含む。	3トレ I 層
	4	硬質土器	焙烙	口縁部	— — —	無文	内外器面ともに浅黄橙色で、胎土は土師質。混入物は黒色粒（微量）を含む。	内外器面とも轆轤痕が明瞭。	混入物の黒色粒に光沢あり。外器面僅かに煤付着。	1トレ I 層
	5	硬質土器	焙烙	口縁部	— — —	無文	内外器面は浅黄橙色で、胎土は土師質。混入物は赤色粒（微量）を含む。	内外器面とも轆轤痕が明瞭。	外器面ほぼ全面に煤付着。	4トレ I 層
	6	埴埴	碗形	口縁部	6.8 — —	無文	内外器面とも黒色で、外器面の一部にガラス質の付着物あり。	内外器面とも指頭押圧痕か。	内器面に緑青付着。	1トレ I 層
	7	瓦質土器	碗	底部	— — 8.8	無文	胎土はやや細かい。微細な黒色粒が少量、光沢をもつ白色粒を多く含む。	内外器面ともに轆轤痕あり。	内器面の轆轤痕が明瞭。	6トレイ I 層
	8	瓦質土器	鉢	口縁部	23.8 — —	無文	胎土はやや細かい。微細な黒色粒と光沢をもつ白色粒を少量含む。粗い黄褐色土粒を多く含む。	内外器面ともにナデ調整。	口唇部と口縁部内面に横位に丁寧な指ナデ調整あり。	4トレ I 層
	9	瓦質土器	火炉	口縁部	15.3 — —	無文	胎土はやや細かい。微細な赤粒を僅かに含む。	外器面に丁寧な轆轤痕。	突起部周辺の接着部を指ナデによって消しているが、下部は雑に仕上げる。	6トレ II 層
	10	瓦質土器	焜炉	口～底	— — —	無文	胎土はやや細かい。石灰質砂粒、赤色土粒を含む。	内外器面ともにナデ調整と指頭押圧痕あり。	器面全体に靱痕あり。	4トレ I 層
	11	瓦質土器	焜炉	口～底	— — —	無文	胎土はやや細かい。石灰質砂粒、黒色土粒、赤色土粒を含む。	内外器面ともにナデ調整と指頭押圧痕あり。とくに口唇と内器面のナデ調整痕が明瞭。	外器面に貝類と思われる圧痕あり。	1トレ I 層



第 31 図 土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器



图版 29 土器・硬質土器・坩堝・瓦質土器

11 円盤状製品

平成 26 年度の調査では総数 264 点の円盤状製品が出土した。素材のバリエーションは 13 種類で明朝系瓦（赤・灰色含む）が 117 点と一番多く利用されており、次いで沖縄産無釉陶器（初期沖縄産含む）が 88 点、中国産青花が 19 点と続く。利用点数で見ると明朝系瓦が突出する様子が窺え、中国産陶磁器は青花が多く利用される。

第 32 図は今回の調査で出土した全資料の最大径を計測し、素材ごとに集計を行ったグラフである。1.0～2.9cm の大きさでは中国産青花など釉薬が施される一群が多く利用されるが、3.0cm 以上の大きさから沖縄産無釉陶器などの釉薬を施さない一群が多く利用される。また、径が大きくなるにつれて、釉薬が施される一群が減少していく様子が窺えた。製品の大きさでは、3.0～3.9cm が 75 点、4.0～4.9cm が 69 点と、他の大きさより圧倒的に多く見られる様子が窺えた。以上のことから、平成 20・21 年度や、平成 22 年度の調査報告でも指摘されているように、「大小の作り分けに際して素材の材質を考慮していた可能性」（沖縄県立埋蔵文化財センター 2011、2012）が今回も認められる結果となった。

以下に素材ごとに概要を記し、詳細は観察表に記述する。

①中国産陶磁器（第 33 図 1～5）

青花 19 点、褐釉陶器 5 点、色絵 3 点、白磁 1 点が出土した。図 2～4 は胴部を利用し、図 1・5 は底部を利用した製品である。

②本土産陶磁器（第 33 図 6）

褐釉陶器が 4 点、磁器が 2 点、陶器が 1 点出土した。図 6 は薩摩産で白粒を多く含む製品である。

③沖縄産陶器・陶質土器（第 33 図 7～10）

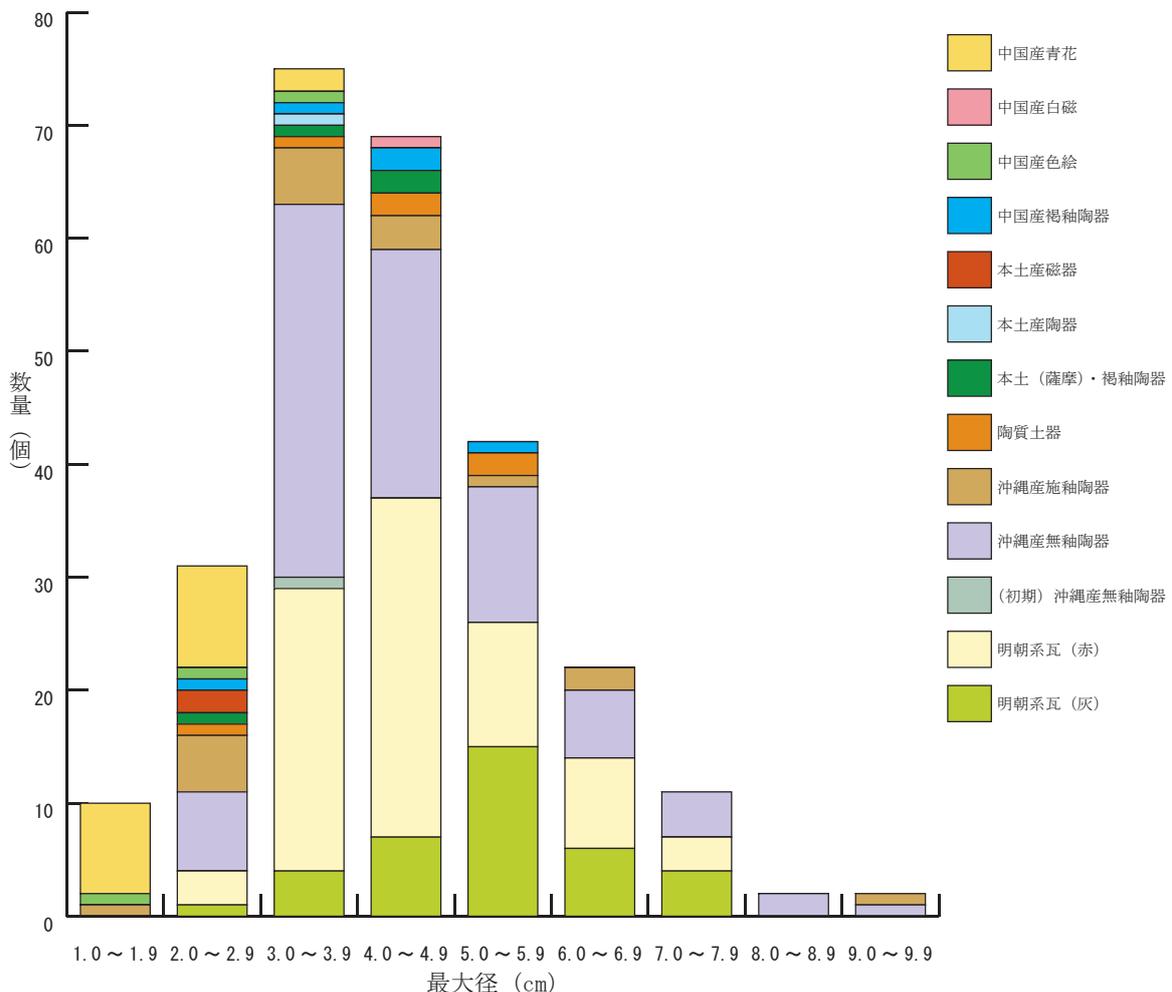
無釉陶器が 88 点、施釉陶器が 18 点、陶質土器が 6 点出土した。図 7・8 は施釉陶器を利用した製品で、図 8 は内面のみに施釉する。図 9 は無釉陶器で底部を利用し、図 10 は陶質土器で蓋を利用したと思われる製品である。

④明朝系瓦（第 33 図 11）

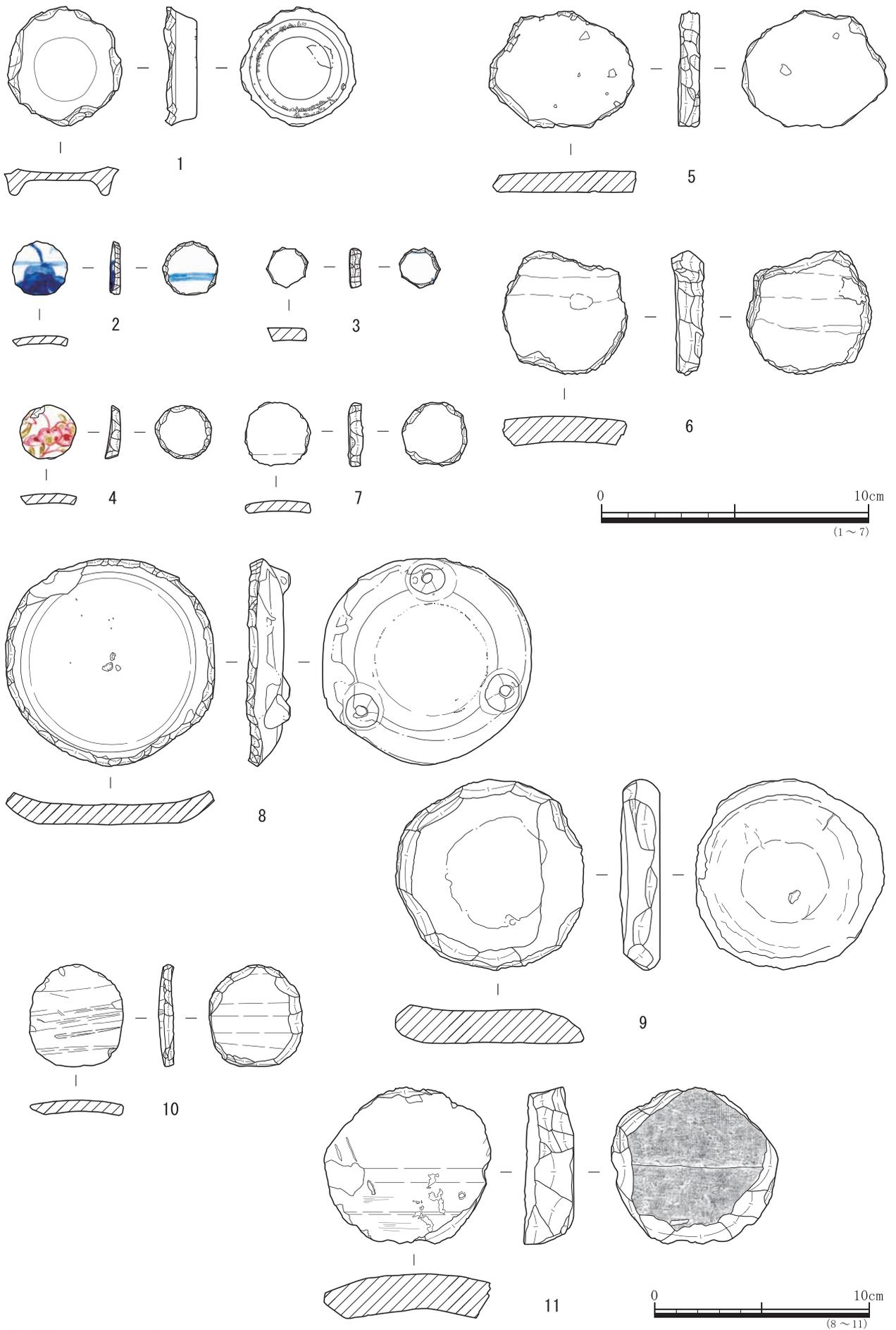
総計 117 点出土し、赤色が 79 点、灰色が 38 点と赤色が多い。

第13表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	製作 方法	素材	使用部位	法量 (cm・g)					観察事項		出土地
					縦	横	厚	重量	打面	加工順序	その他特徴	
第33図 図版30	1	剥離	白磁	底部	4.5	4.3	1.1	19.32	内面	内面から	徳化窯産。	6トレI層
	2	剥離	中国産青花	胴部	2.0	2.05	0.4	1.85	内面	内面から	景德镇窯産か。	1トレI層
	3	剥離	中国産青花	胴部	1.5	1.55	0.45	1.38	内面	内面から	碗か。	4トレI層
	4	剥離	中国産色絵	胴部	2.0	2.1	0.45	2.26	内面	内面から	徳化窯産。	1トレI層
	5	剥離	中国産 褐釉陶器	底部	4.4	5.45	0.8	25.22	内面	内面から	壺・甕類。	3トレI層
	6	剥離	本土産 褐釉陶器	胴部	4.7	4.7	1.0	28.85	両面	内面から	薩摩産。	4トレI層
	7	剥離	沖縄産 施釉陶器	胴部	2.4	2.45	0.45	3.21	両面	外面から	碗か。	6トレI層
	8	剥離	沖縄産 施釉陶器	底部	9.8	9.8	1.7	117.44	内面	外面から	急須。	1トレI層
	9	剥離	沖縄産 無釉陶器	底部	9.0	8.8	1.7	165.28	内面	内面から	壺・甕類。	6トレI層
	10	剥離	陶質土器	胴部	4.8	4.4	0.5	12.15	両面	内面から	蓋か。	1トレI層
	11	剥離	明朝系瓦	筒部	7.35	7.8	1.9	115.84	両面	内面から	平瓦か。灰色。	6トレIII a層



第32図 円盤状製品サイズ別出土状況



第 33 図 円盤状製品



图版 30 円盤状製品

12 金属製品

金属製品は総数 509 点が出土している。中城御殿は近代に建造され戦前まで機能していた背景もあり、近世と思われる製品や、近現代と思われる製品が見られる。ここでは状態の良好な 10 点を図化した。以下、機能ごとに概観し、詳細な特徴は観察表に記述する。

1. 装身具類（第 34 図 1～4）

装身具は簪が出土し、男性用の押差（図 1・3）や、女性用のジューファー（図 2・4）が見られる。

2. 建築材（第 34 図 5・6・8）

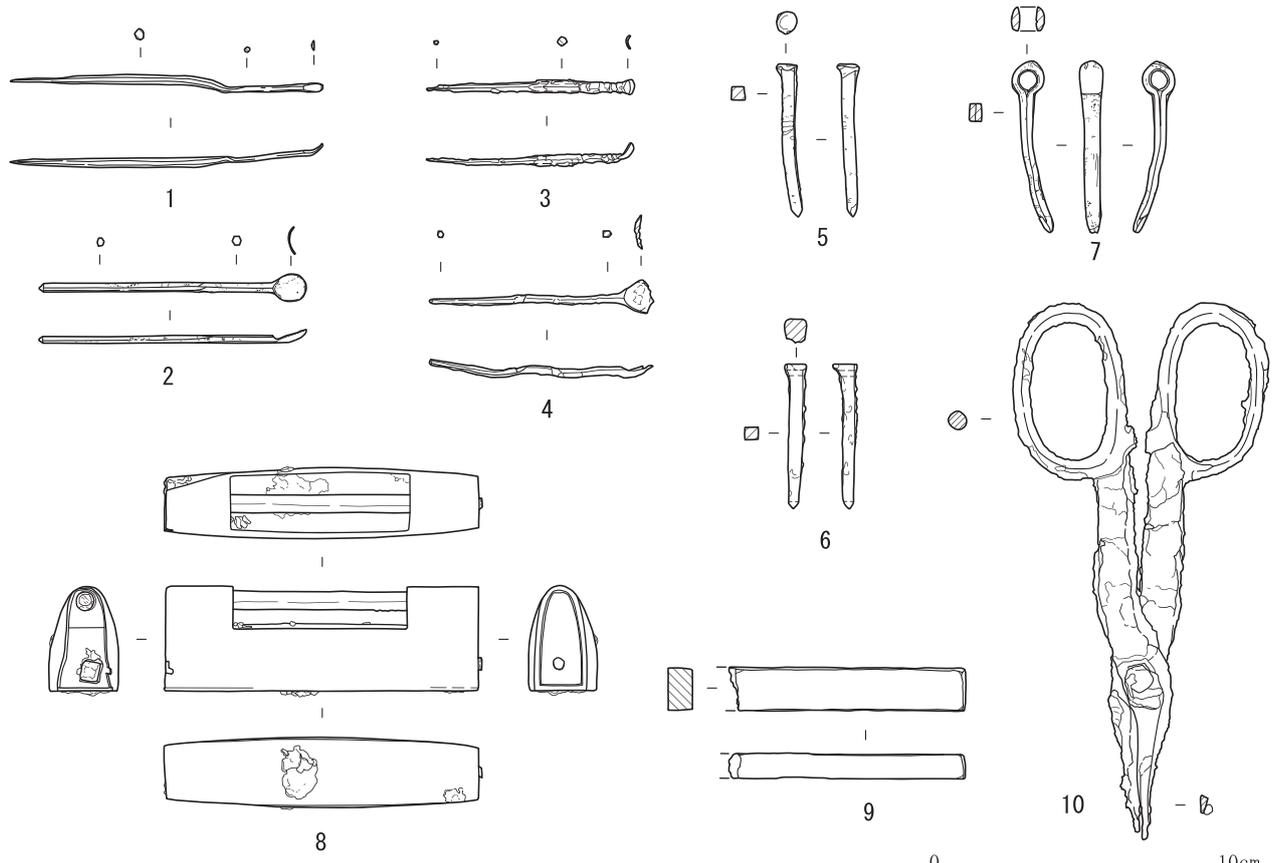
建築材は角釘が 116 点、丸釘が 160 点出土しているが、今回の報告では角釘 2 点の図化を行った。また、錠前（図 8）も 1 点出土している。

3. 道具類（第 34 図 7・9・10）

鋏（図 7）や文鎮と思われる製品（図 9）、ハサミ（図 10）の図化を行った。鋏は取っ手の両端に付く部品と思われる（山本 2018）。

第 14 表 金属製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	材質	完破 部位	法量 (cm・g)				加工・ 施文法	所見	出土地
					縦	横	厚	重量			
第 34 図 図版 31	1	簪	銅	完形	10.3	幅 0.19 0.34	0.18 0.31	4.05	鍛造	男性用の押差。耳搔き状。竿は断面六角形。竿先が尖る。	6トレⅡ層
	2	簪	銅	完形	8.8	幅 0.3 0.9	0.25 0.45	3.43	鍛造	女性用のジューファー。匙状。竿から頸が同様の太さで直線的な形状。	6トレⅠ層
	3	簪	銅	完形	6.85	幅 0.55 0.1	0.35 0.1	1.88	鍛造	男性用の押差。耳搔き状。頸から太くなりカブに至る。	4トレⅠ層
	4	簪	銅	ほぼ 完形	7.35	幅 0.25 0.22	0.28 0.22	2.94	鍛造	女性用のジューファー。匙状。茎が湾曲する。	6トレⅠ層
	5	角釘	銅	完形	長 5.05	頭 0.7	身 0.4	6.73	鍛造	頭部四方に広がる角釘。先端のみ尖る。	3トレⅡ層
	6	角釘	銅	完形	長 4.8	頭 0.8	身 0.45	6.68	鍛造	頭部二方向に広がる角釘。	6トレⅠ層
	7	鋏	銅	完形	5.7	幅 0.3 1.1	0.25 0.8	9.96	鍛造	上部に環をつくり、下部先端で折り曲げる形状。下部に僅かに鍍金あり。	4トレⅡ層
	8	錠前	銅	ほぼ 完形	4.45	10.3	1.7～1.8 2.2	134.68	鍛造	胴部中央が膨らむ。内部に先端の折れた断面四角形の棒あり。	6トレイケ サブトレⅠ層
	9	文鎮か	銅	ほぼ 完形	7.8	1.4	0.8	71.78	鋳造	文鎮または重しと思われる銅製品。断面が長方形。	6トレⅠ層
	10	ハサミ	鉄	完形	長 17.8	持ち手 8.5	刃先 0.5	142.44	鍛造	刃部が短い。近現代か。	6トレⅠ層



第 34 图 金属製品



图版 31 金属製品

13 煙管

平成 26 年度の調査では総数 35 点の煙管が出土した。出土資料はパイプ形のものに限られ、柱状形・釣鐘形のものとは得られていない。素材は沖縄産陶器製と銅製に限られるが、以下、素材ごとに分け詳細を観察表に記す。

1. パイプ形無釉陶器製煙管（第 36 図 1～3）

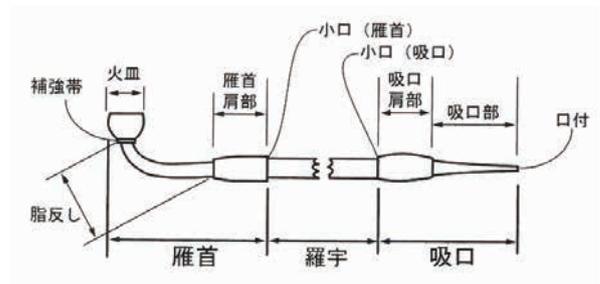
第 36 図 1～3 の部位は雁首で、図 1・2 は火皿と肩部に細かい面取りが施される。図 3 は断面が円形状で、「示」の文様が施される。

2. パイプ形施釉陶器製煙管（第 36 図 4～6）

図 4 の部位は雁首、図 5・6 の部位は吸口である。3 点とも白色の素地に透明釉を掛ける製品である。

3. パイプ形銅製煙管（第 36 図 7・8）

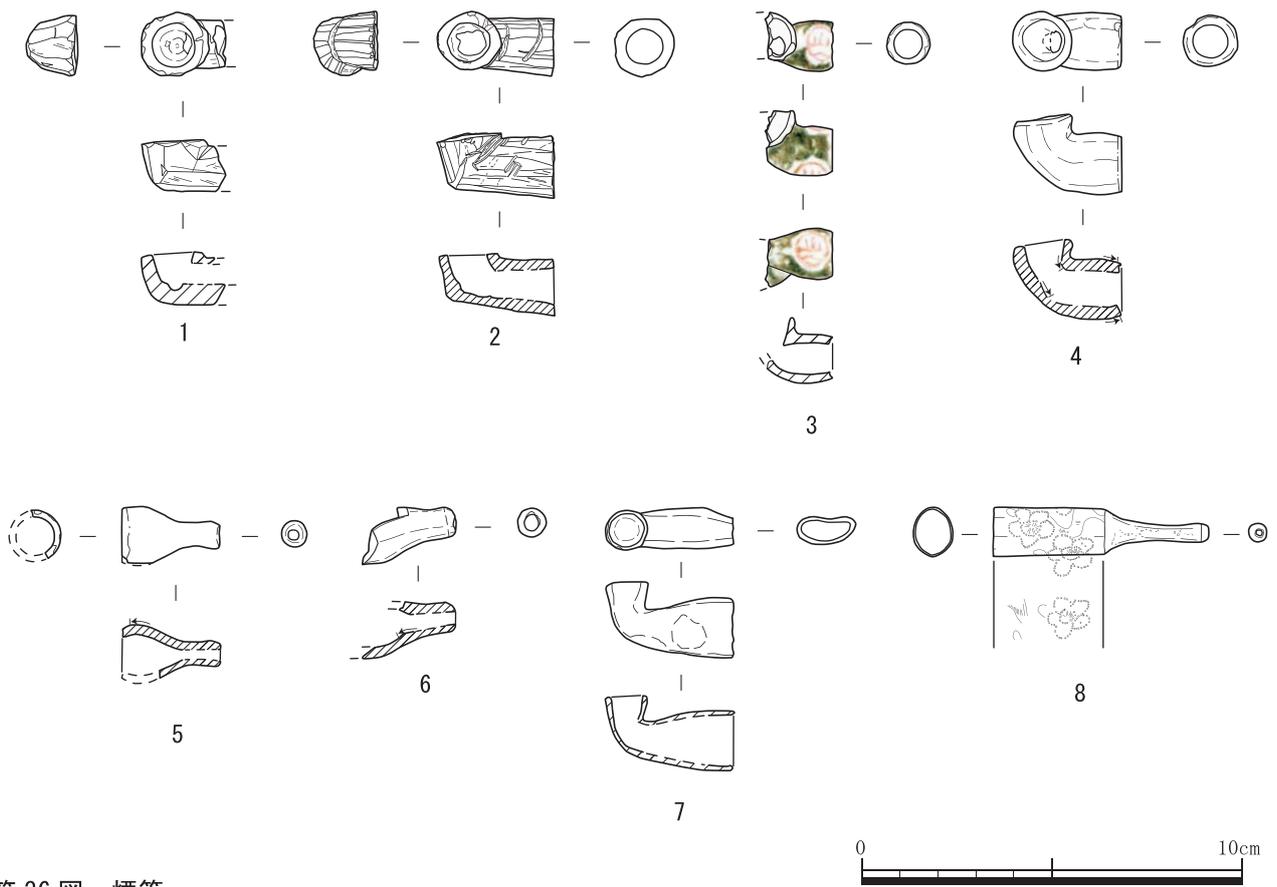
図 7 の部位は雁首、図 8 の部位は吸口である。図 7 は羅字への接続部が窪んだ状態で残存する。図 8 は印花文や沈線が施される。



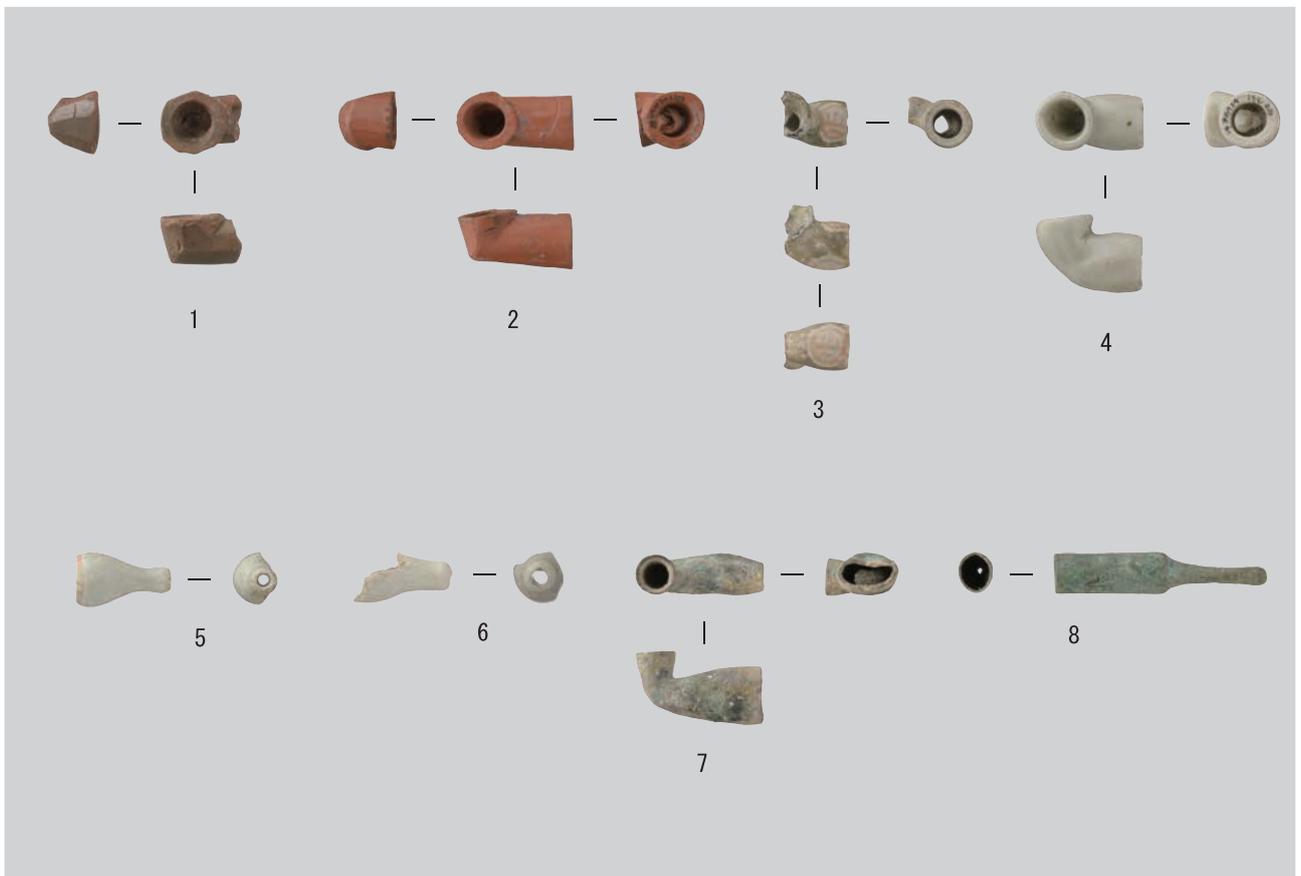
第 35 図 煙管の部位名称（石井 2011）

第 15 表 煙管観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	部位	材質	素地 / 釉	法量 (cm・g)					観察事項				出土地
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	口付 外径 内径	長さ 高さ	重量	火皿 高	断面 形状	小口 形状	その他特徴	
第 36 図 図版 32	1	雁首	沖縄産陶器	黒褐色 / 釉なし	1.6 1.1	—	—	—	4.79	低	8 面	—	内面に線状痕。	6トレ I 層
	2	雁首	沖縄産陶器	赤褐色 / 釉なし	1.65 1.0	1.5 0.95	—	3.1 1.7	7.26	低	丸	平坦	胴部に細かく面取を行う。	6トレ II 層
	3	雁首	沖縄産陶器	灰白色 / 緑釉	—	1.15 0.75	—	— 1.7	2.73	高	丸	凹型	赤字で「示」の文様。	1トレ I 層
	4	雁首	沖縄産陶器	灰白色 / 透明釉	1.55 1.1	1.35 0.85	—	2.85 2.1	7.17	高	丸	凹型	外面を全体的に施釉。	1トレ I 層
	5	吸口	沖縄産陶器	灰白色 / 透明釉	—	—	0.7 0.3	2.6 1.55	2.06	—	丸	平坦	小口に明褐色の釉を施す。	3トレ I 層
	6	吸口	沖縄産陶器	灰白色 / 透明釉	—	—	0.75 0.4	2.45 1.5	2.23	—	丸	—	外面を全体的に施釉。	6トレ II 層
	7	雁首	銅	—	1.1 0.85	—	—	3.38 2.0	9.66	高	円形	—	無文。錆が及んでない部分は光沢が残る。	3トレイシジキ 3 I 層
	8	吸口	銅	—	—	1.3 1.15	0.5 0.15	5.7 1.05	7.86	—	丸	—	印花文や沈線を施文。	6トレ I 層



第 36 图 烟管



图版 32 烟管

14 骨製品

骨製品は総数5点が出土し、そのうち3点の図化を行った。種類は篋、歯ブラシ、装飾品と思われる資料である。以下、器種ごとに概要を記し、詳細は観察表に記述する。

①篋（第37図1）

近代と考えられる資料で、裁縫の際に使用する篋（図1）である。当製品と同様のものが北谷町平安山原A遺跡でも出土している（土岐2016）。裏面は柄部から刃部にかけて直線状だが、表面は柄部から刃部にかけて僅かに弧を描きながら薄くなって刃部を形成する。

②歯ブラシ（第37図2）

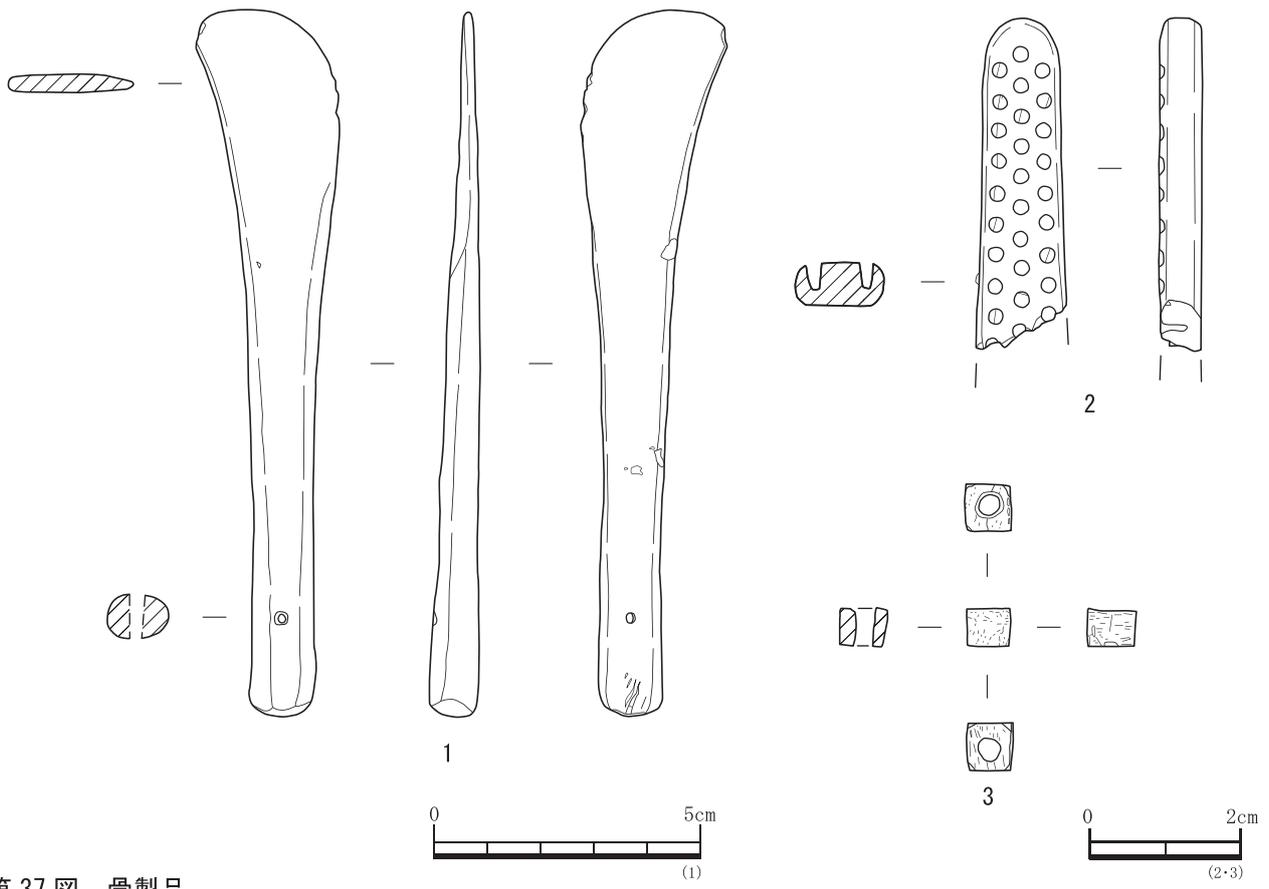
歯ブラシ（図2）は植毛孔3列だが、平成22（2010）年度の調査で出土した歯ブラシ（仲座2012）は植毛孔4列である。図1と同様、植毛孔3列の製品は平安山原A遺跡でも出土している。

③装飾品か（第37図3）

装飾品と思われる資料（図3）は、縦、横の法量が1cm以下と小さく、全面に研磨が見られ、やや光沢が残る。

第16表 骨製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土地
				縦	横	厚		
第37図 図版33	1	篋	完形	13.4	2.75 1.2	0.9 0.2	裁縫篋。牛骨製か。全面磨く。柄部端に孔1点あり。	6トレイケI層
	2	歯ブラシ	端部	4.4	1.2	0.55	骨製の歯ブラシと思われる資料で先端の部分。牛骨製か。植毛孔3列。左列6孔、中央列1孔に平線残る。	6トレイケサブトレI層
	3	装飾品か	完形	0.6	0.6	0.5	骨製の装飾品か。全面磨く。正方形状に成形し中央に穴を穿つ。	6トレイケI層



第 37 图 骨製品



图版 33 骨製品

15 ガラス玉・ガラス製品

中城御殿で祭事に使われたと考えられるガラス玉や、近代から現代初め頃にかけて使用された薬瓶、インク瓶、調味料瓶などのガラス製品が一定量得られている。ガラス玉は総計2点、ガラス製品は総計103点が出土している。ガラス玉は2点全てを図化して報告し、ガラス製品は状態の良好な8点の観察表と写真を掲載し報告を行う。以下、種類ごとに概要を記し、詳細は観察表に記述する。

1. ガラス玉（第38図1・2）

色調は青緑色と青色があり、既報告（仲座2012）の範疇に含まれる。今回は被熱を受けて変形や溶解した製品は見られなかった。

第17表 ガラス玉観察一覧

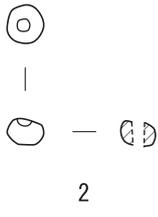
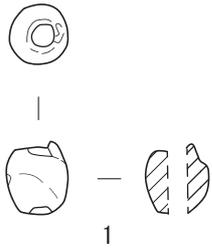
挿図番号 図版番号	番号	法量 (cm・g)				色	観察事項	出土地
		高さ	最大径	孔径	重量			
第38図 図版34	1	0.45	0.4	0.15	0.11	青緑色 半透明	横位に巻き付け成形時の筋あり。	1トレ I層
	2	0.15	0.25	0.1	0.01	青色	厚みがなく小柄な玉。上下面に巻き付け成形時の筋あり。	3トレ I層

2. ガラス製品（図版34 3～10）

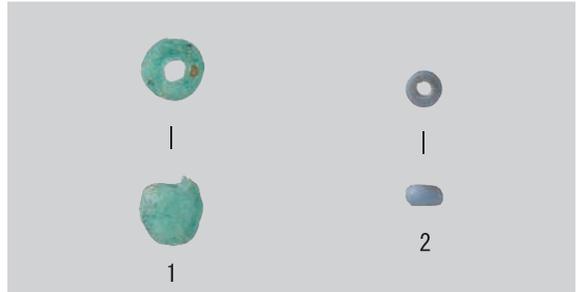
中城御殿は1875（明治8）年から戦前まで機能し、戦後も様々な土地利用が行われた関係で、ガラス製品が多く出土している。器種はガラス瓶、ビー玉、蓋、栓、鉢、装飾品、電球が見られ、総数はガラス瓶が最も多かった。また、ガラス瓶のうち薬瓶が多く出土している。本報告では状態の良好なガラス瓶7点と栓1点を観察表と写真で報告する。

第18表 ガラス製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	法量 (cm・g)				色調	成形	形状		文様・銘	所見	出土地
			口径	器高	底径	重量			口縁	底			
図版34	3	薬瓶	2.5	7.6	4.3	74.31	青緑色 透明	型	角縁	高台状	胴にエンボスで「中島正露丸」。底面に「大幸製13」。	ややいかり肩で底形円形の瓶。中島正露丸は昭和24～29年に製造。	6トレイ サブトレI層
	4	薬瓶	3.8	5.8	3.7	74.21	コバルト色 半透明	型	外ネジ	高台状	底面にエンボスで「VICKCS 14 VAPORUB Z」。	軟膏剤の瓶。いかり肩で底形円形。	6トレイ I層
	5	油瓶	1.7	9	4.0 2.3	58.15	淡緑色	型	玉縁	高台状	胴にエンボスで「BUDO」。	ミンシ油の瓶か。いかり肩。表側胴部は角を有し、裏側胴部はアーチ状。	6トレイ I層
	6	薬瓶か	1.5	7.1	—	33.22	青色 半透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで「定容」。	白髪染めの瓶か。口縁両側に孔と口唇2箇所にかぎあり。機械栓の針金固定か。	6トレイ サブトレI層
	7	薬瓶	1.9	5.9	3.6 2.1	44.45	透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで「KOBAYASHI TAMUSHITINCTURE」。	なで肩で底形が隅丸長方形の瓶。栓はコルクか。小林製薬製。	6トレII層
	8	化粧瓶	4.5	4.8	5.2	105.42	黒色	型	外ネジ	上げ底	胴に楕円形と列柱状のエンボス。	化粧クリーム瓶。円筒形で内底に虹色の光沢。	6トレII層
	9	栓	撮み 0.7 2.4	3.7	2.9	28.17	透明	型	—	—	撮みの両面に円形のエンボスが弧状に並ぶ。	撮みは扁平。下部は円筒形。	6トレイ I層
	10	薬瓶か	1.9	9.8	4.4 2.6	80.12	透明	型	外ネジか	上げ底	底面にエンボスで「DES PAC 85925」。	なで肩で底形が長形状の八角形。キャップは鉄製。内部に布あり。	6トレII層



第 38 図 ガラス玉



図版 34 ガラス玉・ガラス製品

16 石器・石製品・石造製品・基石

石器・石製品・石造製品は総数 17 点が得られ、内訳は石器が 2 点、石製品が 14 点、石造製品が 1 点である。ここでは石器・石製品を図化した。石造製品は破片のため図化していない。

基石は 3 点出土し、全て図化を行った。以下、石器・石製品と基石に分け詳細を記述する。

1. 石器・石製品（第 39 図 1～3）

石器は敲石と考えられる製品（図 1）がある。石製品は蠟石を素材とした石筆（図 2）や、用途不明の滑石製品（図 3）がある。

第 19 表 石器・石製品観察一覧

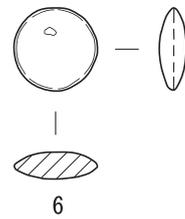
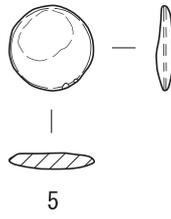
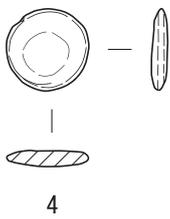
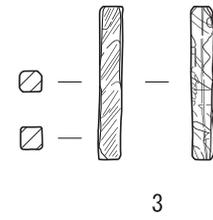
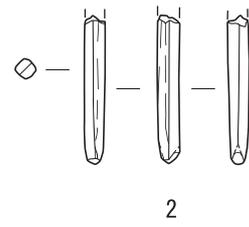
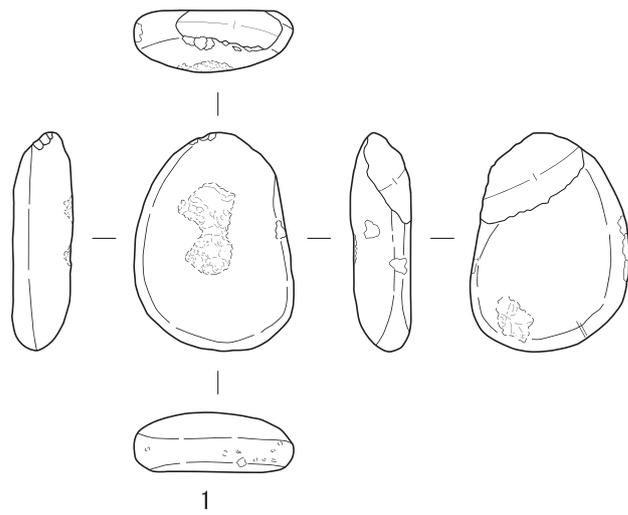
挿図番号 図版番号	番号	器種	石材	法量 (cm・g)		観察事項		出土地
				縦 横 厚	重量	整形 / 製作痕跡	備考	
第 39 図 図版 35	1	敲石か	輝緑岩	5.8 4.2 1.6	57.36	敲打・研磨調整。	表面中央に敲打痕。裏面に滑面。	4トレ I 層
	2	石筆	蠟石	3.95 0.55 0.55	22.1	削り出しにより整形。	先端が若干丸みを帯び、側面に削りによる面が見られる。	4トレ I 層
	3	滑石製品	滑石	4.05 0.6 0.6	3.58	研磨調整。	断面四角形で6面研磨する。用途不明。	6トレ I 層

2. 基石（第 39 図 4～6）

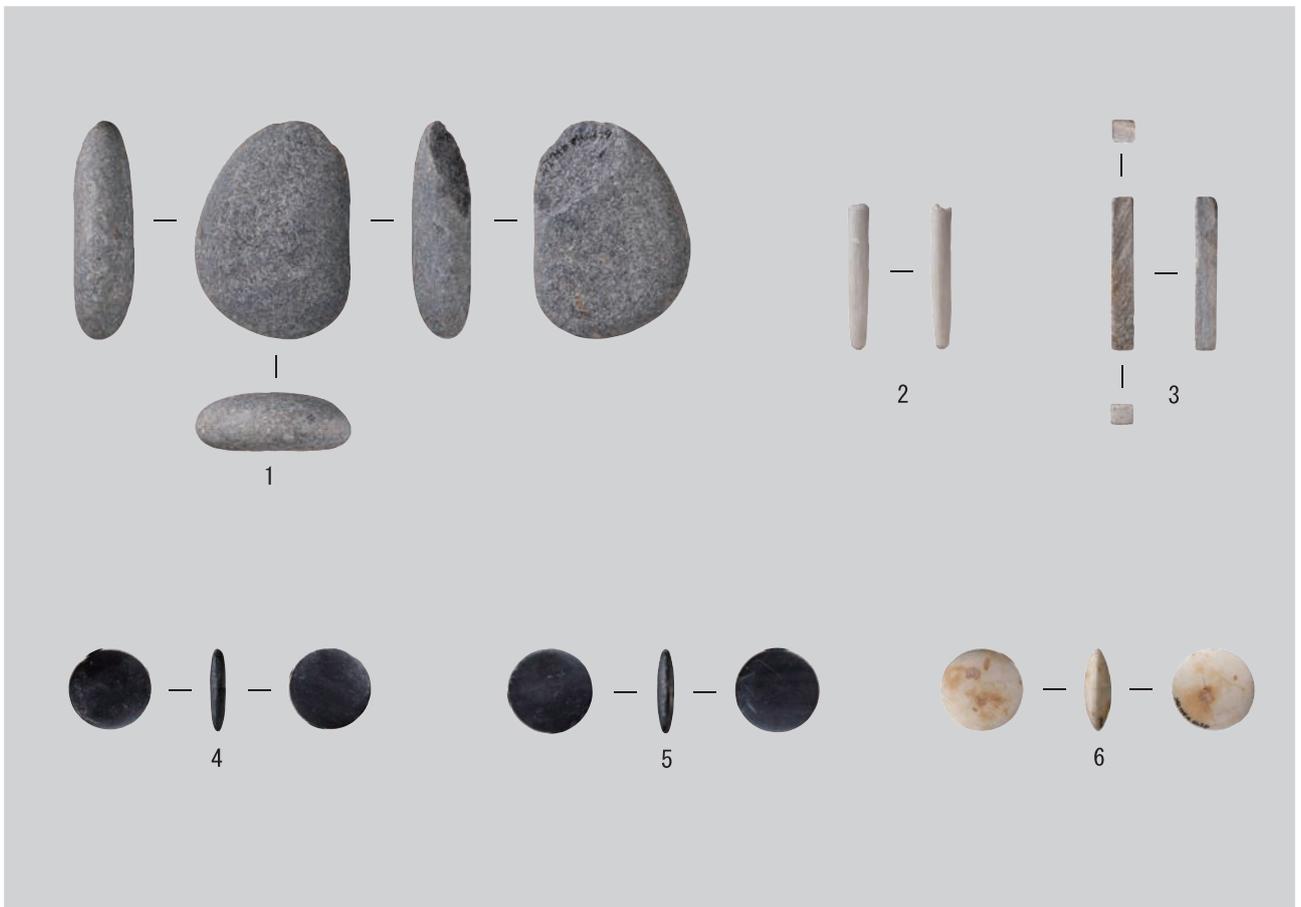
基石は総計 3 点がみられ、黒色が 2 点（図 4・5）、白色が 1 点（図 6）得られた。

第 20 表 基石観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	名称	色	素材	法量 (cm・g)				観察事項	出土地
					縦	横	厚	重量		
第 39 図 図版 35	4	基石	黒	頁岩	2.2	2.2	0.4	3.11	片面の中央部から縁辺にかけて凹む。コイン形。	1トレ I 層
	5	基石	黒	頁岩	2.25	2.2	0.47	3.22	片面中央部が凹む。コイン形。	6トレ I 層
	6	基石	白	貝	2.2	2.2	0.71	2.46	両面に2～3条のひび割れが走る。レンズ形。	6トレ II 層



第 39 図 石器・石製品・基石



図版 35 石器・石製品・基石

17 瓦・塼・板状瓦製品

1. 瓦

今回の報告では、細片資料が多量のためトレンチごとの重量で報告を行い、形態的特徴が窺える資料は図化を行った。造瓦技術別に大別すると、近世以降の明朝系瓦が総重量 333.569kg、大和系瓦（近代大和瓦含む）が総重量 440g 出土している。以下、種類別に記述し、図化を行った 6 点の特徴については観察表に記載する。

①明朝系瓦・明朝系瓦 B タイプ（第 40 図 1～6）

明朝系瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦に分けられ、それぞれ灰色系、赤色系（褐色を含む）、陶器質がある。また、従来知られる明朝系瓦と瓦当文や成形技法が異なり、渡地系瓦とも称される一群（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）も見られ、東村跡の報告書を参考に便宜的に B タイプとした。凹面に布目はほとんど見られず、胎土に赤色や黒色の 3mm 程の粒を含む等の特徴がある。平瓦のみ出土した。

軒丸瓦：小片のため重量のみ計測したものが 13.57kg 得られた。色調別では赤色、灰色、陶器質が出土し、赤色が多い。そのうち 2 点の図化を行った（図 1・2）。

丸瓦：小片のため重量のみ計測したものが 128.135kg 得られた。色調別では赤色、灰色、陶器質が出土し、赤色が多い。そのうち 2 点の図化を行った（図 3・4）。図 3 は漆喰が付着する製品で、図 4 は灰色の製品である。

平瓦：小片のため重量のみ計測したものが 185.12kg 得られ、色調別では赤色、灰色、陶器質が出土し、赤色が多い。そのうち 2 点の図化を行った。（図 5・6）どちらも赤色で、図 6 は完形の製品である。

②近代大和瓦・大和系瓦

近代大和瓦は、棧瓦と平瓦に分けられる。上述のとおり全て小破片のため重量のみ計測し報告する（第 21 表）。また、1 点のみ中世大和系瓦と思われる資料が出土するが、細片のため集計のみ行った。

2. 塼

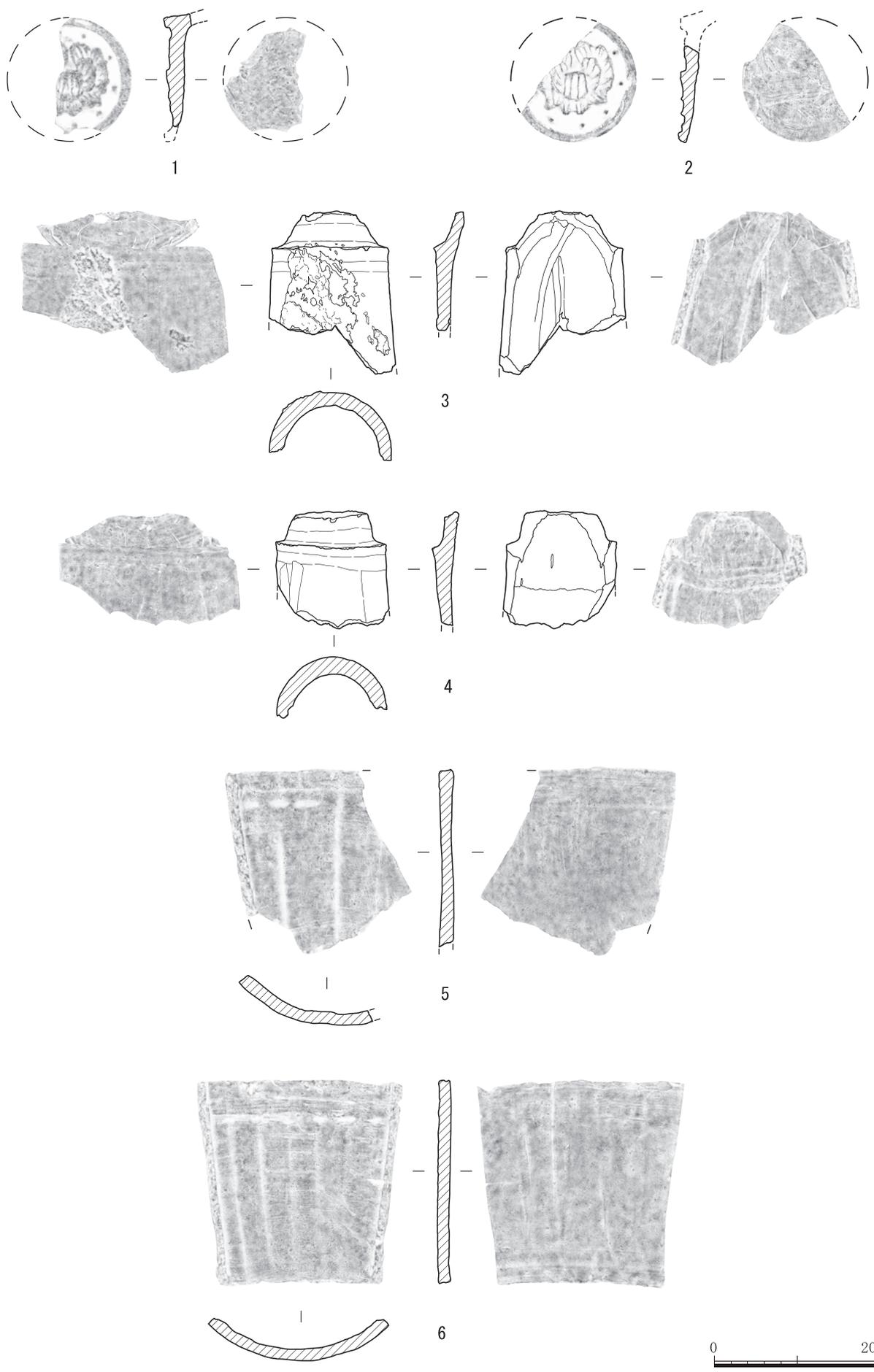
塼は総数 19 点が出土しているが、小破片のため図化を行わず集計のみ行った（第 43 表）。

3. 板状瓦製品

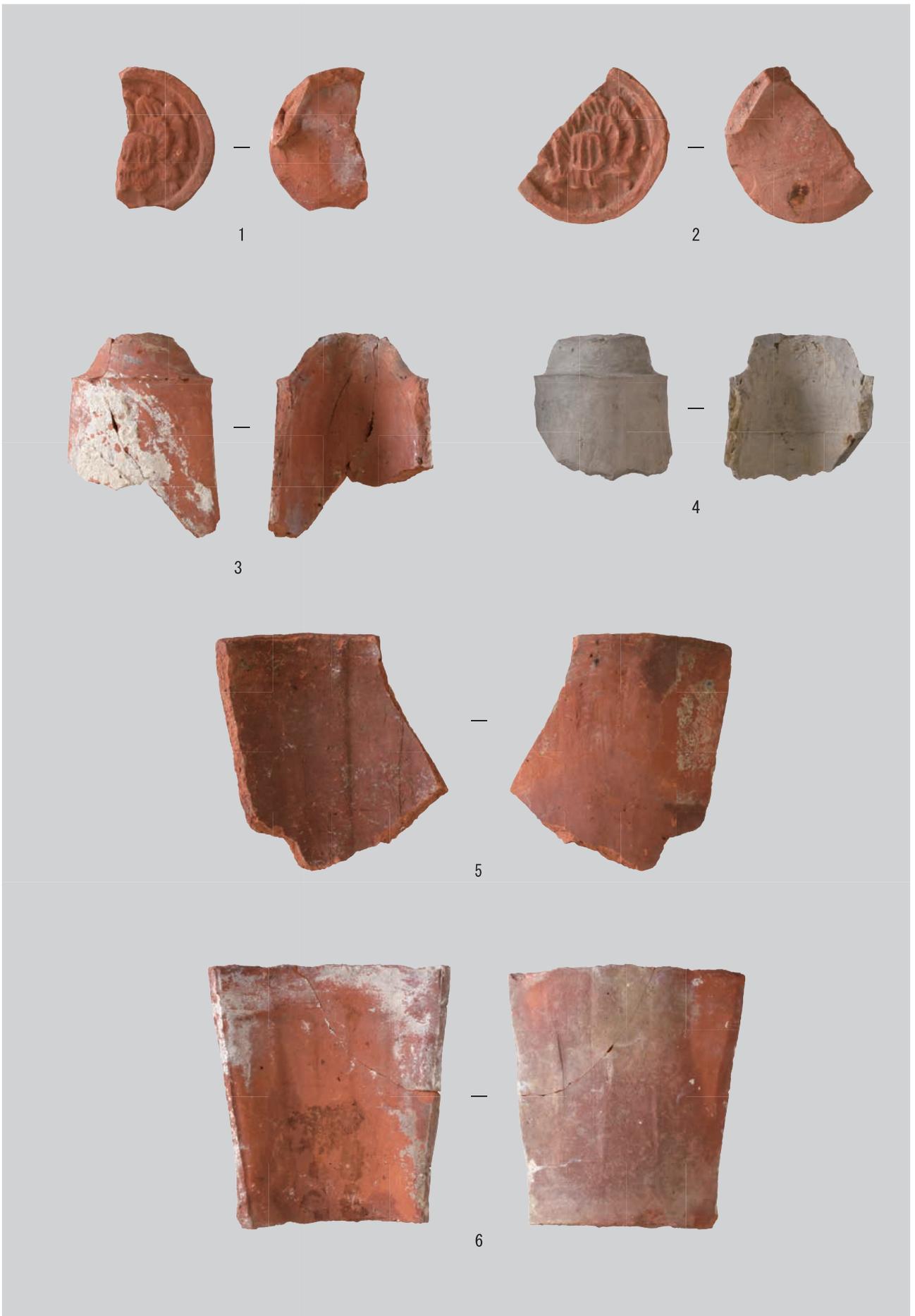
明朝系瓦 B タイプとした製品に類似し、布目が見られず、形状が直線的で扁平な資料である。厚さは 1.2～1.5cm である。器面調整は粗い。細片のため図化を行わず集計のみ行った（第 45 表）。

第 21 表 瓦部位別重量（大和系瓦）

出土地 種類・部位・色			トレンチ 1	トレンチ 4	トレンチ 6	合計 (g)
			I 層	I 層	I 層	
中世大和系 平瓦	筒部	灰			180	180
中世大和系 丸・平不明	筒部	褐	50			50
近代大和系 平瓦	筒部	灰		80		80
近代大和系 棧瓦	端部	灰		40		40
近代大和系 丸・平不明	筒部	灰	90			90
合計 (g)			140	120	180	440



第40图 瓦



图版 36 瓦

第 23 表 瓦観察一覧

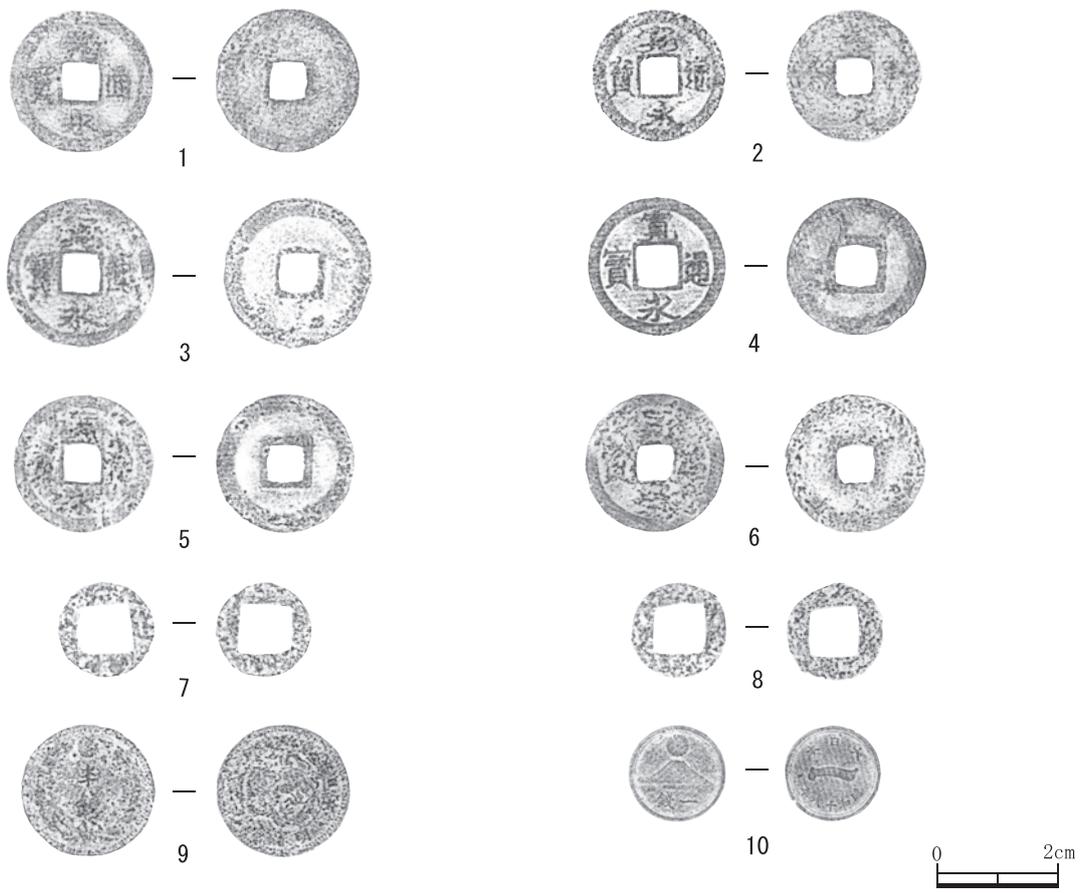
挿図番号 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態の特徴、文様、法量	出土地
第 40 図 図版 36	1	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	文様は鮮明。瓦当裏に指ナデ痕あり。丸瓦部分の大部分は欠損。残存する瓦当径は 13.4cm。瓦当厚さ 2.1cm。	4トレII層
	2	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	文様は鮮明。瓦当裏に指ナデ痕あり。丸瓦部分の大部分は欠損。瓦当断面は顎部分で薄くなる。残存する瓦当径は 15cm。瓦当厚さ 1.9cm。	6トレI層
	3	明朝系	丸瓦	玉縁部	赤色	凸面の玉縁側と玉縁表面に横位の調整痕が見られる。凹面は布目痕、2条の布糸綴り痕が見られる。玉縁裏側面に2面の面取りあり。凸面の大部分に漆喰が付着する。玉縁部 3.5cm、残存長 15.5cm、残存幅 14.1cm。厚さ 1.5cm。	4トレI層
	4	明朝系	丸瓦	玉縁部	灰色	凸面の玉縁側に横位の調整痕が見られる。凹面は布目痕、横位の布糸綴り痕が見られる。玉縁裏側面に面取りあり。混入物に赤土粒を少量含む。玉縁部 3.7 cm、残存長 14.1cm、残存幅 13.2cm。厚さ 1.4cm。	3トレ イジギキ 3 I層
	5	明朝系	平瓦	狭端部	赤色	凸面は丁寧なナデ調整を行い、広端部に横位の調整痕あり。凹面は布目痕が見られ、広端部に浅い桶紐綴り圧痕が3個見られる。残存広端長 21.3cm。厚さ 1.6cm。	6トレイケ サブトレI層
	6	明朝系	平瓦	広端～ 狭端部	赤色	完形品。凸面は丁寧なナデ調整を行い、狭端部に横位の調整痕が見られる。凹面は布目痕が見られ、広端部には浅い桶紐綴り圧痕が6個見られる。長軸 24.7cm、広端長 22.8cm、狭端長 18.3cm。厚さ 1.4cm。	6トレI層

18 銭貨

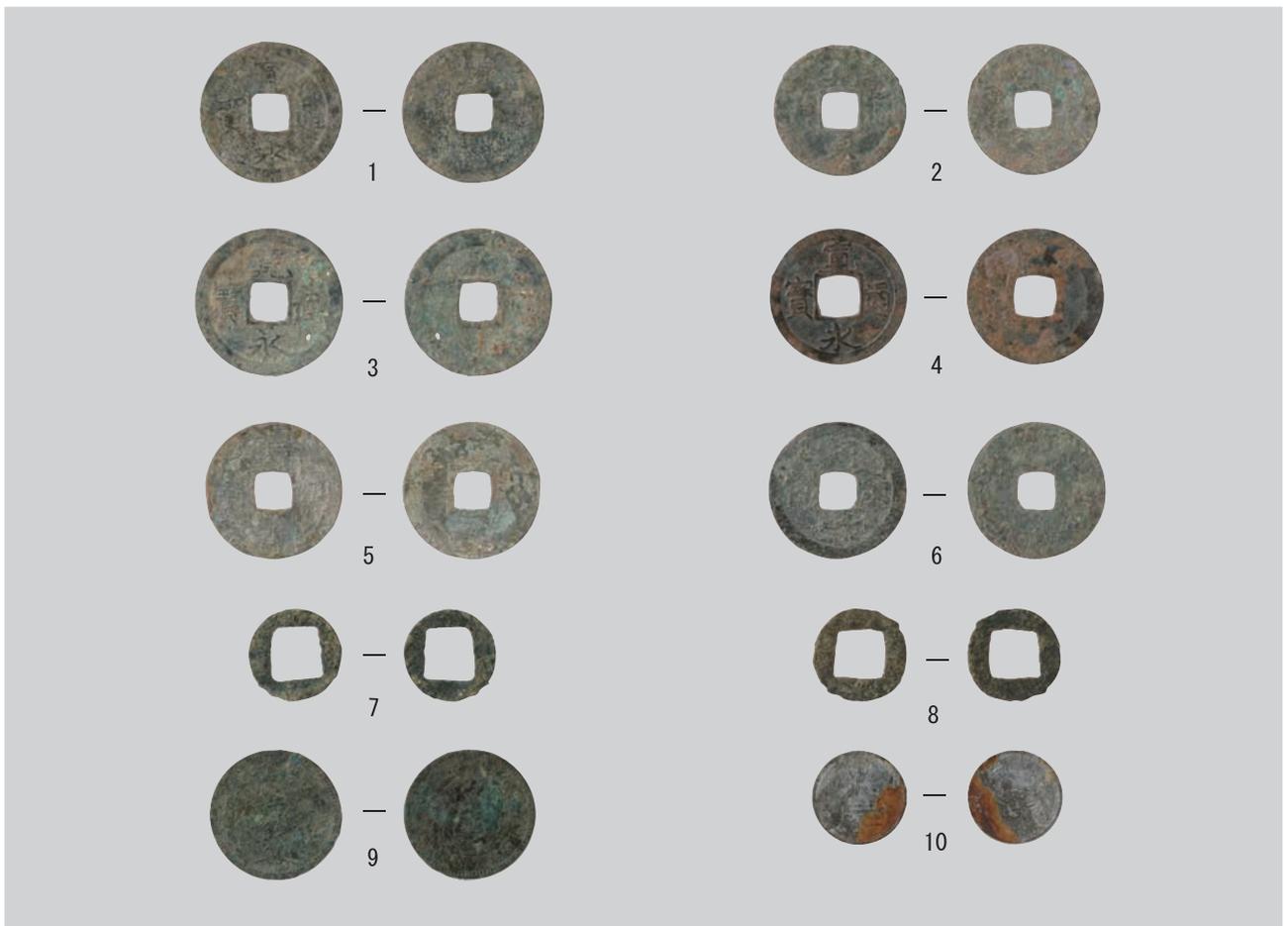
銭貨は総計 34 点が出土した。内訳は寛永通宝が 16 点、不明有文銭が 8 点、無文銭が 5 点、半銭青銅貨が 1 点、桐一銭青銅貨が 1 点、一銭アルミニウム貨が 1 点、百円白銅貨が 1 点、十円青銅貨が 1 点となる。出土する銭貨は近世～近代・現代に限られる。以下に特徴的な資料 10 点を報告する。

第 24 表 銭貨観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	銭種	国・王朝・時期	初鑄年	法量 (cm・g)				備考	出土地
					外径	孔径	厚	重量		
第 41 図 図版 37	1	寛永通宝	江戸幕府	1636	2.38	0.62	0.11	2.49	I 期(古寛永)。	6トレイケ サブトレI層
	2	寛永通宝	江戸幕府	1697	2.20	0.60	0.14	2.52	III 期(新寛永)。	6トレI層
	3	寛永通宝	江戸幕府	1697	2.47	0.62	0.14	2.62	III 期(新寛永)。	4トレI層
	4	寛永通宝	江戸幕府	1697	2.28	0.68	0.10	2.27	III 期(新寛永)。	6トレI層
	5	寛永通宝	江戸幕府	1697	2.31	0.62	0.12	2.72	III 期(新寛永)。	1トレI層
	6	寛永通宝	江戸幕府	1697	2.31	0.62	0.14	2.43	III 期(新寛永)。	4トレ H22 SD7 III層
	7	無文銭	—	—	1.56	0.87	0.10	0.47	中央の穴は隅丸方形を呈する。	4トレI層
	8	無文銭	—	—	1.56	0.82	0.10	0.49	中央の穴は方形を呈する。	3トレI層
	9	半銭青銅貨	明治期	1874	2.20	—	0.14	3.38	近代銭。	6トレII層
	10	一銭 アルミニウム貨	昭和期	1938	1.58	—	0.13	0.55	一銭。後期。	6トレイケI層



第 41 図 錢貨



図版 37 錢貨

19 その他の遺物

中城御殿は、沖縄戦の最中に一部の建物が陸軍少佐の宿舎として使用され、終戦後、一時引揚者の滞在地、首里市役所、首里バス会社を経て、沖縄県立博物館が移転し建設される（沖縄県立埋蔵文化財センター 2011、真栄平 1983）。この時期の中城御殿に関連する遺物として、第 3 章第 4 節 6 で近代の本土産陶磁器、第 3 章第 4 節 15 ではガラス製品としてガラス瓶を報告した。本項ではこれに加え、当時の土地利用の変遷を示す資料の報告を行う。

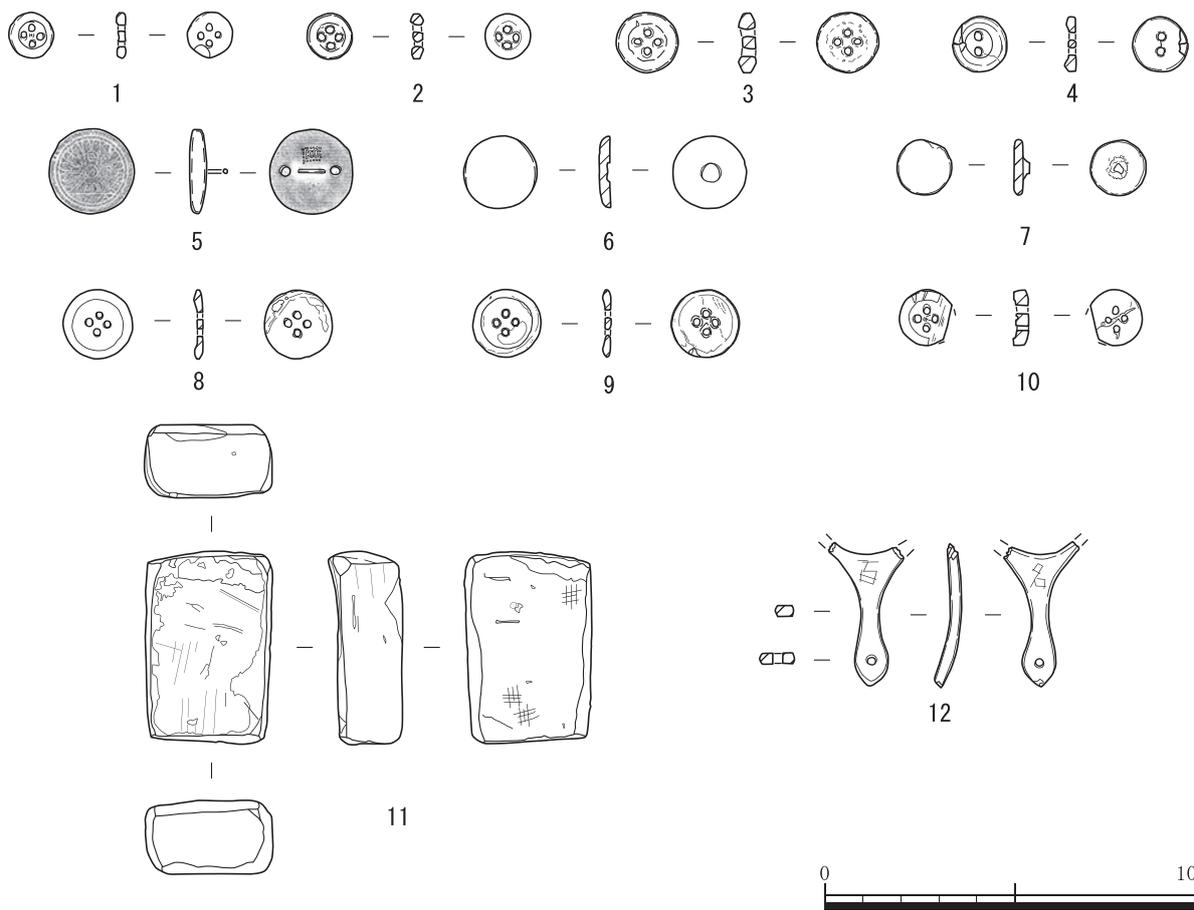
第 42 図 1～4 は磁器製のボタンで、戦時中のもと考えられる。陶製代用品として製作されたものと思われる（仲座 2012）が、産地は不明である。

図 5 は日本国有鉄道制服のボタンと思われる製品で、日本国有鉄道発足の昭和 24（1949）年以降に何かしらの理由で持ち込まれた可能性が高い。また、シャツ等に使用される貝製のボタン（図 6～9）や骨製のボタン（図 10）も見られる。骨製のボタンは骨製品であるが、本項でボタンとして一括して報告する。

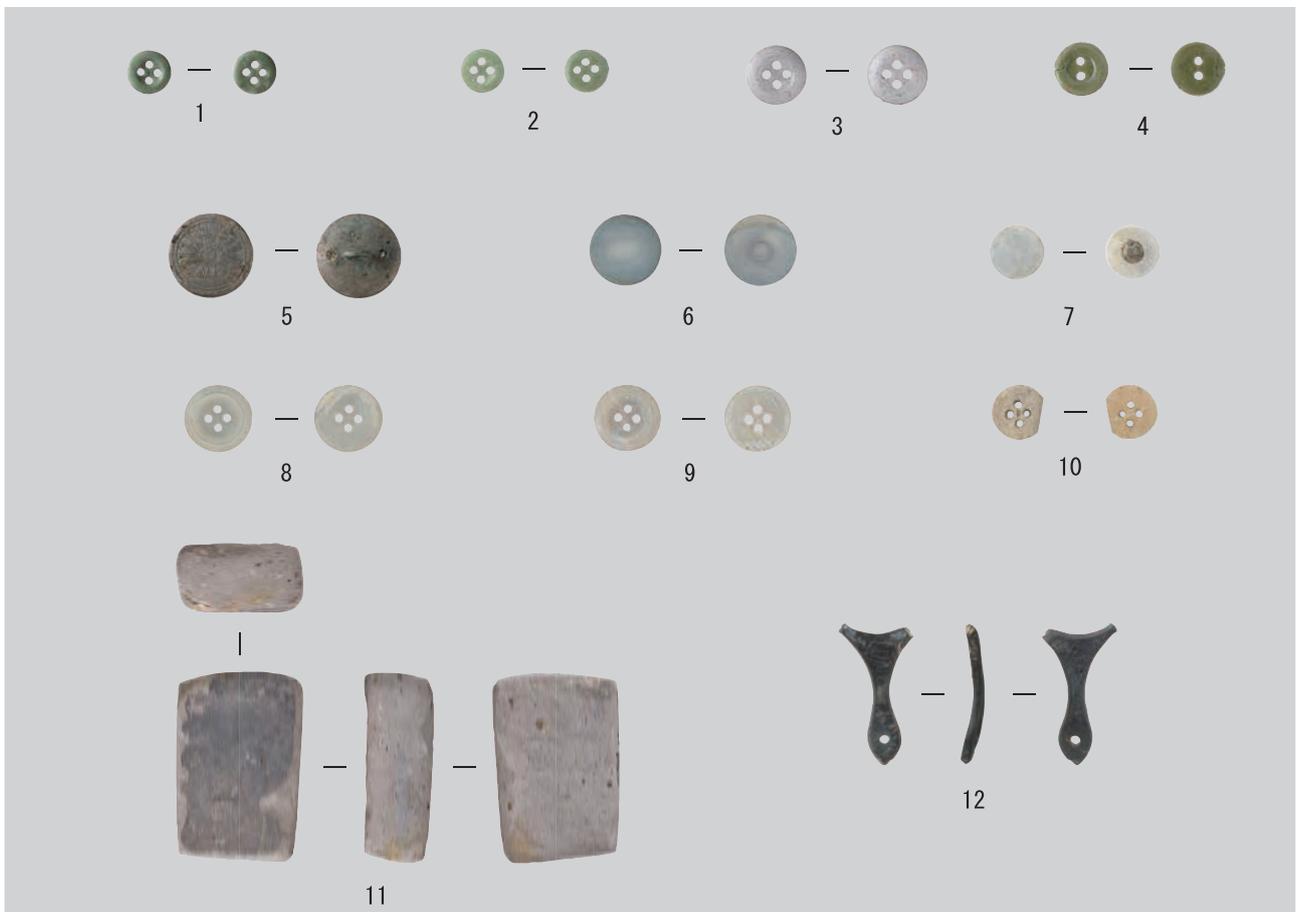
また、砥石としての使用が考えられる瓦製品（図 11）や、用途不明だが「百」「名」の文字が入る樹脂製品（図 12）が出土した。

第 25 表 その他の遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	法量 (cm)			材質	所見	出土地
			縦	横	厚			
第 42 図 図版 38	1	ボタン	1.2	1.2	0.25 0.2	磁器	磁器製のボタン。緑色。糸通し孔を 4 つ穿つ。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。	6 トレ I 層
	2	ボタン	1.2	1.2	0.35 0.2	磁器	磁器製のボタン。緑色。糸通し孔を 4 つ穿つ。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。	4 トレ I 層
	3	ボタン	1.6	1.6	0.35 0.3	磁器	磁器製のボタン。白色。糸通し孔を 4 つ穿つ。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。	6 トレ I 層
	4	ボタン	1.45	1.45	0.25 0.2	磁器	磁器製のボタン。緑色。糸通し孔を 2 つ穿つ。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。作成時に入ったと思われるヒビが両面にあり。	6 トレイケ I 層
	5	ボタン	2.25	2.25	0.45 0.25	銅	日本国有鉄道制服のボタンか。裏面に「K.O」の刻印。	6 トレ I 層
	6	ボタン	1.9	1.95	0.3 0.2	貝	貝製のボタン。全面磨き成形。裏面中央部に窪みあり。	6 トレ I 層
	7	ボタン	1.45	1.45	0.4 0.25	貝	貝製のボタン。両面丁寧に磨き光沢が強く残る。裏面中央部にはめ込まれた金具あり。	6 トレイケ I 層
	8	ボタン	1.85	1.8	0.2 0.15	貝	貝製のボタン。表面は丁寧に磨き光沢が強く残る。糸通し孔 4 点。	6 トレ I 層
	9	ボタン	1.8	1.8	0.2 0.1	貝	貝製のボタン。糸通し孔を 4 点。	6 トレイケ I 層
	10	ボタン	1.5	—	0.3 0.25	骨	骨製のボタン。欠けた部分も含め全面を磨き成形。糸通し孔 4 点。中央部に紐擦れ痕が明瞭に残る。	6 トレ I 層
	11	瓦製品	5.1	3.3	1.7	瓦	灰色瓦片の転用品。側面を研磨し成形。用途は不明。砥石か。	1 トレ I 層
	12	樹脂製品	—	—	0.3	樹脂	柄に紐通し孔。表に「百」、裏に「名」の文字。装飾品か。	1 トレ I 層



第 42 図 その他の遺物



図版 38 その他の遺物

第26表 中国産青磁出土状況

出土地	トレンチ1		トレンチ2		トレンチ3			トレンチ4		トレンチ5		トレンチ6			不明	合計	
	1層	II層	サブトレ 1層	I層	IVa層	I層	II層	IIIb層	セキレット I層	I層	II層	III層	IIb層	IIIa層			池袋遺構 1層
碗	口	3	1	4	5	4	1	1	17	5	15	1	1	1	2	3	59
	胴	9	2	7	6	1	7	2	15	3	12	3	1	1	2	1	74
	底	3	3	1	3	1	1	1	5	1	2	1	1	1	1	1	15
小碗	口	4	1	1	3	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	14
	胴	3	1	4	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	2	1	6
皿	口	3	1	2	1	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	8
	胴	9	2	7	6	1	7	2	15	3	12	3	1	1	2	1	8
皿	口	3	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	3
	胴	13	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3
盤	口	1	1	1	1	1	1	1	3	1	4	1	1	1	1	1	8
	底	3	1	4	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3
杯	口	3	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	胴	9	2	7	6	1	7	2	15	3	12	3	1	1	2	1	8
瓶	口	3	1	1	1	1	1	1	3	1	4	1	1	1	1	1	2
	口	3	1	1	1	1	1	1	3	1	4	1	1	1	1	1	2
壺	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	底	9	2	7	6	1	7	2	15	3	12	3	1	1	2	1	2
袋物	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
	底	10	2	1	1	1	1	1	4	1	6	1	1	1	1	1	1
不明	23	5	1	10	22	26	3	2	1	1	20	8	1	1	1	1	73
合計	23	5	1	10	22	26	3	2	5	2	73	19	1	2	1	2	63
合計	63	8	1	7	1	48	17	3	1	1	102	23	1	1	2	2	307

第27表 中国産白磁出土状況

出土地	トレンチ1		トレンチ2		トレンチ3			トレンチ4		トレンチ5		トレンチ6			不明	合計
	1層	II層	サブトレ 1層	カクラン 1層	I層	IVa層	I層	II層	IIIb層	サブトレ 1層	I層	II層	III層	池袋遺構 1層		
碗	口	1	1	7	1	1	1	1	19	6	1	1	1	2	2	39
	胴	8	1	18	3	1	2	1	34	6	1	1	1	4	3	114
	底	3	1	2	1	1	1	1	11	2	1	1	1	1	1	25
小碗	口	1	1	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	48
	胴	13	2	4	4	1	4	1	12	9	1	1	1	1	1	52
皿	口	1	1	2	1	1	1	1	3	1	2	1	1	1	1	22
	口~底	1	1	2	1	1	1	1	8	2	1	1	1	1	1	24
皿	口	9	2	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	6
	底	9	2	2	1	1	1	1	4	1	1	1	1	3	1	23
杯	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6
	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6
小杯	口	1	1	4	2	1	1	1	3	1	2	1	1	1	1	16
	胴	1	1	3	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6
鉢	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5
	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6
壺	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6
	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6
袋物	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
	口~底	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
蓮華	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
	口~底	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
不明	口	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
	胴部	8	1	10	1	1	8	1	1	1	1	1	1	1	1	430
合計	63	8	1	7	1	48	17	3	1	1	102	23	1	1	2	430

第 32 表 沖縄産施釉陶器出土状況 1

器種・部位	出土地	トレンチ1					トレンチ2		トレンチ3						トレンチ4							
		I層	II層	サブトレ		不明	I層	IVa層	I層	II層	IIIb層	サブトレ		イシジキ 3 1層	セキレット 2	I層	II層	サブトレ2				サブトレ4 I層
				I層	I層							I層	IIIa層					II層	IIIa層	IIIb層	IVa層	
碗	口	188	32	1	10		43	9	64	16	2		1	1		215	65		3	5		
	口～底	3	1												5	1						
	胴	288	64		18		69	12	77	37	2	1	1	1	387	102		1	6			
	底	73	4		5		19	2	19	12	1				83	20		1				
小碗	口	41	15		1	2	8		11	7					62	12						
	口～底	3													3	1						
	胴	24	5		1				15	5	1				3	1						
	底	17	5				5		1			1			20	3						
皿	口	17					3		5	2				1	2	3						
	口～底	1	1												1							
	胴	4					1		1						10	2						
	底	3													2	1						
小杯	口																					
	口～底	1														1						
	底																					
鉢	口	20	2		1		6		4	5	1				48	11						
	口～底																					
	胴	20	4		1		4	1	11	6	1		1	3	90	34						
	底	8	1		1				4	2					11	3						
瓶	胴																					
	口	3													5	1						
	胴	23	7		4		1		4	1					10	2						
	底	11			1		3		5	1					6					1		
壺	耳?	1																				
	口	1					2		2						6	1						
	胴	19	2	1	1				2	1					23	4						
	底	2			1				1						2							
鍋	耳	1					1		1													
	口	14	1					1	9	1	1	1			17	4				2		
	胴	6	2				4	1	24	7					22	4						
	底	42	12		1				7	2					24	2						
蓋	耳	3					1		1						2							
	口		1																			
	胴	3	1				1								5							
	底	5					5		1						10	3						
急須	底	17	3		1			1	10	4	1		1		11	3						
	底～袴									1					9	2						
	袴														1							
	袴														1							
急須	口	8	1		1		3	1	3	2	3				13	4						
	口～底																					
	注口	5							2						1	4						
	胴	116	14		13		8	1	54	15					50	14				1		
アンピン	底	30	5		3		2		10	3					27	3						
	耳	3					1		2						6	1					1	
	胴														1	1						
	把手	4													4	2						
酒器	注口	1					1															
	胴								3						2	3						
	底	1													3							
火入	胴								1													
	口	5	1		1				2	1					11	2						
	口～底														1							
湯呑み	胴	7							2						3	2						
	底	2							5						8	1						
	底	2																				
灯明具	口	1								1					2							
	口～底									1												
	胴									1												
袋物	底									1												
	口														2							
	胴	45	12		2		60	8	27	16	2		1		144	48	1		6		1	
不明	底														6	3						
	口																					
	口～底																					
不明	胴	1					2		37	18		2			50	17			5			
	底	12	1	1	1					1					2	1						
	不明																					
合計	1111	197	3	68	2	257	37	439	173	16	5	5	6	1	1440	392	1	5	26	1	1	

第 34 表 陶質土器出土状況 1

器種・部位		トレンチ1		トレンチ2		トレンチ3						トレンチ4								
		1層	II層	サブトレ	カクラン	不明	1層	IVa層	1層	II層	IIIb層	サブトレ		イシジキ3	セキレツ2	1層	II層	III層	サブトレ2	
				1層	1層							1層	IIIa層						1層	IIIa層
碗	底	1	1																	
皿	底	1																		
鉢	口	13	3		2		7		4	2						19	3			
	胴	10	3		2		5		4	1						46	7			
	底	3					2		3							9	2			
植木鉢	底																			
壺	口												1							
	胴												1			1				
	底	4							1											
鍋の蓋	撮み	4	4													20	4			1
	撮み～庇															1				
	庇	26	1		2											47	18			1
	胴	39	7													11				1
鍋	口	42	10		1	1	4	1	9	3	3			1		129	27			
	口～底															2	1			
	胴	16	5	1			4		96	22	8	1	3	1		43	7			
	底	36	6		5		2		3	4						24	2			
	耳	12	3				1		1		1					12	6			
鍋か急須	胴	312	86	3	23	2	82	4								841	246	1	4	7
	底	185	59		12											6	3			
蓋	撮み								1	1										
	撮み～袴								2		1									
	胴								4	1										
	袴						1													
	庇						2		9	1										
急須の蓋	撮み															1				
	庇	2														4	1			
	庇～袴	4			1											7	1			
	袴	3														1	1			
	胴部	1																		
急須の蓋か	庇～袴																			
急須	口	9			2		2		5							26	37			
	胴	14	3		1		2		38	8	7			1	159	1				
	底	12	16		3					1					7					
	注口	4	1		2	1	1		3	1					12	3				
	耳	4													6	3				
	把手														1					
火炉	口	9	6		1				6	1					22	10				
	胴	65	10		1		3		23	2	2		3		72	20				
	底	5													12	6				
	突起								1											
	耳	2	1				1		1						5	2				
火入	口	1																		
焜炉	突起								1											
灯明皿	口	13								1					2	1				
	胴	1																		
	底														1					
袋物	胴						1													
	底																			
フライパン状製品	口																			
七輪	胴						1													
不明	口								2											
	胴	21	2		2				36	14	6			1		5				
	底	2	2																	
合計		876	229	4	60	4	122	5	253	63	28	1	3	8	1	1554	412	1	5	9

第 34 表 陶質土器出土状況 2

器種・部位		トレンチ4		トレンチ5	トレンチ6											不明	合計		
		サブトレ2	サブトレ4	1層	1層	II層	III層	IIIa層	サブトレ1	サブトレ2	池状遺構		II層SS					表採	
		IVa層	I層						IIIa層	I層	1層	サブトレ1層	3検出	5検出	6検出	9検出			
碗	底				1														3
皿	底																		1
鉢	口				9	13		1			3		1				1		81
	胴				4	4					1								87
	底				7	2													28
植木鉢	底				1														1
壺	口																		1
	胴																		2
	底																		5
鍋の蓋	撮み																		33
	撮み～庇																		1
	庇																		95
	胴																		58
鍋	口				32	20	1			1	6					3			294
	口～底																		3
	胴				8	271	125	13	1	4	11	26	8	1	1				676
	底	1			2	12	8	1		1	3	8							118
	耳				8	1						1							46
鍋か急須	胴		1																1612
	底																		265
蓋	撮み				9	4					1	1							17
	撮み～袴																		3
	胴				6	2	1						1						15
	袴				1														2
	庇				17	6			1	1	6	1							44
	庇～袴				3	2	1				1								8
急須の蓋	撮み																		1
	庇																		7
	庇～袴																		13
	袴																		5
	胴部																		1
急須の蓋か	庇～袴			1															1
急須	口				2														83
	胴					7													241
	底																		39
	注口				3	2													33
	耳				3	2						1							19
	把手																		1
火炉	口				10	3					2								70
	胴				19	9			1										230
	底				4	1													28
	突起																		1
	耳																1		13
火入	口			1	1														3
焜炉	突起																		1
灯明皿	口				5														22
	胴																		1
	底																		1
袋物	胴																		1
	底					1													1
フライパン状製品	口				1														1
七輪	胴																		1
不明	口				1														3
	胴				45	21	1		9	1	2	38	7			1		2	214
	底				2														6
合計		1	1	11	477	234	18	1	17	17	3	94	16	3	1	4	1	3	4540

第 38 表 煙管出土状況

出土地		トレンチ1		トレンチ3		トレンチ4		トレンチ6				合計	
		I層	カクラン	I層	インジキ3	I層	II層	I層	II層	III層	池状遺構		
			I層		I層						I層		I層
沖縄産施釉陶器	雁首	7	2	1		1				1	1		13
	吸口	2		1		1			3			1	8
沖縄産無釉陶器	雁首	1		1		4	2	2	1		1		12
銅製品	雁首				1								1
	吸口							1					1
合計		10	2	3	1	6	2	3	4	1	2	1	35

第 39 表 骨製品・貝製品出土状況

種類・器種		トレンチ6				合計
		I層	II層	池状遺構		
				I層	サブトレI層	
骨製品	篋か			1		1
	歯ブラシか				1	1
	ボタン	1	1			2
	不明			1		1
貝製品	ボタン	2		2		4
	貝窓	1		1		2
	不明	1				1
合計		5	1	5	1	12

第 41 表 石器・石製品・滑石製品・石造製品出土状況

種類・器種		トレンチ1						合計	
		I層	II層	不明	I層	I層	I層		池状遺構
									I層
石器	敲石					1	1	2	
石製品	砥石	4	1					5	
	硯				1			1	
	硯か					1	1	2	
	石筆					1		1	
	石板	1						1	
	石盤				1			1	
	不明			1		1		2	
滑石製品	不明						1	1	
石造製品	礎石の一部か					1		1	
合計		5	1	1	2	5	2	17	

第 40 表 ガラス玉・ガラス製品出土状況

種類・分類		トレンチ1		トレンチ3		トレンチ4		トレンチ6				合計	
		I層	I層	I層	I層	II層	池状遺構						
							I層	サブトレI層					
ガラス玉	—	1	1									2	
ガラス製品	ビー玉		1	1	6	2	3				1	13	
	鉢										1	1	
	管					1						1	
	栓										1	1	
	装飾品か				1							1	
	瓶	糊瓶							1				1
		油瓶							1				1
		インク瓶				4	5	5	5				19
		飲料瓶				1							1
		調味料瓶					1						1
		調味料瓶か					1						1
		薬瓶	1		1	7	6	3	3				21
		薬瓶か					1	1	1				2
		目薬瓶				1	1	1	1				4
		目薬瓶か								1			1
		香水瓶か									1		1
		化粧瓶				7	3	2	2				14
		化粧瓶か				1					1		2
		整髪料瓶				1							1
		整髪料瓶か				1							1
		染料瓶				1						2	3
不明瓶				1	1							2	
蓋							2	1			3		
電球の一部					1					3	4		
不明			1	1						1	3		
合計		2	2	4	33	22	19	23				105	

第 42 表 基石出土状況

分類	出土地		トレンチ6		合計
	トレンチ1		I層	II層	
石製品	1		1		2
貝製品				1	1
合計	1		1	1	3

第 43 表 埴・煉瓦出土状況

種類・色調・部位		出土地		トレンチ1		トレンチ3			トレンチ4	トレンチ6		合計
		I層	不明	I層	カクラン I層	I層	II層	イシジキ3 I層	I層	I層	池状遺構 I層	
	褐色	不明				2		1			3	
	赤色	不明		1			1	1	5		8	
煉瓦	—	—				2					2	
合計				1	1	1	4	2	4	7	1	21

第 44 表 銭貨出土状況

銭種	出土地		トレンチ1	トレンチ3	トレンチ4		トレンチ6			不明	合計
	I層	I層	I層	H22 SD7III層	I層	II層	池状遺構		表採		
							I層	サブトレI層			
寛永通寶	5		3	1	5		1	1			16
開〇〇〇					1						1
〇〇〇寶					1						1
無文銭	1	2	1								4
無文銭か			1								1
半銭青銅貨						1					1
桐一銭青銅貨									1		1
一銭アルミニウム貨							1				1
十円青銅貨			1								1
百円白銅貨			1								1
不明銭	2		2		1		1				6
合計	8	2	9	1	8	1	3	1	1		34

第 45 表 その他の遺物出土状況

種類・器種・部位		出土地		トレンチ1	トレンチ3	トレンチ4	トレンチ6			合計	
		I層	不明	I層	I層	I層	II層	池状遺構			
								I層	サブトレI層		
樹脂製品	不明	不明	1							1	
瓦製品	不明	完形	1							1	
板状瓦製品	—	端部			2					2	
陶器か	不明	不明	1							1	
カムイヤキ	壺	胴		1						1	
木製品	ハシカ	—				2		3	1	6	
土製品	人形か	胴			1					1	
万年筆	—						1			1	
炭素芯棒	—			1	1		1			5	
不明	壺	胴			1					1	
	不明	口				1	2			3	
		不明				1	1	1		3	
合計				3	2	5	4	5	4	6	29

第4章 総括

1 はじめに

以上、平成26年度に実施した中城御殿跡発掘調査の報告を行った。ここでは総括として、検出された遺構を中心に概説したい。

平成26年度の調査では、中城御殿の北側に6か所のトレンチを設定した。その結果、地表下50cm前後の高さから各種の遺構が検出された。これらの遺構の多くは明治3（1870）年に着工し、明治7（1874）年に完成した中城御殿の遺構であるが、それ以前の遺構や昭和20（1945）年の沖縄戦後の遺構も存在する。

2 近世以前

これまでの調査により、中城御殿の基盤層は、琉球石灰岩、泥岩（クチャ）、砂岩（ニービ）、赤土（マージ）であることが確認されているが、今回の調査では近世以前の遺物は少量出土したが、遺構は確認できなかった。

3 近世～明治3年

18世紀初頭の様子を描いた「首里古地図」によると、中城御殿が造営される以前は北谷御殿、本部按司、福地親雲上、侍易、阿嘉嶺筑登之の敷地であったことがわかる。今回の調査にて設定した調査区は侍易の敷地付近に相当する。

また明治元（1868）年には、大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた土地に中城御殿を移すことが決まったと「球陽」に書かれている。大村按司は北谷御殿と同じ系譜なので、北谷御殿の敷地を引き継いだと考えられる。摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上の敷地は、本部按司、福地親雲上、侍易、阿嘉嶺筑登之の敷地を引き継いだと考えられる。

以上のような時期の遺構には、付近の出土遺物及び遺構層序よりトレンチ2にて検出した石列1が相当する可能性が考えられる。建物基壇などの遺構であるかどうかは不明だが、石の加工の粗さなどからも中城御殿以前のものであることが想定される。

4 明治3年～昭和20年（中城御殿当時）

今年度の調査により、建造物の位置の資料となる遺構がいくつか検出された。

トレンチ1の位置には女中部屋及び寄満があったとされており、その中でも石列1が寄満に関連する遺構と考えられる。平成22年度の調査では寄満の建物周囲から排水溝としての溝が検出されている。今回の調査で検出した石列は、25～30cm前後の平らに加工された石を用いており、平成22年度に検出した溝の底石と同様なものであると考えられ、寄満建物周囲に溝が構成されていたことが考えられる。溝と考えられる遺構は他にもトレンチ4から溝1が検出されており、寄満周辺の排水状況を窺うことができる。溝以外には、建物基壇と考えられる遺構が検出されている。トレンチ3には北之御殿と御寝廟殿が位置しており、その中から逆L字状に石列3が検出されている。石列の南及び東側には栗石が敷き詰められ、北之御殿基壇が想定される。建造物の位置については、これまでの調査により大部分が明らかになっているが、今回の調査によって得られた遺構も、それらを補足する資料となる。

今年度の調査によって新たに得られた資料として、トレンチ6から検出した集石や池状遺構などが挙げられる。トレンチ6は中城御殿の北側、上之御殿との境目手前であったとされる炭御蔵が位置する。建物基礎と考えられる集石遺構が11基検出された。各集石は直径1mほどの大きさと組み、

1 間ほどの間隔で配置される。範囲は南北に 3 間、東西に 4 間ほどに広がる。周囲を溝で囲まれ、東側には北之御殿などに繋がると考えられる砂利道が隣接する。これらの調査成果により、炭御蔵の規模及び位置を把握することができた。また、これまでの資料にない遺構として、トレンチ 6 南側から池状遺構が検出された。砲撃などにより南東側が破壊されているが、東西に 5 m ほどの大きさになると思われる。南北方向はトレンチの外に続くため、どの程度の規模になるかは不明だが、トレンチ 6 付近を通る平成 22 年度調査のトレンチ 4 からは検出されていないため、恐らく 3～4 m ほどの大きさになると思われる。床面は粘土質の土の上に石灰岩を敷き、その上からモルタルを塗り固めている。池の側面は石積みを積み、その面側にモルタルを塗り固める構造になっている。モルタルを使用していることから大正末から昭和初めにかけて造営されたものと考えられる。この池状遺構は聞き取りや古写真などでは確認されておらず、同様な池が上之御殿の南側でも確認されているため、関連性についても今後において更なる検証が必要とされる。

5 昭和 20 年～現在（沖縄戦後）

調査区の多くの場所から、現代の遺構が検出されている。トレンチ 4 を南北に縦断するパイプ及びコンクリート基礎など、以前の県立博物館のあった時期などに設置されたと考えられる遺構等が残っている。

以上、平成 26 年度に実施した中城御殿跡の発掘調査報告を行った。これまでの調査で中城御殿の建物遺構が良好な状態で残されている状況が明らかになっているが、今回の調査によってさらなる補足資料及び、炭御蔵といった新規の建物遺構の検出により、破壊される前の建物の状況など、今後の整備計画に必要な資料を得ることができた。

今後の調査においては、現在不明瞭な部分の多い上之御殿地区の調査を行い、中城御殿全体の様相や建物間の関連性を明らかにすることで、整備計画に必要な資料を完成させていくことができると思われる。

最後に、調査及び資料整理作業に際しては多くの方々に力を貸していただき、また指導・助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

第1章

第1節

沖縄県土木建築部 1994『首里城公園基本設計』沖縄県土木建築部

首里城公園基本計画調査委員会 1993『首里城公園基本計画調査報告書』首里城公園基本計画調査委員会

第2章

第1節

平凡社地方資料センター 2002『沖縄県の地名 日本歴史地名体系 48巻』平凡社

球陽研究会（編）1974『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成 5 角川書店

都築昌子 2005「龍のひそむ島ー近世琉球の風水ー」『沖縄県史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会

真栄平房敬 2009「中城御殿の思い出と復元促進にむけて」『蘇る首里城 首里城復元期成会 35年の歩み』
首里城復元期成会

第2節

井伊文子 1972『仏桑花燃ゆ』燈影舎

井伊文子 1978『仏桑華の花ひらく』柏樹社

沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿 石牆工事地域にかかる第一次発掘調査』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿 旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿 旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館 50年史』沖縄県立博物館

第3章

第2節、第3節

沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1993「第2節 遺構」『旧中城御殿 石牆工事地域にかかる第一次発掘調査』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1994「第2節 遺構」『旧中城御殿 旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査』

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1995「第2節 遺構の状態」『旧中城御殿 旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査』

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館 50年史』沖縄県立博物館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010「第2節 遺構」『中城御殿跡 ー県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書
(I) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011「第2節 検出遺構」『中城御殿跡 ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報
告書(2) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012「第4節 層序と遺構・主な遺物」『中城御殿跡 ー県営首里城公園 中城御殿
跡発掘調査報告書(3) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013「第4章 層序・遺構・遺物」『中城御殿跡 ー県営首里城公園 中城御殿跡発
掘調査報告書(4) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第67集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016「第4章 層序・遺構・遺物」『中城御殿跡 ー県営首里城公園 中城御殿跡発
掘調査報告書(5) ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2018 「第4章 層序と遺構」『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（6）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第95集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄風土記刊行会 1970 『首里古地図』

第4節

1 中国産青磁

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究5』
沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

2 中国産白磁

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

3 中国産青花

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

4 中国・タイ産褐釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
金城貴子 2011 「第5章 第5節 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器」『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
仲座久宜 2012 「第3章 第5節 5 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器」『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（4）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第67集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(5)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 沖縄県立埋蔵文化財センター
羽方誠 2016「第4章 第7節 トレンチ6の遺構と遺物」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(5)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 沖縄県立埋蔵文化財センター

5 その他の輸入陶磁器・洋食器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

6 本土産陶磁器

浦添市教育委員会 1994『内間西原古墓群―都市計画道路建設工事に伴う緊急発掘調査―』浦添市文化財調査報告書第22集 浦添市教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

7 沖縄産施釉陶器

金城貴子 2017「第3章 第5節 第2項 遺物」『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4―普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第90集 沖縄県立埋蔵文化財センター
佐賀県立九州陶磁文化館 1998『沖縄のやきもの―南海からの香り―』佐賀県立九州陶磁文化館
島袋春美 2001「第V章 第18節 沖縄産施釉陶器」『天界寺跡(Ⅰ)―首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
仲座久宜 2012「第3章 第5節 8 沖縄産施釉陶器」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

8 沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書1―普天間古集落遺跡―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第74集 沖縄県立埋蔵文化財センター
仲座久宜 2012「第3章 第5節 10 沖縄産無釉陶器」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

9 陶質土器

曾根信一 1983「アカムヌー」『沖縄大百科事典 上 ア～ク』沖縄タイムス社
宮里知恵 2012「第3章 第5節 11 陶質土器」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

10 土器・硬質土器・埴埴・瓦質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

11 円盤状製品

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

12 金属製品

仲座久宜 2013「第3章 第5節 16 金属製品」『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
山本正昭 2018「第5章 遺物 第2節 器物」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第95集 沖縄県立埋蔵文化財センター

13 煙管

石井龍太 2011「琉球諸島出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～」『東京大学 考古学研究室研究紀要 第25号』東京大学考古学研究室
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

14 骨製品

仲座久宜 2012「第3章 第5節 16 骨・貝製品」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
土岐耕司 2016「第Ⅲ章 第3節 2. 出土遺物(5) 近代骨製品」『平安山原A遺跡―桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19・21・22・23年度)―』北谷町文化財調査報告書 第38集 北谷町教育委員会

15 ガラス玉・ガラス製品

岸本竹美 2011「第5章 第21節 ガラス玉」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
仲座久宜 2012「第3章 第5節 17 ガラス玉・ガラス製品」『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

16 石器・石製品・石造製品・基石

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

17 瓦・塼・板状瓦製品

石井龍太 2016 「瓦当笥の移動にみる琉球近世瓦の生産 その2－琉球近世瓦の研究－」『南島考古 No. 35』
沖縄考古学会

上原静 2008 「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学 総合学術研究紀要 第11巻 第2号 通巻第14号』沖縄国際大学総合学術学会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『東村跡－沖縄県立離島児童生徒支援センター建設に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 沖縄県立埋蔵文化財センター

宮城明恵 2012 「第3章 第5節 19 瓦・塼」『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

18 銭貨

永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

土岐耕司 2016 「第Ⅲ章 第3節 2. 出土遺物(1) 近代銭貨」『平安山原A遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19・21・22・23年度)－』北谷町文化財調査報告書 第38集 北谷町教育委員会

19 その他の遺物

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

仲座久宜 2012 「第3章 第5節 22 その他の遺物」『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

真栄平房敬 1983 「中城御殿」『沖縄大百科事典 下 ナ～ン』沖縄タイムス

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどうんあと							
書名	中城御殿跡							
副書名	県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)							
巻次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	田村 薫、奥平大貴							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	平成31(2019)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかぐすくうどうんあと 中城御殿跡	おきなわけん なほし 沖縄県那覇市 しゅりおおなかつちやう 首里大中町1 ちやうめ ばん 丁目1～3番	472018	—	26° 13' 15"	127° 43' 05"	2014.06.02～ 2014.12.22	450㎡	県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中城御殿跡	屋敷跡	近世～現代	溝 石列 砂利道跡 池 集石	中国産青磁、白磁、青花 中国・タイ産褐釉陶器 その他輸入陶磁器、洋食器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器、土器、硬質土器 埴塙、瓦質土器 円盤状製品 金属製品 煙管 骨製品 ガラス玉、ガラス製品 石器、石製品、石造製品 碁石 瓦、磚 銭貨				
要約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870年から1945年まで存在していた。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は遺構の残存状況を確認する目的で6本のトレンチを設けて行い、溝や石列、砂利道跡、池などの遺構が良好な状態で検出された。							

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集

中 城 御 殿 跡

— 県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書（7） —

発行年 2019（平成31）年3月31日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098（835）8751・8752

印 刷 有限会社 ふたば印刷
〒900-0027
沖縄県那覇市山下町22-3
TEL 098（858）2211

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

首里古地図

康熙39 (1700) 年に作製されたものである。これより2年前に江戸幕府から全国各藩に対して、地図を作製提出するよう指令が出ておるので、この地図もその一環であろう。
ところが、この地図も時代が経つにつれて、汚損はなほだしく、咸豊のはじめごろには開くことさえ出来ず、まったく使用にたえない状態になっていた。秋津家譜によると、九世紫俊(さいしゆん)が絵図書調方筆者として、この地図を再調製したことがみえている。当時、原因は使用できないので、屋敷図帳、山敷図帳を参照し、各当事者にきいたりして、この仕事を完成し、褒賞を賜っている。

图中約千数百の公署、屋敷等が綿密に記載され、270年前の状況を詳しく伝えていて、この地図が年代推定に疑問を宿した理由は1700年当時の状況を伝えながらも、当事者たちの記憶違い、あるいは伝え違いによって、後代的な要素があるからである。

この地図の原因は6畳敷の大きさと、研究に不便なるため、よく観察して書きあらためたものである。(嘉手納宗徳)



